案山子

2020冬

新潟大学文芸部

目次

目次 1
水泉動 1
余白 8
ぽんこつどけい 11
Sing 13
誰が為の贈り物 14
ギフト学研究室備忘録 29
愛しいの果実 42
憧れたあの人 55
終わりのないエンドロール 64
火門と菊 79
眼鏡めがねメガネ 93
奥付 98

目次

◆お題作品『解』
・水泉動　如月深琴
・余白　中村

◆通常作品
・ぽんこつどけい　雪兎
・Sing　雪兎
・誰が為の贈り物　佐久間佳雪
・ギフト学研究室備忘録　笠原ざわ
・愛しいの果実　どこぞの佐藤
・憧れたあの人　炬燵猫
・終わりのないエンドロール　フラれました
・火門と菊　大島治輔
・眼鏡めがねメガネ　中村

水泉動

水泉動

如月深琴

寝汗が酷い。夢見が悪くて飛び起きてしまったせいで体も変に怠い。寝汗を吸い込んで嫌な湿気を持ったパジャマと悪夢を見た後特有の気だるさに、せっかくの休みの始まりがこんなだなんてとため息をつく。

枕元に置いて充電コードに繋いでいたスマホの画面を付けて目を向ける。

「まだこんな時間か.....二度寝できるじゃん」

普段であれば喜んで二度寝をしているところだが、先程見た夢の内容が内容であるだけにその気も起きない。同様の理由で、活発に活動する気にも今のところならない。パジャマが吸い込んだ汗がじんわりと外気によって冷えていくのが分かり、分かりやすく体が震える。ポリエステルで覆われた腕に鳥肌が立ったのが、見なくても分かった。

「さむ.....助けてファンヒーターさん」
　あまりの寒さに、先日我が家にやってきたファンヒーターに助けを求める。部屋の隅で静かに佇んでいたそれを、high と書いてある所までツマミを回して稼働させる。　暖かさを求めてファンヒーターをつけたが、当然ながら最初に送り出させる風は冷たい。素足が冷風にさらされて、また体を震わす。
「これが地獄か.....」
　パジャマがどんどん冷えていく。こたつをつけてもすぐには暖まらない。手っ取り早く体を温めるにはどうするべきだろうか。寒くて頭が回らない。ああそうだ、お風呂に入ろう。湯船に浸かるのは少し面倒だからシャワーだけで。
　そうと決めたらと、下着棚へ向かう。お気に入りの紺色を手に取り、タオル棚からバスタオルを取り、お風呂から戻ってきた時のためにこたつをつけておく。
「ちょっと熱めのお湯で入ろうかな」
　関係ないけれど、一人暮らしを始めてから独り言が増えてしまった気がする。

「ここが天国か？」
　お風呂から戻ると、目論見通り部屋は暖まっていた。依然として枕元で充電されたままのスマホをもぎ取る。頭の中で兄が「コードが断線するだろやめろ」と怒っている気がした。時刻は先程から約三十分ほどが経った頃。湯冷めしないように体が暖かさを感じているうちに服を着て、こたつに潜り込む。しっかりしているけれど優しい温かさがこたつの中に入った瞬間に私の体を包み込む。あまりの居心地の良さに、ふぅ、と息をつく。そうして落ち着いてしまうと頭を占めるのはあの悪夢だった。先程までは外的要因の不快感が頭を占めていた。けれど現在、その不快感は全て解消されてしまった。外的要因が無くなったら、次は内的要因の不快感が全身を襲う。
　何故あんな夢を見てしまったのだろう。もう忘れたと、もう克服したと思っていた。三年も経っているから。
――「無駄にしたわ」
「っあ.....」
　思い出したくない、やめて、来ないで。もうあんなことはしないから、分かってるから、お願い。　一度全てを思い浮かべてしまったら、もう他のことが頭に入ってこない。頭の中を、そして腹の奥底を、黒い何かが這いつくばっている。胸がぐるぐるとかき混ぜられている。面白くもないのに口角が上がる。
「.....お腹減った」
　解消されきってしまったと思っていた外的要因による不快感が私の体を平手打ちしてくる。腹が減っては戦は出来ぬ。戦をするつもりは無いけれど、この不快感達と立ち向かうためにもこの空腹を満たそう。
　楽園のようなこたつを抜け出し、居心地のいいエステ室のような部屋を一歩踏み出し、台所へ向かう。廊下のフローリングが冷たい。温まった足先がまた冷やされていく。温まったと思っていただけで、もともと足は冷えていたのかもしれないが、そうだとしてもフローリングの冷たさは確実である。廊下全体の冷たい空気が私を刺しているように

感じてしまい、黒い何かが私の中で増殖する。
　長居は無用だと、冷蔵庫を漁る。何かあっただろうかと漁り始めてからふと思う。冷蔵庫に入っているやつよりも、外にあるものの方が手間が省けるのでは無いだろうか。
「お茶漬けみっけー」
　予想通り、冷蔵庫横のキッチンラックにお茶漬けの素が置かれていた。買った記憶は無いので、以前親が来てくれた時に買っていってくれた物だろう。お米は炊いて冷凍したものがあるので、あとは湯を沸かすだけだ。少し小さなどんぶりに冷凍した白米を入れて、レンジで解凍していき、その間に水を電気ケトルに入れていく。手に水が触れないように注意していたが、結局手の甲に水がかかってしまった。冷えきった空気にさらされてすっかり冷えてしまった指先の感覚がない。
「ピー」
「ハイハイ今行きますよぉ」
　電子音を盛大に鳴らして仕事の終了を主張してくる電子レンジさんからどんぶりを取り出す。ほんのりと暖かいどんぶりで手を温めたいと考えてしまうがそうすると、どんぶりもそうだが、もれなくご飯が必要以上に冷えるのでやめる。
　どんぶりとお茶漬けの素と木製スプーンを手に、楽園に戻る。こたつにどんぶりを置いた瞬間に、先程の電子レンジと同じように電子ケトルが仕事終了を主張してくる。耳がつんざくのでもう少し静かにしていただきたい。
「さぁて食べよおっと」
　ぬるめのご飯にお茶漬けの素をかけて、その上から沸騰したてのお湯を全体に熱がいきわたるようにかけていく。木製のスプーンでご飯を少し崩すと、見慣れた美味しそうなお茶漬けが出来上がる。
「いただきます」
　食べ終わったら、少し散歩に行こう。

　お気に入りのコートとブーツを身につけて外へ出る。外へ出るのは嫌いだけれど、あのまま家にいたら家が逃げ場でなくなってしまう気がしたので仕方がない。負の感情は、外で発散しないと。家は常にリラックス出来る場であってほしい。
　外へ出たとはいえ、そこまで遠くに行くつもりもないので適当に辺りをふらつく。ほんのりと雪が積もっていて、けれど中途半端な量だからその大半が溶けていて踏みつける度にぐじゅりと嫌な音を発する。真冬にしては暖かい日で、今日は珍しく太陽も出ているから、そのせいもあるだろう。
　足元の雪を見るために俯かせていた顔を上げる。木の枝に積もった雪がほんのりと溶けて、太陽の光でキラキラと輝いていた。さらにその奥を見ると、冬独特のやわらかさを持つ太陽がこちらを覗いていた。周りを見渡すと、学生が友達と笑いながら歩いていた。自分を取り巻く今の環境に自分がそぐわない気がして、また足元に目をやる。
　ふと、近くに公園があったことを思い出して、そこに逃げ出したくなった。いつかの時に見つけた、いつもあまり人がいない公園。あそこならば誰にも邪魔されず、自分の惨めさを必要以上に感じなくて済むかもしれない。

「ココアでも買ってから行こうかな」

　冬とはいえ昼の公園なのに誰もいないというのは、なんとも言えない優越感がある。近くの自販機で買ったホットココアの缶をカイロ代わりに、公園内を歩く。積雪対策か、ブランコは支柱に括り付けられている。昔はこれを見ると、ブランコができないことへの絶望が酷かった。公園の中心にあるベンチに雪が積もっていないことを確認して座り込む。申し訳程度の屋根で太陽の光は遮られている。日陰特有の寒さに身体を震わせて、やっぱりココアは買っておいて良かったなと、数分前の私を褒める。
　冷えてしまった末端をココアで温めながら息をつく。思い出すのは、朝見てしまった悪夢。夢というよりは過去の再現映像だった。
「.....まだ、吹っ切れてなかったのかなあ」

＊＊＊

　始まりは、小学校三年生の時に祖父が亡くなったことだった。おじいちゃん子だった私はその訃報を聞いて、泣き喚いた。それはもう泣き続けた。お通夜の時にも、火葬の時にも、葬儀の時にも、ずっと泣いていた。ただひたすらに悲しかったし、寂しかった。その寂しさは、葬儀を終えて、学校に行けるようになってからも尾を引いた。
　祖父が亡くなったのが新学期初日だったことが原因なのか、葬儀などを終えて学校に行くと、クラスの人達との隔たりを感じた。しばらく学校に行っていなかったことは事実だから、それが原因だろうと深くは気にしていなかった。
　ある日、気づくと筆入れが紛失した。とは言えすぐに見つかったので、特に問題にはならなかったし、私自身、私が変な所に置いてしまったのかと思っていた。
　またある日は、教科書が無くなった。筆入れの時とは違い、それは結局見つかることは無かった。授業のたびに先生に教科書のコピーをもらいに行くのが申し訳なかったから、頻度の低い授業のものでよかったと思った。
　ふと気づくと、私の周りには誰もいなかった。幸い、一人で本を読むことが嫌いではなかったので、一人でもあまり気にならなかった。気にしていないと思いたかった。いじめられているだなんて信じたくなかった。けれど、あの状況は確かにいじめで、そして私の精神を蝕んでいた。
　状況が変わらぬまま学年が上がったある日のこと。ある一人の女子が先生の前で、私を誘っていない、私だけがその場にいなかった、とある子の誕生日パーティーの話をしたのだ。クラスの女子の名前がほとんど全員分上がっていく中、私の名前だけが出てこないことに先生が疑問をぶつけたことをきっかけに、私へのいじめは終わりを告げた。ようやく終わるのかと思うと涙が止まらくなった。
　先生に言われたからなのか、それとも本当に悪いと思ったからなのかはわからないが、皆謝ってくれた。私はその謝罪を受け入れた。けれど彼女たちはかたくなに、なぜ私を

いじめたのかは教えてくれなかった。もしかしたら私が彼女たちを先に不快にさせてしまったのかもしれないという不安は、彼女たちと以前のように話せるようになってからも消えることはなかった。

それから、中学は中学受験をして、彼女たちとは違うところに行くことにした。地元では有数の進学校だった。勉強することは嫌いではなかった、というよりむしろ好きだったのでちょうどよかった。彼女たちと離れられて、もうあんな思いはしなくて済むと思った。生まれて初めての親友ができたことも安心につながっていた。生まれて初めての親友である彼女、Ｓとはクラスで行われた自己紹介新聞披露をきっかけに仲良くなった。彼女のほうも私に興味を持ってくれていて、すぐに仲良くなることができた。暇なときには共通の趣味について話し続けたり、休日には一緒にプリクラを撮りに行ったり、楽しい日々が続いていた。

二年生になってから、私はＳと一緒にいることが少しだけ減った。クラス替えによって、Ｓがもともと仲良くしていた子と一緒にいることが増えたこともあるし、私が雪佳と出会って一緒にいることが増えたからでもある。Ｓと一緒に行動すること自体は少なくなってきたけれど、それでも私とＳは親友だったし、何も問題はなかった。ないはずだった。

中高一貫校だったのでそのまま進級していき、私たちは五年生（高校二年生）になった。来年はついに受験だという、独特の緊張感のあるその年に、それは起きた。

ある日のこと。大学に入ったらどうしようかという他愛のない、未来への希望をクラスの何人かと話していた時。ある一人が、「卒業してもこの学校で会った友達と連絡は取り合いたいな」と言った。素敵なことだ。私もＳと連絡は取り合いたいな、都合が合えばまた遊んだりしたいと考えていた時、Ｓがその子に対してこう返した。

「あー、私はそういうのないなあ。.....私、卒業してからも仲良くしたいって思える人いないんだよね」

時が止まった気がした。Ｓの言葉が理解できなかった、理解したくなかった。親友だと言ってくれた、大人になっても仲良くしたいと言ってくれていたのに、それらは全部嘘だったのだろうか。嘘なんだったとしても、それを本人の前で言うのか。

悲しみと怒りがごちゃ混ぜになって、そのままＳに伝えてしまった。あの言葉ほんとに不快、というただその一文を、メールで。

落ち着いて考えれば、Ｓが私になにかしらの不満を抱いていたのだということはすぐに分かる。けれど、あの時の私にはそんなことを考える余裕がなくて、ただただＳを責める言葉しか浮かんでこなかった。

それからのことは詳しくは覚えていない。ただ、私のあのメールで、Ｓの私に対する不満が爆発してしまったことはたしかだった。Ｓを傷つけてしまった私の無意識の行動に対する糾弾が送られてきた。彼女を傷つけてしまったのなら、甘んじて受け入れよう、それが彼女のあの言葉につながるのなら、仕方のないことだ。そう思っていた。けれど。

「五年間無駄にしたわ」

あの言葉だけは、耐えられなかった。それを言われたときに頭に浮かんだのは彼女と

最も一緒にいた最初の一年間だった。あの時の思い出までも、彼女にとっては消し去りたいものになってしまったのだろうかと考えたら、そう思わせてしまうようなことを彼女にやってしまったのだと考えたら、もう耐えられなかった。もしかしたら、小学校の時のいじめも、私のそういう行動が彼女たちを不快にしてしまったが故に起きてしまったことなのかもしれない。私は、人を不快にしてしまう、最低な人間なんだ。それこそ、その人に人生を無駄にしたと思わせてしまうほどに。

＊＊＊

「.....死にたい」
　あの時のことを思い出すたびに思う。人を不快にしてばかりだった私が、誰に何を貢献できるというのだろう。このまま生きていても、また誰かの人生を無駄にさせてしまうだけなのではないだろうか。それが、心の底から恐ろしい。
　握ったままだったココアはもう冷え切っていた。温まった指先がまた冷えていく。胸の中にある水槽を、ドロドロとした黒いものが力任せに混ぜていく。黒いものが落ち着かない限り、水はあふれ続ける。
「.....っ、なんで、好きな人たちばっかり.....！」　小学校の時も、Ｓの時も、彼女たちが嫌いなわけではなかった。むしろ好きだった。少なくとも私に、彼女たちを傷つけようという意思は一切なかった。けれど、結果として私は彼女たちを傷つけてきてしまっている。傷つけて、憎悪に近い感情まで抱かせてしまった。
　ぽた、ぽた、と雫が落ちて、地面を小さく濡らす。雨が降っていてくれればよかったのに。そうすれば、きっと誰にも分らない。
　どれだけそうしていただろう。ほぼ真上にいたはずの太陽がすっかり傾いて目の前にいた。赤橙色の光が目に刺さって痛い。
木々の隙間を縫う光の美しさに、なんとなく、今だろうなと、そう思った。今ならきっと何も後悔しない。五分ほど歩いたところに、この辺りでは一番高い建物があることを思い出しながら立ち上がる。

――ぴぴぴぴ.....

　私の覚悟なんて関係ないといわんばかりのタイミングでスマホが鳴り響いて肩を揺らす。
「.....でんわ。.....はい、もしもし」
『うづちゃんたすけて！』
「声でか.....なに、どしたの雪佳」
　普段は底抜けに明るい声に、いつもは感じないすこしの焦りを感じた。

雪佳は、Ｓとのいざこざの際に私の話を聞いてくれて、そしていざこざの終息のために力を貸してくれた。その際、Ｓから私の醜悪さについても聞いただろうし、私からも「私が意図的にしたわけではないけれど、私の行動で彼女を傷つけてしまっている」ということは伝えておいた。それでも雪佳は私の味方でいてくれた。
『今日のご飯カレーにしようと思って作ってたんだけど、分量ミスって作りすぎたの.....』
「作りすぎたんなら、カレーうどんにしたりしなよ。そんなはやく痛んだりしないでしょ」
『いや、一箱分作っちゃったんだよ.....たすけて、俺こんなに消費できない.....』
一人暮らしの人間が一度に作るカレーの量は二分の一箱。それでも少し多いかもしれない量だというのに、その倍作ってしまったらしい雪佳は、なんだか楽しくなってきてしまったのか少しだけ笑っている。断られるわけがないと踏んでいるからでもあるだろう。
私が死んだら、この子は泣くのだろうか。
「.....ねえ雪佳」
『なーにー？』
聞いてみたいと思って、息を吸った。けれど言葉にはならなかった。聞いてしまったら何かがぼろぼろに崩れて消えてしまうような、そんな気がした。
「ごめん、なんでもない。これからぼちぼち行くよ」
『やったね！　ありがとううづちゃん！』
じゃあまたあとで、と告げて通話を切る。
うれしそうな声だった。私がいることであんなにも喜んでくれる人がいるんだ。
Ｓは私といることで人生を無駄にしたと言っていた。彼女はたぶん、私が死んだとしてもきっと悲しまない。私が彼女にしてきたことはきっとそういうことだろうから。けれど、雪佳はきっと。
乾いたばかりの地面にまた雫が落ちる。
何も進展はしていない。私と共にいることで誰かの人生を台無しにしてしまったという事実は消えないし、これからそうしてしまう可能性も消えない。だけど、一人。たった一人だけれど、私といることを望んでくれて、そして私が死んだとしても悲しんでくれる人がいる。そう考えたら、さっきまで心を埋め尽くしていた「今すぐにでも死にたい」という思いが小さくなった。消えたわけではない。あくまで小さくなっただけだけれど、雪佳との約束を破ってまで死にたいとは思わない。

だから、今はこれでいい。

あとがき
タイトルは「しみずあたたかをふくむ」と読みます。調べていただければ意味も分かるかと思います。

彼女の心は今回のことでほんの少し解れていることでしょう。ですが、完全ではありません。これからも彼女は何度も同じことで「死にたい」と思います。彼女にとっての本当の救いとは、いったい何でしょうか。どうすれば彼女は抱えている恐怖から解放されるのでしょうか。

今回の作品は、読んでいて不快になる人もいるかと思います。ですが、どうか、どうか雨月ちゃんのことを否定しないでください。お願いします。

余白

余白

中村

死のうと思った。ただそれだけ。

グサリ。

きみをなかせた。

朝食を作っているときに思った。オニオンスープとシーザーサラダ。ベーコンとパンの焼ける匂いが踊っている。

原因を挙げるなら、先週彼女の両親に挨拶したからかもしれないし、一昨日、好きな漫画が最終回をむかえたからかもしれないし、最近寒いからかもしれない。会社で大きな企画を任されたからかもしれないし、会社の近くにお洒落なカフェを見つけたからかもしれない。

もしくは、突出した何かがないからかもしれない。

死のうと思った。ただそれだけ。

大した理由はない。

ベーコンエッグを大皿に移す。七時二十三分。鼻歌を歌いながらテーブルへ運ぶ。六畳一間の俺の城。中央に鎮座して、厳かに手を合わせる。

いただきます。
最後の晩餐には程遠いがこれぐらいが丁度良い。いや、これが良い。
行儀も作法もくそくらえ。カリカリのベーコンに手が止まらない。小休憩にサラダをつまみ、お椀の底にコショウを臨む。
ごちそうさまでした。
食器はすぐ洗う。幼いころから躾けられた結果である。体で日常を、頭で非日常を遂行する。　飛び降りは怖いからやめよう。首吊りも苦しいから却下。事故は迷惑すぎるし、過労死するほどのブラック企業というわけでもない。真っ赤な血肉は見たくないから、刃物も使わないでおこう。となると、睡眠薬。

キュッ

最後に大皿をすすいで水切りカゴに立てかける。
水を持ってリビングへ。睡眠薬があるはずだ。前に虫歯が痛すぎて眠れなかったときに買ったやつ。
約三十分前に別れを告げた布団に戻る。右隅のエアコンの下。テーブルにグラスを置いて睡眠薬を探す。タンス、押し入れ、引き出し、あらゆる収納を探してみる。

ガサ、ゴソ、ドサリ

見つけた。ベッド脇の棚の中。灯台下暗し。絡まった充電器、シップと雑誌とゴミ類と。その後ろ、ひっそりと青いパッケージが顔を覗かせている。引きずりだして中を見る。落ちるシップと使用済みティッシュ、手には銀のパックが数枚。
現実味を感じ、両手でフイルムを弄ぶ。喉が渇く。七時四十五分。冷たい水で引き締める。
プチリ。一粒転がる。パチリ。二粒ぶつかる。プチリ。三粒並べて、プチリ。四粒跳ねる。プチッと五粒散らばる。ピチッ。六粒集めて、カシュッ。七粒おちて、ピシュッ。八粒すくう。空箱は、ゴミ箱へ。
手のひらを見る。白い錠剤が確かに八つ。向きを揃えて手を握る。肌色の境目が段々と朧気に。手を広げる。少し湿った、草の果て。
再度水をもつ。曇るガラスと震える水面。

グワン、ぐわん。

淡く視界が狭まっていく。心音が速まって、世界が白に染まっていく。

ピヒャリ

自分を覆う何かが消える。周りの赤がうごめいた。押し出される。上へ前へ。
世界が変わる。寒く眩しく広がった。胸がつぶれて、喉が震える。身体が勝手に動き出す。どこか遠くで叫びを聞いた。
自分が何かに包まれる。ふわふわの眩しいもの。液体とは違った暖かさ。そして、空気を覆う、おめでとう。
おめでとう。そこに意志はなかった。
おめでとう。ただ本能が求めていた。
おめでとう。世界を占める自分の叫び。

生きようとしている。ただそれだけ。

ピチョン、ぴちょん

汗が落ちる。手のひらに、布団の上に。広がる世界が色を帯びる。あまりの緊張に意識を飛ばしていたのかもしれない。壁掛け時計を見る。七時四十八分。あれから数分しか経っていない。震える水面と汗をかいたグラスが一つ。
手の平の白い丸は崩れていった。

ひゃぐり

生きようと思った。
身体は自分のモノではないらしく、俺は自分以外にはなれないし。俺以外にも自分を占める何かに泣きつかれた。
まだ生きたい、と。
どうやら死にたくないらしい。
手を洗ってグラスを片付ける。七時五十分。電車が出るまであと十七分。走る以外に

選択肢はない。上着を引っかけ、鞄を掴む。七時五十二分。鍵を掴んで青空の下へ。

　最初から、意志などなかった始まりじゃないか。
　この身体が、三十七億の細胞が、どうやら生きたいらしいから、生きようと思った。体がもがいているうちは。

　生きようと思った。ただそれだけ。

了

あとがき
　〇〇だと思った。ただそれだけ。という語感が好きで書いてみました。ただそれだけ。

ぽんこつどけい

ぽんこつどけい
雪兎

こつ　こつ　こつ
とつ　たつ　たつ

朝の空気がすきでして
大きく一度深呼吸
肺いっぱいに満たした酸素で

今日一日を過ごせりゃいいのに

こつ　　こつ　　こつ
とつ　　とつ　　とつ

昼のチャイムがすきでして
お昼の匂いと陽の光
囁く悪魔に抗うことなく
夢の世界へ飛べりゃいいのに

こつこつこつ
とつたつとつ

午後の古典はだいきらい
コワい教師に睨まれて
過去の怠けた僕を叱った
時間を昨日に戻せりゃいいのに

こっこっこっこ
とっとったっと

バス停のあの子がすきでして
長い睫毛と夕日の色
お疲れ様ですとごきちなく笑う
僕に意気地を　もうすこし

あの子が降りて
チャイムを押して
次のバス停　ひとりの車内

こつ　こつ　とつ　とつ

ばーか
もっと肝心なとこで
正確にリズムを刻んでくれよ

Sing

Sing

雪兎

冷え切って張り詰めた酸素が
いっぱいに開いた口唇に吸い込まれる
胃の腑の温度をきりりと下げて
摂氏三十六度の熱に溶ける

触れる空気の一粒にまで感覚を巡らせるように
右手が宙を掬い上げる
流れる酸素の一粒にまで神経を尖らせるように
左手が心臓を柔く抑える

生温い呼気と共に吐き出されたそれは
何百倍もの熱量になって
全身を打つ
鼓膜から血液を沸騰させる

天使とは形容できない
女神には似ても似つかない
わたしたちは物語のように
この世界のように
うつくしいものにはなれない

それでも
血と肉の醜い塊から発される歓喜は
確かにうつくしい世界に溶けていける
透明な色彩をその熱に乗せたわたしたちは
少しだけうつくしいものに近づける気がする

だからこそわたしたちは叫びたくなるのかもしれない
貴方が叫ぶそのたったひとふしに
素晴らしいと手を叩きたくなるのかもしれない

誰が為の贈り物

誰が為の贈り物

佐久間佳雪

　景色が変わらない廊下を、ただ、走る。走る。走る。喉が痛い。肺が熱い。足がだるい。それでも、走り続ける。手を引く彼はぜいぜいと苦しそうに息をして、それでも、走る。
　外を見たい。自由を知りたい。そんな衝動だけが、とうに限界の身体を突き動かしている。
「いたぞ！」
　背中に迫る大人の声。追いつかれたら、捕まったら、また。染み付いた恐怖に足を取られる。かくりと膝が折れて転びそうになったとき、前を行く彼にぐん、と強く手を引かれた。
　開け放たれた扉の向こうに、知らない街。つんのめる私の背中を押した彼は、声を上げる。
「行け！」
　彼の周りの空気が歪んで、飛び出した見えないナイフが大人たちの腹を、胸を、足を、抉る。ひくり、と喉が震えた。
　ああ、どうしよう！　私、彼がいちばん嫌いな力を、使わせてしまった！
「大丈夫、」
「ヒ、メルくんっ」
　一緒に行こう、と手を伸ばす。けど、悲しい顔で笑った彼は私に背を向けて、扉に手をかけた。

「やだ、やだよ、待って！　だめだよ、そんなの！」
　背中が遠ざかる。扉が閉まる。伸ばした手は、届かなかった。
　路上に投げ出され、倒れ込んだまま動けなくなる。心臓はどくどくと脈打ち、どうしようもなく私は生きているのだと思い知らせてくる。
　知らない世界にひとりぼっち。助けてくれる彼はきっとすでに扉の向こうにいない。
　喉が張り付く。肺が熱い。頭が痛い。足に力が入らない。
　もう、無理だ。きっと捕まる。どうしたって私はあそこに縛られる。そういう運命なのだ。ああ、今戻ればまだ、彼も助かるかもしれない。

　でも。

　その彼の最後の笑顔が、諦めることを許さない。
　ひゅう、と喉が鳴る。歯を食いしばって立ち上がる。
　私は溢れ出す涙の止め方もわからないまま、当て所なく走り出した。

　厚めに切られたトーストは、外はさくさく、中はふわふわ。上に乗ったベーコンエッグはとろとろの半熟。脂の甘い匂いに、口の中にじゅわりとよだれが滲む。それに応えるようにぐう、と腹が鳴った。
　我慢できず俺は焼きたてのそれに噛み付いた。薄い膜が歯で破れ、とろりと黄身が口の中に溢れる。少しも零さないようにそれを吸うと、幸せが口いっぱいに広がっていく。濃厚な黄身、つるりとした白身、さくさくふわふわのパン、そしてあつあつのベーコンが口の中で混ざり合い、思わず口角が上がった。
「.....いつも思うけど、ほんとお前美味しそうに食べるなあ」
「いつも美味しいからな」
　間髪入れずに返すと、キッチンの換気扇の下で一服していた同居人が照れたように笑う。そして、早く起きて作ったかいがあるわ、と煙草を咥えたまま呟いた。
　いつもなら彼――ネイサンもカウンターの隣に座り朝食を食べているはずなのだが、なぜか今日は体に悪い紫煙をくゆらせている。
「飯食わないのか？」
「外で食べるよ」
「なに、お前今日早いの」
「朝から打ち合わせあって」
　それからネイサンはキッチンの小窓の方を向いてしまった。これ以上聞くな、と一線を引かれたようだった。
　非喫煙者である俺に気を使ってか、換気扇をつけた上で小窓も開け放たれている。高

層マンションの上階ともなると流石に喧騒は聞こえず、ただ僅かに風の音がする。ネイサンの目にかかった黒髪が風に揺れ、重い煙草の匂いをかすかに感じた。
　手元に視線を落として、トーストを口へ運ぶ。

　俺たちは、お互いの素性を知らない。
　『仕事も家族もなにもかも、お互いのことは探らない』。それがこの不思議な共同生活の条件だった。
　俺は仕事柄秘密が多く、誰かと暮らすことは非常に危険だ。しかしそれを重々承知の上で、俺は未だに妙に居心地のいい二人暮らしから抜け出せずにいた。
　気づけばこの不思議な生活が始まって半年が経つ。慣れてきたせいか、最近ふと、考えることが多くなった。
　ネイサンは、一体何者なのだろう、と。

　パチン、と換気扇のスイッチを切る音に大袈裟に肩がはねた。まるで後ろめたいことがあるかのような反応になってしまった。気になっているだけ、探っているわけではなくて、と誰にするでもない言い訳が浮かんでは消える。
　顔を上げて見えたのは、ふう、と小窓へ向かって煙を吐き出すネイサン。彼は俺の様子など気にする素振りもなく、灰皿に煙草を押し付けて火を消した。そしてライターと煙草の箱をポケットに仕舞うと大きく伸びをする。
「さて、と、じゃあ、行くわ」
「ああ」
　トーストを皿に置き、ネイサンを見送るためその背中を追って玄関へ向かう。途中で羽織ったチェスターコートから、煙草の匂いに混じって少しだけ埃っぽい匂いがした。
　ネイサンは革靴を履き、壁のフックから俺が押し付けたマスコットが付いた鍵を取る。キャンペーンか何かで当たった安物なのに、こいつが律儀にずっとつけているものだから所々薄汚れていた。これが気に入ったのか、あるいは物に頓着がないのか、どちらにせよこれではあまりにみっともない。今度別のものにでも変えてやろう。
「エリアス、食い終わったら食洗機回しておいて」
「了解。帰りは？」
「いつも通り。お前よりは早いさ」
「……嫌味か？」
　隠しきれず嫌な顔をしていたらしく、ネイサンはくつくつと喉で笑った。そして、玄関に出してあったゴミ袋を持ち、忘れるなよ、ともう一度念押ししてから、ようやくドアノブを回す。
「行ってきます」
「行ってらっしゃい」
　重たいドアが開いて、それから閉まる。廊下を歩いていく音がだんだん遠くなって、やがて聞こえなくなった。

家事に関する信用がまったくないことに半分傷つき、半分納得しながらリビングへ戻る。
俺には多くの前科があるのだ。つい三日前には洗濯物を取り込んでと頼まれたのをすっかり忘れ、ずぶ濡れにした。先週もゴミ出し当番だったのに玄関にゴミ袋を忘れて、気づいたネイサンが代わりに捨てた。
俺は俺の生活能力のなさをきちんと自覚している。だからこそ、ネイサンという優秀なハウスキーパーを手放すわけにはいかないのだ。
だが、しかしそれはそれとして、だ。素性は気になって仕方がない。あいつが妙に怪しいのが悪いのだ。湧いてしまった興味はそう簡単に拭いされはしない。
食べかけのトーストをかじり、思案する。

黒いチェスターコートに煙草と安いライター、あとは財布だけ突っ込んで、毎朝――今日は違ったが――俺よりも後に家を出ていく。そして夜には俺より早く帰ってきて、美味しい食事を用意して待っている。寝ているところは見たことがないが、よく笑って、ヘビースモーカーで、コーヒーが好物で、料理が上手な、ネイサン・ワード。
俺の知らないあいつは、どんな人間なのだろう。

装飾のない黒いスーツに身を包み母親譲りのプラチナブロンドの髪をセットした俺は、いつもより人が多い大通りを歩いていた。
あっちこっちに人だかりができており、そこから時折歓声が上がる。気になりはするが朝からあの人混みに潜り込む元気はなかった。
見たところこの通りを通行止めまでしているようだ。何かイベントがあっただろうか、と記憶を辿っていると、背後から声が掛かる。
「センパーイ！」
声をかけてきたのは職場の後輩であるランスだった。彼はいつもの如く人懐っこい笑みを浮かべ、元気よく挨拶をする。
「おはようございます！」
「おはよう。朝っぱらから元気だなお前は.....」
ランスは馴染みの喫茶店の紙袋を抱えており、聞けば買い出しの帰りだという。それってつまりパシリでは、と思いこそすれ口には出さなかった。俺、偉い。
「いやあ、人多いっすね！」
「あー、そうだな、なんでだ？」
「え、センパイ知らないんすか？　今日からシードウ雑技団が来てるんすよ！」
「へえ、だからこんなに人がいるわけだ」
シードウ雑技団とは、東の経済大国チナの首都に本拠地を構える国営雑技団だ。ちなみに雑技団とはチナにおける、いわゆるサーカス団のことである。
かの有名なシードウ雑技団がわざわざ海を越えてアロビカまで来たのだ。是非ともお

目にかかりたいところだが、この混み具合では残念ながらチケットは買えそうにない。
　大通りには宣伝のためにパフォーマンスをする集団がいたり、チナの伝統料理を振る舞う屋台がひらかれていたりして、ひどく賑やかだ。赤い民族衣装に身を包んだチナ人がそこらじゅうに立っていて、ここがアロビカであることを忘れてしまいそうなほど、大通りはチナの色に染まっていた。
「なんか楽しい感じっすね！」
「そうだなぁ」
　と、俺たちはのんびり言葉を交わす。

　不意に響き渡ったのは爆発音。続いて悲鳴、ざわめきが広がり、人の波が押し寄せてくる。逃げる人の間を縫うように進めば、通り沿いのジュエリーショップからもくもくと黒煙が立ち上っているのが見えた。
　煙の中から鞄を担いだ男が三人、駆け出てくる。鞄の開いた口から宝石のついたチェーンが垂れているところを見るに、宝石強盗のようだ。
「ランス、通報」
「今し方したっす」
　通報はした。しかし現着する前に犯人が逃げてしまいそうだ。まして今日の大通りの混み具合は異常なのだし、このままでは見失いかねない。さて、どうするか。
　逃げる人々を見て、一番大きな袋を担いだ大男はニヤリと笑った。その手に光が集まっていく。一瞬の間を置いて、――爆発した。
「邪魔だァ！」
　大通りに悲鳴が吹き上がる。男たちは粘ついた笑みを浮かべていた。
「行くぞ」
「りょーかい！」
　慣れた様子でランスは手袋を外して道路に手をつき、俺は拳を合わせる。ランスが触れたアスファルトがどろりと解けるのとほとんど同時に、俺の拳から腕にかけてがぱきぱきと音を立て、角張った青い石――サファイアに変わっていく。
　人々が慄いて逃げ、モーセの海割りのごとく人波が割れた。強盗は俺たちと相対しても、自分の優位を確信しているらしく減速することなく突っ込んでくる。――そう、それはまさに、ヤパング風に言うならば、飛んで火に入る夏の虫！
「退けェ！」
　男の手が迫ってくる。至近距離で爆発、する前に宝石の腕を盾にしてそれを防ぐ。
「痛くも痒くもねえなあ！」
　足は肩幅ほどに開き、親指は拳の外、上体をひねり、全ての力を拳に、込める！
　振りかぶった宝石の拳は男の顔にめり込んだ。俺渾身の一撃を受け、男はきりもみ回転をして路上に転がる。
　残り二人はそれを見て焦ったらしく、一人はクラウチングスタートの姿勢を取り、もう一人はじわじわと周りの景色に溶け込んでいく。ふむ、加速系とステルス系と見た。
「ランス、足止め！」

「はいっす！」
　踏み込んでいた足が沈む。隠れようとしていた男も足を取られバランスを崩したせいで不完全に終わった。俺はアスファルトに埋まって目を白黒させる男たちに歩み寄る。
「な、なんなんだ、お前ら、」
「俺たちは、連邦捜査局ギフト犯罪専門捜査官だ。.....この街で悪いことできると思うなよ？」
　目の前に手帳を突き出す。青ざめた二人の脳天に、百点満点の笑顔を添えて、拳骨を落とした。

　不思議な力を持った子どもが産まれてから、およそ三十年。「ギフト」――「贈り物」の名を冠する異能力を持つ人々は、世界の総人口の約八割を占めるに至った。

　五十の州で構成されたアロビカ合衆国で唯一、州を超えて捜査することが出来る連邦捜査局。そこに『ギフトによるギフトの取り締まり』を掲げて新設された部署、それが連邦捜査局ギフト犯罪対策課である。希少なギフトを持つために政府の保護下に入った者を中心に形成されており、俺もまた、その一人だった。

　犯人を拘束後駆けつけた警察に預けて、俺たちは徒歩で連邦捜査局本部へと向かっていた。
「センパイ、手は無事っすか？」
「あれぐらいじゃ傷つかねえよ」
　体が宝石になるギフトを与えられた俺は、基本的に先程のような肉弾戦を得意としている。しかし使いすぎれば摩耗しヒビも入るため、それなりに気を使う必要があった。とはいえあの程度では傷もつかない。サファイアは衝撃に強いのだ。
「お前こそ紙袋の中身大丈夫か」
「零れては、いないっすね！　ちょっと冷めたかもしんないっすけど、俺があっためるんで問題ないっす！」
　ランスのギフトは温度操作。溶けるほど熱いとか、凍るほど冷たいとか、ざっくりとした操作ができるギフトである。しかし温度を操作するには彼自身が直接触れる必要があり、つまり、冷めたコーヒーを温めるには手をカップに突っ込む必要があるわけで。
「.....ちゃんと手洗ってからやれよ！」
「はいっす！」
　何も分かっていなさそうないいお返事をされて、心の中で頭を抱える。
「もしかしてお前普段から湯沸かしにギフト使ってる？」
「え、なんで分かるんすか！」

「まじかよ……」
　手軽だし時短にもなるだろうが衛生面はどうなのか。いや、自分が口にするものならそう気にしないものか。俺も床に落としたもの食べるしな。

「っと、すみません、」
　人混みの中誰かにぶつかって、謝罪し目線を落とす。腰のあたりに頭が見え、大きな目が俺を見上げていた。その肩ほどまで伸びた髪と丸い目はまるで凍った湖のような不思議な色をしている。
「迷子っすかね？」
「かもな」
　少女の目が不安そうに揺れる。おそらく迷子だろうと判断し、ひとまずその子の手を引いて人混みを抜けた。
「どうした？　　お母さんとかお父さんとかどこ行ったか分かる？」
　しゃがんで目線を合わせ聞いてみるが、少女は俯いて押し黙ったまま。困った。どうしたものか、とランスと視線を交わす。
「名前は言える？」
　少女が僅かに口を開いた。ぼそぼそと小さな声で何かを言っている。耳を寄せてもう一度聞くと、かろうじて聞き取れた、が。
「……じゅー、みん、あ？」
「なんすかそれ」
「分からないけどそう言ってる」
「うーん、じゃあちょっと検索かけてみるっす」
　ランスが検索しているのを待つ間、少女の様子を観察する。
　体はずっと震えているが目立った怪我はなく、痩せているわけではないし、顔色もいい。しかし、サイズの大きい患者衣を着ており、靴は履いていなかった。どうやらただの迷子ではないらしい。ワケありとなるとまずは本部に報告すべきか？
「……センパイ」
「見つかったか？」
　真面目な顔をしたランスが画面をこっちに向けた。ジュウミンア、チナ語、ひとつひとつ画面の文字を追うと、次第に眉間の皺が深くなっていく。
　少女は下を向いたまま、呟き続ける。ひたすら、何度も、か細い声で、縋るように、

『助けて』と、繰り返す。

　不意に少女がびくりと体を震わせた。そして、怯えた様子で俺の背に逃げ込む。
「なに、どうし、」
　ざらりと肌を撫でたのは、粘ついて気持ちの悪い、悪意に充ちた視線。任務の時に嫌

というほど向けられたあれが、どうして、こんな街中で？
　引かれるように顔を上げた先、人混みの中を白衣を着た男が歩いている。腰ほどまで伸びた銀髪は三つ編みにされ、歩くたびゆらゆらと揺れている。男は視線を忙しなく動かして、何かを探しているようだった。
「あいつだ」
　静かに呟き、怯える少女を背後に隠して息を潜める。そうして男が去るのをじっと待った。俺の手を握る小さな手は震えており、少女の恐怖が痛いほどに伝わってくる。
　ようやく男が去って、ぶはあ、と息を吐いた。気を張っていた体から一気に力が抜けていく。
「な、っ.....なんなんすか.....！」
「分からん.....とりあえずこの子は連れて帰ろう」
　大事の予感をひしひしと感じながら、俺たちはやけに軽い少女を抱え走り出した。

　人目につかない裏道を通って本部へ到着後、エレベーターに乗り込みギフト犯罪課がある三階へ上がる。事前に連絡しておいたおかげで既にボスが待機していた。
「その子か」
「はい。カノアは、」
「ここです。引き継ぎます」
　通路を小走りでやってきたカノアは少女に声をかける。すると少女は俺から離れ、遠慮がちに彼女の手を握った。
　カノアは俺たちと同じく捜査官の一人で、チナに留学経験があるためチナ語を話すことができる。よっておそらくチナ語しか話せない少女の事情聴取にはうってつけの存在だ。
「応接室を使っても構いませんね？」
「ああ、構わん。アーサー、ランス、お前たちはこっちだ」
「はい」
　アーサーというのは俺のコードネームである。名前で縛るようなギフトに対応するため、捜査官たちは仕事中お互いをこのようなコードネームで呼んでいる。ランスもカノアも同じようにコードネームであり、俺は彼らと知り合って何年も経つがどちらの本名も知らないままだった。
　カノアに手を引かれる少女は、不安そうに何度もこっちを振り返った。大丈夫だよ、と言う意味を込め笑いかけると、多少表情が和らいだように見えた。
　二人が応接室に入るのを見てから、俺たちもボスについてオフィスのミーティングスペースに入る。
　ガラス張りのミーティングスペースには電気ケトルやコーヒーサーバー、菓子類などが揃っていて、軽く飲食しながら会議ができる。しかしこの充実した設備のせいでここはほとんど休憩スペースに近い扱いを受けていた。ちなみに俺もヘビーユーザーのひとりである。

自分用のマグカップにアールグレイのティーバッグを入れ、ポットのお湯を注ぐ。ゆらゆらと湯気が揺らぐのを見て、ようやく一息ついた。正直なところ、朝からハードすぎて既に疲労困憊だ。

座って一口飲んだところで、ランスが紙袋から冷えたコーヒーと軽食を出してテーブルに並べていく。そして流れるようにコーヒーの蓋を開け指を突っ込む、前にボスがその手を掴んだ。

「直に指を入れるのはやめろといつも言っているだろうが！」

「だって冷えちゃったからあっためないと！　俺のギフトは直接触んないといけないんすよ！」

「冷えていていい！　だからやめろ！」

ええー、とぶすくれるランス。当たり前だ。

ボスは深々とため息をついて、椅子に座り咳払いをした。

「男に追われていたと言っていたが、どんな姿だった」

「えと、なんか、ながーい銀髪で、白衣着てて、三つ編みだったっす」

「雰囲気からして親族という感じではありませんでした」

「とにかくすっげー嫌な目だったっすね.....」

なるほど、と考え込むようにボスの銀色の目が伏せられる。

「あの子、パッと見外傷はなかったっすよね」

「ああ、だから虐待ってわけじゃあなさそうですけど.....」

ランスがずず、とカフェオレを啜る。あっつ、と声を上げべろを出したところを見ると自分の分は温め直したらしい。

俺もアールグレイを口に含んだ。しかし何か物足りないとスティックシュガーを三本投入する。うん、このくらいがちょうどいい。

「ひとまず、カノアの事情聴取が終わるのを待とう」

ボスはそう言うと冷えたコーヒーを飲み、机に並んだ軽食からクラブハウスサンドを手に取った。

甘ったるい紅茶を飲みながら、ふと、考える。

基本的に表情が変わらないボスが、少女を見たとき僅かに顔を顰めていた。感情が色で見えるというギフトを持つボスは、少女の背中にどんな色を見たんだろう。

ボスが顔色を変えるほどの何かを、あの少女は小さな体で耐えてきたのだろうか。

二、三十分ほど経って、カノアと少女はミーティングスペースへやって来た。

「まずは分かったことを報告します」

少女を椅子に座らせ、カノアは手帳を見ながら話し始める。

「彼女の名前はシーワン。チナの.....訛りから考えると恐らく北部の農村の出身で、家族は火事で早くに亡くしたそうです。この街に見覚えはなく、どこから来たのかもわからない、と」

「それだけ？」

「ランス、黙って聞いて。……元々彼女は数人の子供たちと共に研究所に監禁されていて、そこで研究と称して度を超えた採血や、臓器の摘出、など……、」
　そこでカノアはぐっと眉根を寄せて、口を閉じた。悲しむような、悔しがるような、そんなに表情だった。
　心配そうにランスが名前を呼ぶと、大丈夫、と小さく呟き、言葉を続ける。
「……すみません。その生活に耐えきれず、研究所の人間が連れて来た男の子……ヒメルと逃亡を図り、彼女だけが成功したようです。彼女いわく、ヒメルはアロビカ出身で、見えない刃物を四方に飛ばすというギフトの保有者だそうです」
　一度そこで話を区切ったカノアは手帳を伏せ、来客用コップにフレッシュジュースを注いでシーワンの前に置いた。少女の視線がコップとカノアを行き来する。たぶんカノアがチナ語で促すようなことを言って、それからようやくコップに口をつけた。小さな手が持つコップはやけに大きく見えた。

　度を超えた採血、臓器の摘出、想像よりずっと惨い話に、重い沈黙が横たわる。
　シーワンのいくらか和らいだ表情が胸を締付ける。子どもは守られるべきもので、なにも心配することなく笑っているものだ。なのに、この子は、シーワンは、まったく笑わない。
　笑顔を忘れてしまうほど長く辛い日々を、たったひとりで、こんなに小さな体で、この子どもはずっと、耐えていたのだ。きっと、誰に手を伸ばすこともできなかっただろう。
　思えば、俺がギフトをもらったのもこのくらいの年頃だった。あの時の俺は、希少ギフトであるせいで危ない目にばかりあって、それでも一人でなんとかしようとして、頑なになっていた。ああ、そうだ。そんな俺に手を差し伸べてくれたのは、頼るということを教えてくれたのは、大人たちだった。
　なら俺は絶対に、この子がようやく伸ばして、俺を掴んでくれた手を離してはいけない。そう、思う。

　考え込んでいた様子だったボスがふと、口を開いた。
「外傷がないのは何故だ」
「彼女が持つギフトによるものかと。いわく、『怪我をしてもなかったことになる』そうです」
「治癒系ギフトか」
「いいえ、いいえ、多分、違います。本当になかったことになるのです。傷が塞がるだとかそういうことではなく、傷そのものがなくなる、と」
「……聞いたことがないギフトだな」
　治療できる対象、傷の程度に差はあるが、そもそも治癒系ギフト自体はそう珍しいものではない。しかしシーワンの『怪我してもなかったことになる』ギフトはおそらく根本から違う。シーワンが受けていた仕打ちを考えると、単なる治癒系ギフトでは今まで生き延びていられるわけがないのだ。

「なんか、あれっすね.....不死のギフト、的な？」
「.....本当にそうかもしれんな」
「エッ」
　ランスは冗談のつもりで言ったようだが、ありえない話ではない。どの程度までなかったことにできるのかにもよるけれど、もしもその限度がなかったら？　そうであれば彼女は少なくとも外傷で死ぬことはないということになる。
「カノア、報告は以上か？」
「あっ、いいえ、もうひとつ.....アーサー先輩に見ていただきたいものがあります」
　カノアはシーワンに断りを入れてから、その耳元の髪を退けた。あらわになった小さな貝のような耳に、真っ赤な石のピアスがつけられている。
「何の石か、わかりますか？」
「うーん.....多分、シンシャ、かな」
「シンシャ.....聞いたことないっすね」
「水銀の方が有名かもな。あの、温度計に入ってるやつ」
「あー！　あれって宝石なんすか！　ていうか、えっ、あれ、毒あるやつっすよね？」
「シンシャを加熱すると水銀になるんだよ。あと、宝石の状態なら無害だから大丈夫」
　シンシャを使ったアクセサリーはないわけではない。けど、どうしても、思考が嫌な結びつき方をする。
　不老不死の妙薬と考えられていた水銀と、不死のギフトを持った、チナ出身の子ども。この組み合わせに何か意図があるような気がしてならない。
「少し、調べてみるか」
「いいんすか！」
「シーワンが置かれていた状況を知ってしまった手前、放り出すわけにはいかんだろう。.....現状、動ける捜査官の数に不安はあるが.....どうにかしよう」
　ボスの言葉に、俺たちは気を引き締める。
「カノアはハックルベリー氏の元へ行き、シーワンの身体検査を。アーサーとランスはシーワン並びにヒメルの身元の調査を頼む。ああ、お前たちが言っていた謎の男についてだが、私に情報のあてがある。コンタクトを取ってみよう」
「了解！」

　カノアがシーワンの手を引き、病院へ行った後。シーワンとヒメルの身元調査を命じられた俺たちは、とりあえず、ランスはチナの、俺はアロビカの行方不明者リストを洗っていた。
　我が祖国、アロビカ合衆国では、年間八十万人もの子供が行方不明になっているため、ひとつひとつ見ていてはキリがない。そこで直近一ヶ月に絞って見ていくことにした。というのも、それ以前の行方不明者のギフトの情報は、機密保護だとかなんだとかで削除されてしまうのだ。何と面倒な。
　名前で検索、ヒットなし。ギフトで検索、ヒットなし。スペルが間違っているかとも

う一度名前で検索、ヒットなし。
「直近一ヶ月以内の行方不明者ではない、か」
　直近一ヶ月という条件を外し、名前で検索.....何百人もヒットした。ギフトと名前しか知らない状況で、この何百人ものギフト不明のヒメルのなかからお目当ての子供を探し出すのはまず不可能だろう。
「うーん、シーワンも見つからないっすね。なんでっすか？」
「まじかよ」
　少なくとも、チナが公開している行方不明者リストにそんな名前の子供はいないらしい。となるとシーワンは――。
「あれ、取り込み中です？」
　ディスプレイから目を離すと、入口のところに捜査官が立っている。よく知った愛嬌のある顔だった。ギフト犯罪対策課と他の課の橋渡し役、要は使い走りとしてよく寄越されている、ランスと同じくらいの歳の女性捜査官だ。
　彼女はボスのデスク前に立ち、数枚の紙を差し出したのち口を開く。
「ノイエヨーク州で児童四人誘拐事件が発生、未解決のまま二四時間経過したので、連邦捜査局案件になりました。一度に四人も消えたということでギフト使用の疑いあり、ということで一応ご報告しておきます。こちらが被害者リストです」
「また、か」
「はい.....今は同一犯の方向で捜査を進めています。近いうちに協力要請をするかもしれないと上司が言っていました」
「ああ、分かった」
　最後に敬礼をし、彼女は自分の部署に帰っていった。
　最近、やたらと誘拐事件が多い。しかもひとつの街で一晩に何人も行方不明になるのだから、普通ではない。今他の任務に当たっている捜査官が戻ってきたら、本腰を入れて捜査することになるだろう。
　席を立ってボスの手に渡ったリストを見せてもらう。そこにヒメルの名前は――なかった。まあ、正直そんな気はしていた。資料を返し、ランスに声をかける。
「ランス、プリンシペット大学のギフト学研究室にメールしてくれ」
「へ？　何を聞くんすか？」
「直近三ヶ月以内の行方不明者のギフトについて。リストを送るから研究室にある資料と照合して欲しいって頼め」
「あ、はい！　了解っす！」
　政府に問い合わせればギフトの情報は得られるが、手続きが色々と面倒なのだ。その点あそこの研究室は各国のギフトに関する情報をたくさん持っている上、仕事も早い。
　ランスのパソコンに急ごしらえの行方不明者リストを送ったところで、ボスが席を立った。
「少し出てくる」
「りょーかいっす」
「いってらっしゃい」
　おそらくさっき言っていた『情報のあて』に会いにいくのだろう。さて、進展がない

こちらはどうするべきか。
「センパイ、チナの大使館に問い合わせします？」
「いや……まあ、一応するか……」
　ランスはプリンシペット大学の研究所へ、俺はチナの大使館へ、それぞれメールを送る。キーボードから手を離し、ふっと一息。
「ランス、俺ちょっと気になることがあってさ、調べに行っていい？」
「いいっすよー！　留守は任しといてください！」

　どうしてもシンシャと不死のギフトのつながりが気になってしまい、ランチタイムを除いて資料閲覧室に篭っていた。ずっと画面を見ていたせいで目がしばしばする。しかし、結局自分が持つ知識以上の情報は手に入らなかった。無念。
　エネルギー不足でふらふらしながら帰り着いた我が家には明かりが灯っていた。エレベーターで上階に上り、ドアを開けばいい匂いが鼻腔をくすぐる。きゅるる、と腹の虫が切なげに鳴いた。
「おかえり。ははっ、疲れてんなあ」
「ああ……ただいま」
　部屋着にエプロンをつけたネイサンが玄関に顔を出し、疲れ切った俺の顔を見て笑う。その顔を見たら、ゆるゆると気が抜けた。あっという間にアーサーは剥がれ落ちて、俺はエリアスに戻っていく。仕事のことなんかどっかに飛んでいって、家に帰ってきたんだ、という安心感が体に満ちた。
「なあ、ご飯は？」
「カレーだよ。もうできてるからさっさと着替えて手洗ってきな」
　そう言い残しネイサンはキッチンへ戻っていく。漂ういい匂いに惹かれて、俺は革靴を脱ぎその後を追った。

　大きめに切られた野菜は噛めばほろりと崩れて旨味を残し、豚肉を口に入れればじゅわりと脂がとろける。まろやかなカレーをじっくり味わってから飲み込み、思わず、ほう、と幸せのため息が零れた。
「あー、おいしい……」
「そりゃよかった」
　カウンターでネイサンとふたり、肩を並べてカレーを食べる。部屋には咀嚼音、食器がぶつかる音、つけっぱなしのテレビから聞こえてくるアナウンサーの声だけが響いていて、ふたりの間に会話はない。お互いにそんなに喋るほうではないから、このほうが気楽だ。なによりもうまいカレーに集中できるのはありがたい。

「また、子どもの失踪事件か」
　思わず呟いた、といった声が俺の意識をカレーからそらす。ネイサンは体をひねり、後方のテレビを見ていた。流れているのはニュース番組で、最近増加している子どもの失踪事件に関する特集をしているようだ。よく知った事件を取り上げられていて、どうにも居心地が悪い。
　ふと、今日起こった出来事が頭をよぎる。シーワンは今頃、ご飯を食べているだろうか。ひとりぼっちでなくて、誰かと話しながら温かいご飯を食べているといいけれど。
　ネイサンはしばらく画面を見つめていたが興味をなくしたらしく、付け合せのサラダに手をつける。しゃく、とレタスの瑞々しい音がした。

「あれ」
　就寝のための準備を終えてリビングに戻ってくると、ネイサンはベランダで手すりに寄りかかり一服していた。ガラス戸越しに目が合い、彼は手を振り笑う。ソファーに置かれていたブランケットをはおり俺も外に出た。風は穏やかで、けれど冷たく、火照った体を包み込む。
「シャワー浴びたのに煙草吸ってるのか。臭くなるぞ」
「煙草は臭くないですー」
　煙が夜風に揺られ、かき消される。携帯灰皿に灰が落ちる。咥えて息を吸い込むと、先が僅かに赤くなる。じっと見つめていて、ふと、浮かんだ疑問を投げかけた。
「なあ、それ、」
「うん？」
「煙草だよ。それ、いつから吸ってんの」
「ああ.....」
　ネイサンは細く長く煙を吐き、しばし考え込むように目線を落とした。懐かしむような瞳は夜の街をなぞり、空に浮かぶ月へ向かう。
「七年くらい前から、かな。憧れの人が吸ってて、真似をした」
　紫煙はゆらゆらと空へ上る。憧れの人って、まで言いかけたとき、ネイサンは携帯灰皿に先を押し付け煙草の火を消した。そして彼の顔に、作った笑顔が貼り付く。
　あ、踏み込みすぎた。気づいた瞬間、出かけた言葉を飲み込む。視線を外し、そうか、と当たり障りのない相槌を打った。
　沈黙。ネイサンは煙草の箱をいじっている。なんだかものすごくいたたまれなくなって、逃げるように手すりから離れた。
「お、俺、もう寝るわ」
「じゃあ電気消していいぞ。俺はもう一本吸ってから寝るから」
「.....おい、体に悪いぞ」
「いーの。俺は早く死にたいんだよ」
　ネイサンは冗談なのか本気なのかいまいち分からない声色で呟き、俺に背を向けたままひらりと手を振る。
「おやすみ、ネイサン」

「ん、おやすみ」
　中に入ってから振り返ると、また彼の周りには紫煙が揺らめいていた。遠慮なしにスパスパ吸いやがって。俺が嫌煙家だったら内側から鍵を閉めてやるところだ。俺の寛大さに感謝しろ。
　リビングのランプをつけ、ロフトに上がりカーテンを閉める。ベッドライトをつけてから、部屋の照明をリモコンで消した。
　ベッドに横たわり、目を閉じる。寝間着から心做しか煙草の匂いがした。

「おはようございま……あれ、ランスだけ？」
「おはようっす！　カノアはシャワー浴びに行って、ボスは来客を迎えに行ったっすよ」
「来客ぅ？」
　シーワンの保護から一夜明け、出勤した俺を迎えたのは、応接用ソファーセットに座ってのんびりとドーナツを食べるランスだけだった。
　箱からチョコレートドーナツをいただき、咥えながらメールを確認する。チナ大使館からの返信が来ているが、予想通り、そんな人間はいないとのこと。俺の中でチナは隠蔽体質というイメージが強いから、ある意味納得の回答だった。
　研究室から返信は――来ていない、か。ふむ、さすがの名門プリンシペット大学ギフト学研究室でもあの人数の照合は時間がかかるようだ。申し訳ないことをしてしまったかもしれない。
「あ、アーサー先輩、おはようございます」
「おはよう、カノア。昨日は病院に泊まったのか？」
「はい」
　シャワー室から帰ってきたカノアはドーナツの箱の前で少し迷ってから、ストロベリードーナツを手に取る。
「そちらは何か進展はありましたか？」
「今のところ特になし、だな」
　沈黙。咀嚼。嚥下。
「おいしいな、これ……」
「っすよね！」
「ですね……」

「ああ、揃っていたか」
　ボスの声がして、同時に嗅ぎ慣れた匂いが鼻をくすぐる。引かれるように顔を上げ、入口に立つ男の顔を見た瞬間、ひゅっ、と喉が鳴った。
「紹介しよう。情報屋のジャックだ。名前ぐらいは聞いたことがあるだろう？」
　黒いチェスターコート、マルボロの匂い。よく知った姿が職場にあることに強烈な違和感を抱かざるを得ない。

おかしいだろ。お前はここを知らないはずで、そういう約束だった。それが、どうして？
「なん、え？　ネイ、」
「あーストップストップ。今はジャックって呼んでくれよ、アーサー？」
ネイサン――もといジャックはそう言っていつもの如く笑ったのだった。

あとがき
もうちょっとだけ（十五ページ）続くんじゃ！（夏号に）

ギフト学研究室備忘録

ギフト学研究室備忘録

笠原ざわ

地下鉄の駅を出た瞬間吹き付けてきた風は冷たく鋭い。寒っ、と身を縮こませつつ僕は職場へと向かう足を早めた。
ここはアロビカ合衆国の東部、首都ハリソンＤ．Ｃから電車で一時間ほどに位置するノイエジャージー州。各種学校や研究所が立ち並ぶ学術都市だ。僕、ピーター・アイビンの母校であり現在働いている州立プリンシペット大学もその一角に肩を並べる名門校、らしい。
暦の上でも冬が間近に迫っているこの時期、道行く人々の多くは厚手のコートを着ているけど、その中にちらほらと違う恰好の人が存在する。ある人は外套の代わりに炎を身に纏い、ある人は触り心地の良さそうな毛皮で全身が覆われている。けど彼らに怯えたり通報したりする人は当然誰もいない。他の通行人と同程度の注意を向けているだけだ。
獣の人は対内的ギフトの細胞置換系。炎の人は対外的ギフトの、何だろう、具現化系か操作系かな。いいなぁ、どっちもあったかそうだ。
寒さから気をそらすため、と言うよりは最早職業病みたいなものだ。通勤の足を止めないまま、外見から得られる情報を元に僕は通行人のギフト分類を始めた。

不思議な力を持った最初の子どもが生まれてから、およそ三十年。「ギフト」――「贈り物」の名を冠する異能力を持つ人々は、世界の総人口の約八割を占めるに至った。
神から与えられた贈り物と言われているギフト、これに関する研究が一学問として成立したのは二十年ほど前の話だ。本邦のギフト学研究室はプリンシペット大学を始めまだ数か所しか存在しない。
まだ新しい学問だからか、ギフト学には様々な分野の専門知識を持つ者が集う。僕も数ヶ月前に配属されて以来、優秀だけどその分個性の強い上司や先輩達に圧倒される日々を過ごしていた。

大学の広い敷地を縦断してようやく医学部棟に辿り着く。玄関の扉を入った所で僕はほっと息をついた。屋内最高。風が無いって素晴らしい。
マフラーを緩めつつ研究室に向かう途中、廊下の先に見覚えのある後ろ姿を見つけた。我らがギフト学研究室の室長、ウィリアム・クラーク教授だ。超人的な記憶力というギフトを持つ彼はその能力と地頭の良さを最大限に活用し、四十代にして教授までたどり着いたらしい。
室長、と呼びかけると彼は普段より鈍い動きでこちらを振り向いた。眠そうに二、三度まばたきをしてから彼は口を開く。
「ピーターか。おはよう」
「おはようございます。今日は研究室で仕事ですか？」
「立ち寄るだけだ。この後すぐに講義でな」
そこで言葉を切ると室長は手に持っていたＡ四サイズの封筒に視線をやり、そして僕の顔をじっと見た。僕知ってる。これはお使いを頼まれるパターンだ。
「この書類をソフィア先生に渡してくれないか。あと午後から会議に出て来ると伝えてほしい」
分かりました、と封筒を受け取りながら室長の顔色を確認する。目元の隈は昨日より濃い。また徹夜でもしたのだろう。
「無理はしないでくださいね」
「問題ない」
微妙にずれた返事だがあえて目をつむる。直接講義室に向かう事にした室長を、その疲労が染み付いた背中を見送ってから僕は改めて研究室へと足を向けた。

封筒を抱え直してから研究室のドアを開ける。おはようございます、と一声かけると焦げ茶色の瞳を持つ女性――ミクモ・ヒヨリ先輩が何故か疲れた様子でこちらを向いた。
「おはよう。ちょっとこいつ説得するの手伝ってくれない？」
東洋系特有の幼い顔立ちも今は険しい。明らかに呆れた声でそう言うなりヒヨリ先輩はテーブルの前で何かしている別の先輩を指差した。
指を差された青年――ヨハン・モラレス先輩は何故か真剣な表情を浮かべ、テーブル

の上に置かれたマグカップとにらみ合っている。持ち手が歪に変形したそれは確かヒヨリ先輩の私物だったはず。朝から何やってんだヨハン先輩。
　僕に気付くと、彼は挨拶もそこそこにテーブルの前に立ちはだかる。
「ピーターも触んなよ！　　まだ微調整終わってないんだからな！」
　澄んだ青空を閉じ込めた瞳が僕を真っすぐ貫く。勢いに押され頷くと、彼は満足気に笑ってまたマグカップとのにらめっこに戻った。
　硬度操作のギフトを持つ彼の手にかかれば陶器も変形し放題だ。そう表現すれば恰好よく聞こえるけど、今僕らの前で持ち手をぐにぐにといじっている姿は粘土で遊ぶ幼児と何ら変わりない。本当に何やってんだヨハン先輩。
「ヨハン、本当に止めて。早く元に戻して」
「こっちの方が絶対便利だっての！」
「迷惑。あんたの考えを押し付けないで」
　未だ手を止める事なく騒ぎ続けるヨハン先輩を横目にヒヨリ先輩は舌打ちを隠さない。彼が手を止める気配がないのを悟ったのか、はーぁ、とわざとらしくため息をついた。
「この石頭が」
「コノイシアタマ？」
「ごめん祖国の言葉出た。頑固者って意味」
　未だ耳慣れない発音につい聞き返してしまう。どうやら母国語が出るくらいに参っているみたいだ。まだ朝なのに。ヒヨリ先輩、本当にお疲れ様です。
　これは第三者が止めるしかない。そう判断して、そろそろ始業時間ですよ、と声をかければヨハン先輩は渋々マグカップを元の形に直して自分のデスクに戻っていった。
　室長から預かった封筒を渡すべき相手はまだ来ていない。一旦僕のデスクに置き、研究室のポストを覗く。紙媒体を好む人や省庁からの郵便物を確認するのは新人である僕の仕事だ。普段より多く届いているそれらを宛先別にざっと仕分けしてから、一番荷物の量が多かったヨハン先輩の元へ向かった。
「これヨハン先輩宛の資料ですね」
　サンキュ、と受け取り中身を取り出すと先輩はすぐにデータ処理用のソフトを立ち上げ一つ一つの数値を入力し始める。
「何のデータですか？」
「今回のは初等部の健診だな。前言ったろ、統計学と遺伝の研究」
「あぁ、ギフト保持者二世の件ですね」
「そ。親子間のギフトに関係性があるか調べるには丁度いい時代になったわけだ。まぁ関連は無い、って結論になりそうなんだけどな」
　ケラケラと喋りながらもキーボードを打つ彼の手は止まらない。流石ベテラン。普段ヒヨリ先輩と口喧嘩しながらもしっかりと資料をまとめているだけはある。
　小気味よいタイピング音をＢＧＭにしつつ、他に届いていた先輩宛の手紙数通を邪魔にならない所に置く。以上ですね、と告げると先輩はお疲れさん、と労いの言葉をくれた。
「ヨハンそのデータ後で送って。ちゃんと参考文献として書くから」
　斜め向かいのデスクから声が飛んでくる。声の主はヒヨリ先輩だ。はぁ？　　と僕のす

ぐそばから威嚇の声が飛ぶ。
「正式に発表してないデータ持ってく気かコノヤロウ」
「大丈夫。ヨハンの論文より発表遅らせる予定」
「違うそうじゃない」
　微妙に論点がずれた会話にヨハン先輩は頭を抱える。これはフォローに回った方がいいなぁ、と思ってヒヨリ先輩宛の荷物と共に彼女のデスクに向かう事にした。
「ヒヨリ先輩、必要でしたらデータベースから引っ張って来ましょうか？」
「じゃあ、お願いしようかな。地域はノイエジャージー州、対象は初等部生から高等部生、時代は十年前から去年まで」
「指定保護ギフト保有者は含めますか？」
「別でまとめてあるから外して大丈夫。それにしても珍しいやつばかりだよね、指定保護ギフトって」
　これ見て、と先輩が指差した画面にはエリアス・カーライルという指定保護ギフト保有者のデータが表示されている。対内的ギフトの細胞置換系に分類される彼のギフトは肉体の一時的な宝石化らしい。
「体が宝石になるとか、人間の域超えすぎでしょこれ」
「お前のギフトもなかなかだろ」
　さっきと同様に斜め向かいのデスクから声が飛んでくる。口を挟んできたのはやはりヨハン先輩だ。ヒヨリ先輩が睨み返したことでその場は一気に険悪な雰囲気になる。
「黙れ器物破損男」
「んだと冬眠ヤロウ」
　あぁまただ、と肩をすくめる間も無く二人は初等部生も引くくらいにレベルの低い口喧嘩を始めた。
　いつも冷静なヒヨリ先輩だけど自分のギフトに関しては沸点が低くなる。彼女のギフトは擬似長命。長命と言っても不老不死じゃなくて冬眠に似た状態になる、らしい。勝手にギフトが発動する事が多々あるそうで、それもあってかあまり好きじゃないと先輩は言っていた。ヨハン先輩もそれを知っているはずなのに何故か事あるごとに話題に出すから、喧騒が絶えない。困った先輩達だ。
　二人とも三十近いのになぁ。呆れながら遠目で見ていると不意にヨハン先輩特製の紙飛行機が眼前を横切る。驚きと恐怖のあまり、ひぇ、と情けない声が口から漏れた。
　ただの紙飛行機と侮る事無かれ。元は貧弱な紙でもヨハン先輩の手にかかれば鉄板並みに硬くなる。つまり、あの紙飛行機は当たると絶対痛い。
　そこまで考えが至る頃には既に次の一投が迫っていた。それは僕の頬をかすめて壁に突き刺さる。刹那、水面が波立つのとよく似た感覚が頬から顔面全体に伝わった。反射的に当たった部分を確認するけど傷も無ければ血も流れてない。ちゃんとギフトが発動した事に安堵の息をついた。
　体の液体化。それが僕のギフトだ。ギフトのおかげで基本的に怪我しないし痛みも無いけど、だからといって何度も味わいたい感覚ではない。
　久々にギフトを使ったのもあって疲労がすごい。まだ朝の九時にもなってないのに。時計のついでにちらりと先輩達の様子を伺うと二人の攻防は更にヒートアップしていた。

どうやら火種にガソリンを注いでしまったみたいだ。
「ヨハン周りちゃんと見てる？　その目は飾り？」
「避けてるだけの奴に言われたくねぇなぁ！」
「こ、コーヒー淹れてきます」
　それだけ言ってテーブルの上に放置されたままだったマグカップを回収し、早々に給湯室へと避難した。
　給湯室には冷蔵庫や簡易キッチン、誰が持ち込んだのか分からないワッフルメーカーなどが揃う。その片隅にもまた別の青年――リアム・ホワード先輩がいた。
　彼はいつも通りパイプ椅子に深く腰掛け、携帯端末を片手にくつろいでいる。挨拶だけしてお湯を沸かす準備を始めると、眠そうなまぶたで覆い隠された三白眼がゆっくりとこちらに向けられた。
「またヨハンとヒヨリ揉めてる？」
「ご明察。今日もです」
「飽きないね、先輩達」
　話しながらも携帯端末を操作する手は止まらない。恐らくゲームだろう。
「で、リアム先輩は休憩ですか？」
「さっきまでソビア連邦の研究室とテレビ通話してた。メリハリは大事」
　ソビア連邦とは北の国という別名を持つ大国だ。アロビカ合衆国とは別の大陸に国土を持つため、二国間にはかなりの時差がある。さっきまで、という事は早朝からずっと通話していたのだろう。
「お疲れ様です、何か飲みますか？」
「ココア濃いめで」
　その言葉を待っていた、と言わんばかりにリアム先輩は目を輝かせた。

　淹れたてのココアを受け取り、先輩は舌を伸ばし恐る恐る水面に触れる。熱っ、と分かり切った反応が返ってくるのを横目に三人分のコップを用意する。
　すぐに飲むのは諦めたのか先輩はしょんぼりした顔でコップを置く。湯沸かし器に水を追加し終えて少し暇になった僕を捕まえると、ココアが冷めるまで、と前置きしてポツポツと通話の内容を教えてくれた。
「国ごとに傾向とか変わるんですかね」
「どうなんだろうね。まだ比較してないけど」
　そう呟くなり先輩はふわりと宙に浮いた。重力操作のギフトを自在に操り彼はそのまま回転し始める。マイペースに始まった最早独り言に近い語りに僕は耳を傾けた。
「アロビカだと細胞置換系と操作系が多いけど、州や市町村レベルで見ると違う地区もある。ギフトの発現条件や共通点もまだはっきりしてない。個々のギフトに明確な関連性や系統図は無いし能力の程度もバラバラ。全てのギフトは何かしらの利点を持つ、と考えた方がまだ筋は通りそう」
　考えの整理が終わったのか、そこで話を区切り彼は音もなくパイプ椅子に着地する。再びマグカップを手に取ると彼は視線だけ僕に向けた。

「別にサボってる訳じゃない。でも誤解されるから他言無用で」
「言いませんよ」
「いい子」
　分かってるじゃん、と言いたげな笑みを浮かべ、彼は程よく冷めたらしいココアを美味しそうに飲み始めた。
　三人分のコーヒーを注ぎ終えるのとほぼ同時に、研究室から大声が聞こえてくる。
「ヤパングはデータが無い？　　あんだけガキの健診してんのに？　　先進国は名前だけかよチクショウ！」
「私の祖国に文句でも？」
　大声の正体はヨハン先輩の嘆きのようだ。噛み付くヒヨリ先輩の声も即座に飛んできた。壁を一枚隔てても届くくらいに再燃しているっぽい。
　あの空間に戻るのヤダなぁ。
　助けを求めてリアム先輩をチラ見してもサムズアップしか返ってこない。知ってた。
　観念して戻ろうとしたその時、研究室のドアが開く音がした。給湯室との境目から様子を伺うと背筋をしゃんと伸ばした女性――ソフィア・フローレス先生が入って来る所だった。
「おはよう。相変わらず賑やかですね」
「おはようございます先生。昨晩と今朝のバイタルです」
　入口へと駆け寄ったヒヨリ先輩が携帯端末を差し出す。その画面を覗き込み、一分足らずで顔を上げるとソフィア先生は安心したように微笑んだ。
「異常は無いですね、よかった。最近寒いから気を付けて。具合悪くなったら周りの人にすぐ言うこと。いいですね？　　すぐよ、すぐ」
「はい」
　素直に頷いたヒヨリ先輩の頭を撫でつつ、先生はヨハン先輩の方へと顔を向ける。
「ヨハンさん、何かあったらすぐ言ってくださいね。ヒヨリさん無理しがちだから」
「うぃっす」
　ようやく静かになった先輩二人にコーヒーを配る。一度自分のデスクに寄ってから僕はパソコンの起動を待つソフィア先生の元へ向かった。
「ウィル先生はもう講義に行ったのかしら」
「はい。あと伝言で、午後から会議参加するらしいです」
「了解です、と。リアムさんはまた給湯室ですか？」
　そうですと答えかけた口を無理やり閉ざす。リアム先輩との約束を破るわけにはいかない。不自然に黙ったからか、先生はくすくすと笑い出した。
「パイプ椅子の音が聞こえたわ」
　そうだった。ソフィア先生は聴力強化のギフト保持者だ。
　話題をそらすために室長から頼まれていた封筒を渡す。受け取り中身を確認すると先生は納得したように頷き、了解ですと答えた。
「何の資料なんです？」
「死因ですよ」
　朝食のメニューを答えるかのようにソフィア先生は表情一つ変えない。若干引いてる

僕には気付いていないのか、先生は言葉を続ける。
「診察や解剖の結果、傷害事件もしくは事故の原因にギフトが関わっていると判断された事例を警察や医療機関から送ってもらっているんです」
　そこで区切ると視線を上げ、何を思ったかこちらに資料を差し出してきた。
「見ます？」
「結構です」
　即答すると先生は吹き出した。何故だ。
　ひとしきり笑うと先生は書類を手元に戻して話を再開する。
「何が起こるのか、何故起こるのか。前者も大事だけど後者の方がもっと大事だと私は思うんです。後手に回るだけじゃ対処しきれないもの」
　そう言う先生の顔に笑みは無い。手元の資料一枚一枚に素早く目を通しながらこちらに言葉を投げかけてくる。
「ピーターさんも気付いているでしょう？　一見素晴らしいギフトでも本人からするとただ辛いだけの事もある。対処さえ分かっていれば変えられた未来もあったでしょうね」
　資料を掴む手には力が入っている。吐き捨てるように言ったその声は普段より冷たくて、あえて突き放しているみたいで。
　不意に身近な人達のもしもが頭をよぎる。もしもヨハン先輩が自分の体も壊してしまったら。ヒヨリ先輩が冬眠状態から目覚めなくなってしまったら。リアム先輩が地上に戻れなくなってしまったら。
　ギフトが発現して以来久しく感じてなかった痛みが胸元を締め付ける。気付けば服の袖を固く掴んでいた。
　そんな残酷なもしもが積み重なったものをソフィア先生は一人で見つめている。本当に強い人だ。でも、それって。
「辛くないですか」
「辛くても誰かが向き合わないと。ウィル先生に救われた身ですもの。私に出来る事をしなきゃ」
　室長の名前を出し、先生は微笑む。眉間に入った力はまだ抜けていない。その表情が何かを押し殺した上での笑みに見えて仕方なかった。

　資料を一旦しまいパソコンを起動させるソフィア先生のデスクに他の郵便物を置いていく。これで全部です、と声をかけようとして、はてと首を傾げる。先生は何故かパソコンの画面を見つめたまま青ざめていた。
「ピーターさん、ウィル先生って、今朝は研究室に来たのかしら？」
「いいえ。廊下で会っただけですけど」
「あぁ、はい。分かりました」
　何故か語尾に怒りがにじんでいる。どうしたんですか、とディスプレイを覗き込んで、僕はようやく絶句と怒りの理由を察する。表示されていたのは研究室宛のメールボックスと、山ほど並んだ未開封メール。見ているだけで頭が痛くなりそうだ。
　確か昨日の連絡確認担当者は室長だったはず。あの寝不足室長何やらかしてくれてん

だ。頼むからちゃんと寝て。
　研究室内はいつの間にか静まり返っていた。ソフィア先生の手元でクリックの音が一つするたびに室内に緊張が走る。しばらくして、深々とため息をつきながら先生がイスからゆっくりと立ち上がる。周囲を見回す彼女は責任者の顔をしていた。
「室長代理権限です！　　至急今から転送するリストに記載されているギフトのデータを集めてください！」
「承知」
「了解っす」
　真っ先に反応したのはヒヨリ先輩とヨハン先輩だ。二人は慣れた様子でリストを確認すると早速作業に取り掛かり始める。
　僕もパソコンを起動し、転送されてきたメールを開く。送信者は連邦捜査局ギフト犯罪対策課。依頼内容は国内の行方不明者リスト三ヶ月分。ざっと目を通しただけでもかなりの量がある。これはだいぶ時間がかかりそうな案件だ。
「行方不明者リスト、ハリソンＤ．Ｃは先月分訂正した奴さっき共有ファイルにアップロードしたから。リスト完成してる地区はそっちから引いた方がいいかも」
　給湯室から戻ってきたリアム先輩が携帯端末を片手にそう言う。事情はもう把握してるらしい。彼がデスクに戻るのを眺めつつソフィア先生からの指示を待つ。
「ピーターさんは先々月のトルフォルニア州をお願いします。それが終わり次第、三人が集めたデータを日付順に並べてください」
「分かりました」
　指示に従い僕もデータベースを開く。研究室内の温度がじわりと上がった気がした。

　アロビカ合衆国を構成する全五十州の行方不明者リスト三ヶ月分、それらを地域問わず日付順に並べ直したリストが完成する頃には時刻は既に十二時を過ぎていた。
　最終稿をソフィア先生に提出すると、お疲れ様ですという言葉と共に昼休憩へと送り出される。一足先に昼休憩に入っていた先輩トリオは既に各々の定位置についていた。
　僕も通勤途中に買ったホットサンドを電子レンジで温め直してから席につく。いい感じに焦げ目がついているそれを頬張ると中からチーズがとろりとあふれた。うんまい、と幸せに浸る僕の隣ではヨハン先輩が肉汁滴るハンバーガー片手に何かを考えこんでいる。
「やっぱ似たギフトばっか見た気がすんな」
「確かに治療に関するギフトが多かった気がする。私の体感だけど」
　そう返しながらヒヨリ先輩はコーンチャウダーに息を吹きかける。頷く事で同意を示す僕の向かいで、ベーグルをさっさと食べ終えたリアム先輩が何かひらめいた顔をした。
「特定のギフトを狙った誘拐、だったりして」
「まっさか！」
　軽い調子で笑い飛ばすヨハン先輩だったが、徐々に声の勢いが落ちていく。咀嚼しつつ横目で様子を伺うと彼はテーブルに突っ伏していた。スープを一口飲んだヒヨリ先輩がとどめを刺しにかかる。
「今回の依頼主はギフト犯罪対策課、つまりＦＢＩが動いてる案件でしょ。何か事情が

ありそう」
「また面倒事巻き込まれんのか.....」
　四人の中だと一番古株のヨハン先輩は今までも散々巻き込まれたんだろう。また、の重みが僕なんかとは違う。やだなー、と彼は諦め半分でぼやいた。

　それはお腹も満たされ、先輩達も講義の準備や意見交流会の打ち合わせなどそれぞれの作業に戻ってしばらく経った頃だった。室内にノックの音が響く。来客だ。
　丁度近くにいたリアム先輩がドアを開けた。風の流れがタバコの匂いを運ぶ。先輩に案内されて入室したのは黒いチェスターコートを着こなした男性、情報屋のジャックさんだ。彼の姿を視認した途端にソフィア先生は嫌そうな顔をした。
「またあなたですか」
「おいおい、常連客を無下に扱うのがギフト学研究室の礼儀なのか？」
　挨拶と称したジャブの応酬を終えるなりジャックさんは折りたたまれた紙を内ポケットから取り出した。目の前にかざされた紙面をしばらく見つめた後、ソフィア先生は怪訝な顔で彼を見る。
「地図ですか」
「あぁ。丸が付いてる地域にどんなギフトが分布してるのか知りたい」
「あらジャックさんお忘れですか？　私達、あなたと違って本職は研究者なんですよ」
「そう、ギフト学者即ちギフトの専門家だ。研究の過程ではあらゆる手段でデータを有効活用する事だろう。そんな皆様のことだ、完成する資料はきっと見やすく素晴らしい出来だろうな」
　正気か？　と暗に言いつつ作り笑顔で返すソフィア先生に対し、ジャックさんは大げさな言い回しで煽ってくる。十二分にソフィア先生を苛立たせるというノルマでも達成したのか、彼は表情を真剣なものに切り替えた。
「これはシードウ雑技団の巡業場所だ。仙桃極楽会が関わっている可能性がある」
　仙桃極楽会と聞いた途端にソフィア先生が息を飲む。先輩達も一斉に険しい表情をする。どうやら事情を理解できていないのは僕だけらしい。
「先輩、仙桃極楽会ってチナの宗教団体ですよね？」
「表向きはな。裏じゃ不老不死を求めて何でもする輩だ。あんま深く関わんじゃねーぞ」
　丁度隣にいたヨハン先輩に聞くと即座に釘を刺された。はーい、と素直に返事する。僕知ってる。先達の言葉は素直に聞いた方がいい。
　僕達の視線の先、ソフィア先生は顎に手を当てた姿勢で静止している。少しの間思案してから先生は地図を受け取った。
「分かりました、引き受けましょう。ただし日付を超えることを覚悟してくださいね」
　二言目は後方で呑気に喋っていた僕達にも突き刺さる。ソフィア先生、僕達残業確定ですか。

　午後四時過ぎ、ノックも無しに研究室のドアが開く。視線だけを向けるとそこには室

長が朝よりも疲労を背負った状態で立っていた。
「ただいま」
「遅い！」
　会議から帰って来た室長へ怒声が飛ぶ。声を荒げたソフィア先生は一つ咳払いをしてから今の状態を端的に報告した。
「ジャックさんからギフト分布に関する依頼がありました。仙桃極楽会との関連が考えられるそうです。ウィル先生も協力してください」
「無理。眠い。限界」
　室長は両手で耳を押さえ嫌々と幼子のように首を振る。かわいらしい仕草だけど、やってるのは四十代後半の男性だ。正直今の精神状態で目撃するのはキツイ。着ぐるみだったらまだマシかもしれない。せめて頭だけでも。
　ソフィア先生も流石に耐えられなかったのだろう。引っ込めたばかりの苛立ちを再び表に出しながら室長の元へと詰め寄った。
「あぁもう！　　ならこれだけ答えてください。合衆国内での仙桃極楽会の拠点都市、先生なら知ってますよね？」
「先日まではノイエヨーク州、現在はハリソンＤ．Ｃを中心に布教活動中。以上おやすみ」
　それだけ返すと室長はソファに倒れ込み、そのままピクリとも動かなくなる。微かな寝息が聞こえるのを確認するとソフィア先生はそのまま室長を放置して作業に戻っていった。
「屍出来ましたね」
　微妙に歪んだマグカップを片手に給湯室から戻ってきたヒヨリ先輩が無慈悲な言葉を吐く。しかしそれを否定できる人はその場にいなかった。
「不老不死、か」
　タイピングの音が満ちる室内にヨハン先輩の呟きが投げ込まれる。自分のデスクに戻ったばかりのヒヨリ先輩がほんの少しだけ嫌そうに顔を歪める。
「何、興味あるの」
「ちょっとはな。けどずっと置いてかれる側なんてツライだろ」
　そう答えたヨハン先輩にいつもの騒々しさは欠片も無い。ヒヨリ先輩もそれ以上は言及せず、中断していた作業を再開する。
　そっか、ヒヨリ先輩のギフトは。
　脳裏に浮かんだ可能性を黙殺して、僕も地図との照合作業に意識を集中させた。

　普段とは違い地図と表を結びつける作業に研究室の誰もが苦戦を強いられる。午前中も見たようなデータを時々開きつつ、何回か小休憩を挟みながらもようやく資料が完成した。
　時刻を確認するとぎりぎり日付は超えていない。椅子から立ち上がるなり終わったー！
　と叫んでいるヨハン先輩や座ったまま伸びをしているヒヨリ先輩、大きなあくびをしているリアム先輩の顔はどことなく晴れやかだ。僕もプリンターの前で印刷を待ちつつ達成感を抱いている。何だろう、やり遂げた感がすごい。

僕達とは違ってまだ気を引き締めたままのソフィア先生が依頼主に連絡を入れる。十分も経たずにジャックさんは研究室に現れた。刷りたてほやほやの書類にざっと目を通すと彼は感嘆の声を上げた。
「相変わらず素晴らしい腕前だな」
「お褒め頂き光栄です」
相対しているソフィア先生の顔には笑みが貼り付けられている。昼間以上の作り笑顔だ。心底波長が合わないんだなぁ、と傍目から見てても分かる。無地の封筒に書類をしまいながらジャックさんは対価の交渉を始める。
「対価は前言ってたソビア連邦のデータでいいか？」
「えぇ。ジャックさんほどの情報屋なら簡単に用意出来るでしょうね」
昼間のお返しと言わんばかりにソフィア先生は煽り返す。言ってくれるじゃねーか、と彼は挑戦的に笑った。
ジャックさんを送り出し、ようやく肩から力を抜いた先生が僕達の方に向き直る。
「みんなお疲れ様。こんな時間だし、仮眠室の使用許可取ったのでゆっくり休んでください」
その言葉を合図に先輩達はぞろぞろと仮眠室に向かう。彼らについて行く途中でふと思い出す。
仮眠室のベッド、四個しか無かった気がする。

まぶたを押し上げて数秒。目の前にはテーブルが、その向こうには室長の背中が見える。.....ここどこだっけ。
周囲を見回し、まだ覚醒しきっていない頭で自分が置かれている状況を整理する。確か昨晩は遅くまで残業してて、そのまま職場に泊まる事になって、じゃんけんに負けて結局研究室のソファで寝たんだ。
エアコンの電源を入れ、凝り固まった体をほぐしているうちに仮眠室から次々と人が戻って来る。座り直したままの姿勢でぼんやり眺めていると向かいで寝ていた室長が目を覚ました。目元の隈はだいぶ薄くなっている。のそりと体を起こすと彼は大きなあくびを一つした。
「どうにか対処できたようだな」
他人事のような態度で放たれた言葉に、僕含め部下一同は絶句した。自分の研究室の事なのにその態度ですか？　少なくとも午前中の件については室長のせいでしょ？
という声にならない訴えがそこかしこから伝わってくる。ソフィア先生なんかは笑顔のまま自席で凍り付いている。けれども多分室長は気付いていない。
ゆらりと立ち上がり、ソフィア先生は室長の眼前で拳を構えた。
「先生、一発いいですか？」
「ストップだレディ。その白く華奢な手が傷付いてしまう」
「世辞も言い逃れも無用です。覚悟！」
勢いよく振り上げられた拳は止まらない。

ぼふん、と。気の抜けた音が室長の顔面からした。パイ投げの要領で枕を押し付けられた彼は珍しく目を丸くしている。テーブルの上に並ぶ安眠グッズにも気付いたのか、何だこれはと困惑している。ヤパング流お供え物スタイル、と昨夜ヒヨリ先輩が真剣な顔で並べ直していたのはあえて黙っておく。
「室長が心配なんすよ、ソフィア先生も俺らも」
必死に笑いをこらえられながらヨハン先輩が補足する。これ以上は我慢できなかったのか彼はその場を離れ、帰り支度を終えたばかりのヒヨリ先輩へと声をかけた。
「ヒヨリお前気を付けた方がいいんじゃね。行方不明者の中に似たギフト持ってる奴いたろ」
「一応単独行動はしない予定」
「アロビカはヤパングほど治安良くねーんだぞ。車出す。リアムも乗ってけー」
呼ばれたリアム先輩がいそいそと二人の元へ向かう。僕も乗せてくださーい、と便乗して言おうとした、が、それよりも先に室長と目が合った。嫌な予感がする。
「ピーター、来い」
逃げないようにしっかりと肩を掴まれた。巻き込まれたくない、と先輩達がさっさと帰る姿を見送るしか出来ない。抵抗を諦めた僕をソファに座らせてから室長はソフィア先生を呼び寄せた。
「レディ、改めて要約を頼む」
「はい。一昨日ギフト捜査局から届いていた案件は国内の行方不明者リスト三ヶ月分。ジャックさんからの依頼は特定地域におけるギフト分布のリスト化。後者は仙桃極楽会との関連が疑われています。また後者であげられた地域では行方不明者が増加している期間がありました。別口からの依頼ですが、この二件には関連性が考えられますね」
簡潔にまとめられた報告を聞き終えると室長は、仙桃極楽会か、と呟いた。
「相変わらず手段を選ばないようだな。雑技団の出資者も洗いざらい調べるべきか」
昨日休憩中に先輩達から聞いた限り、仙桃極楽会はなかなか過激な事もしているらしい。噂では特定のギフトを狙った誘拐とか人体実験とか。聞いてるだけで嫌になるような話がいくつも出てきて、絶対に関わらないと決意したのは覚えている。
「ギフト保持者の誘拐なんて、新たなギフトでも作る気なんですかね」
「あり得なくはない。人の手でギフトを生み出せる可能性は十分にあるだろう」
さらりと返ってきた答えは僕の予想を上回る内容で。一瞬の沈黙の後、ソフィア先生が続きを促した。
「ギフトは神からの贈り物とされている。だが人は今神の域に手を伸ばしている。もし実現したら天罰が下されるかもしれないな」
天罰と言いつつ室長は口角を上げ、邪悪な笑みを浮かべた。ＲＰＧのラスボスにこんな奴いたなー、と現実逃避する僕の横でソフィア先生はため息をついている。
「覚悟の上ですよ。少なくとも私は、ですけど」
「ほう。その心は？」　邪悪な笑みはそのままに室長は興味深そうに問いかける。視線を向けられ、ソフィア先生は姿勢を正して答える。
「技術の発達は悪用されるリスクが常に付き纏うもの。それでも、将来の更なる発展につながると信じて私達は探求しなければならない。じゃないといつか停滞してしまいま

すから」
「停滞した世界に未来は無い、でしたっけ」
　先生の言葉を聞いて、日頃から室長が繰り返している言葉を復唱すると彼は何故か満足気な顔で頷いた。
「研究によってあらゆる可能性を広げ、法によって悪用の危険性を縛る。この二つが足並みを揃える事こそが重要だ。ギフト保持者発生からおよそ三十年。我々学者にとっては短いが民衆からすれば十分すぎる」
　そこまで一気に言い切ると室長は表情を引き締める。
「あの外道に追いつかれる前に次の一手を打つ」
　その場の空気が張り詰める。室長の言葉のせいかそれとも普段と違う朝だからか、何故か胸のざわつきが収まらなかった。

　ギフトとは神からの贈り物である。民衆の間で生まれたこの噂は今や定説として扱われ、世界中に浸透している。
　しかしこれらの異能力は何がきっかけで与えられたのか、能力がどのような基準で選ばれるのかは未だ明らかになっていない。

あとがき
　続かないよ！　多分な！
　本作品は佐久間佳雪さんの作品と同じ世界の物語です。ギフト犯罪対策課のエリアス達が事件解決に動いている裏ではこんな人達も動いていましたよー、という部分を書かせていただきました。いかがだったでしょうか。
　ここ数ヶ月ほど「贈り物」の名を冠する異能力、そしてギフト学という架空の学問について佐久間さんと一緒にずっと考えていました。めちゃくちゃ楽しかったです。
　最後に、ここまで読んでくださりありがとうございました。
　佐久間さんが書く後編をお楽しみに！

愛しいの果実

愛しいの果実　　どこぞの佐藤

首筋を掠める風に思わず身が震えるような晩秋の深夜は、ずぶ濡れで歩くにはあまりにも寒すぎた。

人々の声や形を箱みたいに家々の中に仕舞い込んで、静寂だけが残された暗い住宅街。

無機質な白色の街灯と温かみのある黄色の軒灯を交互にすり抜けながら、慣れた道を家に向かって歩いていく。

急な坂を下って、奇妙な造形の柑橘類の木のある十字路を左へ。何のことはない、散々通った帰路だ。

寒気がした。急いだ方が賢明だろう。逃げるように速足で帰路を進む。何の気なしに見上げると、面白味のない黒に塗りつぶした雲一つない空。朝は冷え込むに違いない。

街中の夜空は、まばらな星々が物寂しい。そのまま東方を見遣って、比較的明るい恒星を擁したオリオン座が上がってきていた。

ギリシャ神話の英雄オリオン――アポロンの謀略によって純潔の女神アルテミスに射殺された狩人、或いは蠍の毒針に果てた豪傑。

ふとくだらないことを思う。

もし彼が自身の死の原因を知ることになったら、一体何を思うだろうか。

そんな疑問がぱっと脳裏に浮かんで消えた。

帰宅して、熱傷するくらいに熱いシャワーを浴びて身体を温めた。痛いくらいだが、自罰的なくらいでないと収まらないような蟠りがあった。

湯を止めて、手早く身体を拭く。髪を乾かしている時に、洗面台の鏡に自分の身体が映った。痩せた男の身体。茶色の短髪、見慣れた顔、肉も脂も少ない肢体。それと、首元に小さな内出血、鎖骨に歯型、肩に数条の赤い痕。

湯冷めしない内に蒲団に入って瞼を閉じる。ゆっくりと息を吸って吐く。それを繰り返す。あの出来事とあの日の情景が益体もなく思い出される。

哭きたい。自業自得だ。そんなことは分かっている。だが今更.....。

蒲団から這い出して、棚からウイスキーを取り出して、二杯ほど一気に飲み下す。こうでもしないと今日は眠る事さえできなかった。

やがて酩酊した頭は覚束なくなって、微睡みに沈んでいく。

ふと横向きになって手を伸ばし――虚空を掻いて重力方向に落ちた。

＊＊＊

――為合った後の身体には、相手の性情が残されている。

乱れた呼吸の女。その素肌はきめ細やかな白色がほんのりと淡く桜色に上気し、肩や手首、所々のやや濃い赤色は圧迫した痕か、擦過した痕か。首筋や鎖骨の小さな内出血は痛々しさを思わせるくらいには血色が濃い。
総身は白いシーツに染みる程度には汗ばんでいて、それとは別の粘性が隈なく這い回ったのが見て取れる。

前述の命題を真とするならば、これが紛うことなく青年だった。

吐息が微かに白む晩秋の宵の口だった。
駅前の歓楽街は大通りを長径とした楕円のように広がり、似た類の店が一所に軒を連ねていた。だが、青年が居た場を提供する類の店は、不思議と密集せず市街に点在しているものだった。
二人は街中にしては電飾の大人しい暗い所を歩いていた。大通りを幹とするならばその道は枝葉となるような狭い道だった。この街の興った時からあるような古い民家と商店の軒灯が連なり、そこに比較的新しい建物が偶に在る、そんな場所だった。
「ねえ」
青年の傍らの女が甘える猫みたいな声音で話し掛ける。が、青年は茫然として反応がなく、女は青年の腕を大きく揺する。
「ねえってば」
「どうしたの？」
ようやく青年が気付く。
「ぼーっとしてたから、何考えてんのかなって」
「ゴメン、ちょっと考えてて」
「まだ賢しくなったまま？」
女はからかうように言うと、
「いや、もうすっかり馬鹿になったよ」
青年はちゃらけて返した。
どちらからともなく笑う。
女は左腕に巻き付くようにして手を取った。長くダークブラウンよりも黒色に近い髪がさらりと流れる。ふと、青年はそこに違和感を覚えて、すぐにその正体を発見した。
「髪留め変えた？」
「気が付いた？」

女が嬉しそうに笑う。
後頭部で一つに縛った髪、その髪留めに紅い玉が一つ増えていた。それが彼女の重すぎない黒髪に紅一点に映えて、顔立ちを華やかに引き立てている、かと思えば、揺れる赤色に幼げな印象を覚えて、大人びた雰囲気のある彼女に何処か倒錯的な魅力を与えていた。

青年とこの女性、すなわちＸとの交際が始まったのは、およそ一月前。青年が彼女に心を奪われたのはそれよりも前の晩夏のある日のこと――二人がひょんなことから一夜を共にした時のことだった。
その時以来、二人が逢瀬を、身体を、重ねてそして身体を傷付け合わないことは、一日たりともなかった。風呂場の鏡に映し出された自身の身体と寝具に横たわった彼女の身体、それらが青年の眼と記憶に焼き付いて消えることはない。
血色鮮やかな内出血、擦過の痕、圧迫の痕、爪痕。それと視覚では捉えられない痛み。

――為合った後の身体には、相手の性情が残されている。

この言葉の真偽はともかくとして、箇所や程度の差異はあれども行為に及んだ後のお互いの身体は、恐ろしいくらいに似通っていた。

暗く細い道を進むと次第に喧騒が聴こえてきて、大通りに到達するとそこは一転して、殷賑として人々の気配に溢れていた。幾つもの街灯と電飾と車のヘッドライト。車道の往来は特にバスやタクシーが多く、また人足も繁くあった。
青年とＸは駅に向かって歩いていく。
信号灯が赤から青になって、人波が横断歩道の中央で交わった。
今の時期はちょうどイベントの空白期間だった。カボチャが象徴的な収穫祭は終わり、冬至のすぐ後の降誕祭を一月ほど後に控えている。が、そんなことは関係なく駅前には常に人が多い。世間がどんなイベントを迎えようとも、各々が生きるのは現在でしかないのだ。
同様に青年も生きるのはこの瞬間でしかなくて、幸福な時間を引き延ばしたり、大切にしたり、或いは願ったりしたいと思うのは当然だった。
「今度、泊りに行っていい？」
青年は左腕にある温かみに問い掛けた。
「いいけど.....」
そういうとＸはしばらく黙考した。
「時間が取れないから再来週くらいになるかな」
「寂しいな」

青年が離し難いと言うように、Ｘの手を握った。
「ごめんね」
青年に応えるようにＸは手を握り返した。
「話は変わるけど」
Ｘがそう前置きして訊いた。
「寒いの苦手？」
「うん」
青年は首肯する。
「前に言ったことあったかな？」
青年の疑問にＸが答える。
「十一月の頭くらいにはもうマフラーをしていたから」
青年は回想して、そのＸの言ったことに思い当たった。
「そうだったね」
そう言うと青年は口元を隠すようにマフラーを引き上げた。

やがて駅に到着して、広い構内を進み、改札を通って、階段を上がり、ようやくホームに着く。青年もＸも発着する列車の騒音などに声が掻き消されるのを嫌って、ほとんど話をしない。
青年は左腕の温かみを時折確かめつつ、枕木を数えたりしながら暇を潰していた。その心の隙から零れるように、お気に入りのアーティストの歌を口遊む。
しばらくして、まもなく四番線に――とアナウンスが響いた。それが終わると、喧騒の間隙を狙ったようなタイミングでＸが言った。
「好きだね、その歌」
「うん」
青年は頷く。それは以前にＸが教えた歌だった。一瞬、林檎のシルエットをモチーフにしたアルバムのジャケットが脳裏を過った。
次第に轟音が近づいてくる。青年は先程の続きを原曲よりもゆっくりとしたテンポで口遊んだ。
（味気ないよ　なあ）
先頭車両の眩しいライト。瞬く間に過ぎ去っていく人々をまるで別の世界のもののように眺めて、
（抱き合ったって愛しいは触れられない）
列車がほとんど停止する頃に、最後のフレーズを呟いた。
（未だ　未だ　この風景に彷徨っているんだ）

＊＊＊

何が正しくて何が間違っていたのか、今はまだわかりはしないからこうして書き置くことにした。

十一月二七日（金）

あの日から今日で二週間となった。
正直な所、まだ気持ちの整理はついていないし、というか、こうして書いている今にもまた泣き出してしまいそうになる。
苦しいとか、悲しいとか、そんなに単純ではなくて、だけどそれを表現する語彙が今の私にはない。
それにあの時の選択が正しかったのかわからないし、でも他の、もっといい方法があったに違いない。そもそもあの選択は自分のため？　それとも■（書こうとしたら泣いてしまったから、『あの人』にしておく。今はまだ書けない。）それとも彼のため？
書けば書く程に、わからないことが増えてしまって、恐ろしくなって、落ち着いて。そんな現状で、曖昧だけど、おそらく正しいと思うのはこれだけ。
私にとっての満足は、あの人にとっての不満足だったということ。
だからこうして書き綴ることにした。その過程で、もしくは結果として何かを導くことができればいいと思う。

まず私が思うに、恋愛に失敗する人には大きく二つのパターンがある。一つは、自分が恋愛をする想像ができない人。もう一つは、自分ができない恋愛ばかりを想像する人。
この大別に従うのならば、私はおそらく前者の人間だった。

＊＊＊

酷い夢を見ていた。

誰かの住居のアパートの一室と思しき場所にいて、その部屋の香りだけは今も鮮明に思い出せる。
その夢には自分以外にもう一人の登場人物がいた。栗色の肩口くらいの長さの髪の、秋らしい色合いの服の可愛らしい女性だった。
彼女とは何か大切な話をしていたのだと思う。とても深刻で必死で、それでいて申し訳なさそうな様子でどうにか絞り出すように言葉を紡いでいた気がする。それはほとんど告白みたいだった。

しかし、夢の中の女性には決定的に欠落しているものがあった。
彼女の表情は霞がかかったように判然としないのだ。

彼女が何かを懇願した。
自分はそれに何かを返答した。
それを都合数度。

そして有り触れたことを二三言ってすぐに部屋を出た。たったそれだけ。
その時に何を思っていたのか、もう思い出すことができない。
だけど、今はただ取り返しのつかないことへの後悔と.....

重い瞼を開く。
部屋の中は暗く、窓の外を見遣ると向かいの家の屋根の向こう側から、暁光が薄藍色から群青色に暗夜の色を西の地平線に追いやっていた。
毛布がなければ肌寒い晩秋の朝。時計の表示は十一月二八日日、六時を過ぎたくらいだった。
横向きのまま手を伸ばし――虚空を掻いて重力方向に落ちる。
嘆息。
寝穢い傍らの人を起こさないように時間を確認すること、その人の頬から頤に手を伸ばすこと。ピアノを習っていた人の机を引く癖が抜けないみたいに、およそ半年の習慣が今も身体に染み付いていた。
身体を蒲団からどうにか這い出して、思わず頭を押さえる。どうにも二日酔いで、頭が内側から金槌で何度も執拗に殴られているみたいだ。
だからだろうか。そぞろな思考はどうしてもあの夢に引き摺られてしまう。
記憶の中のあの人の表情が曖昧で思い出せないこと。
そして、鮮明に思い出す。あの部屋の香り。その類のものはおそらく部屋には無いが、この二日酔いの元凶――昨日飲んだウイスキーがそれに近いかもしれない。
THE GLENLIVET,FOUNDER ‘S RESERVE
複雑で、優しくて、繊細で、そして何より――みたいな香りだった。

＊＊＊

某所の居酒屋でのことだった。
その店は入り口から見て左側がカウンター席となっていて、通路を挟んで右側に隣接した個室が仕切られて五つほど並んでいる。それぞれの個室は二畳より一回り大きいく

らいで、畳が敷いてあった。店内の席は八割方が埋まり、奥の座敷から聴こえてくる酔客の騒ぎが喧しい、そんな大衆的な居酒屋だった。
　その個室の手前から数えて四番目に、男が二人向かい合って腰を下ろしていた。一方は青りんごサワーを豪快に飲み干し、他方青年はシャーリーテンプルをちびちびと消費していた。
「やめとけ」
　低く身体の芯に響くような声質で、男は言った。
「.....え？」
　対する青年は困惑の余り言葉が尽きてしまった。
「いや、ちょっと待て、お前そんなこと言う奴だっけ？　　というか、なんでお前が反対するの？」
「今回は俺なりに真剣に考えてのことだ」
　届いた追加の青りんごサワーのグラスを呷って、重いバスの声質の男が言った。この男、もといＡは青年の学友で、この居酒屋に青年を誘った張本人だった。上背は平均程度だが、所属するアメフト部で鍛えられた筋骨隆々の偉丈夫だ。
　ところがこの男、その図体に反して面白いくらいに気が小さく、物事が自分の心理的に余裕のある範疇を超えた途端に青い顔になって黙りこくってしまう。が、彼の良く日焼けした浅黒い肌、窮すると腕を組む癖が相まって、傍目には至極冷徹な人物に見えるらしく、一角の人物という評判と人望を集めている。
　更にＡの面白いのは、達磨みたいな身体をして、達磨と違って外見に愛嬌の欠片もないくせに、自身には縁遠い色恋の話が好物だということだ。日頃からこうして青年と飲みに行っては、青年の恋愛譚を最も楽しみにしていた。
「お前いつもなら大喜びでこっちの話を聞き出すのにな」
　青年が愚痴っぽく溢す。
「今回ばかりは止めておいた方がいいと俺は思う。まあ既に手遅れみたいな感じはするが」
「理由は教えてくれないの？」
「少し言い難いんだよ」
　バツの悪い様子で言ったＡに、おかわりの青りんごサワーが届いた。
　Ａが再び派手に青りんごサワーを流し込み、青年は残りのサラトガクーラーを少し傾けて、二人に束の間の沈黙が訪れた。
　そもそもとして、どうしてこのように無益な押し問答に至ったのか、その原因は青年のこの一言に尽きる。
　　――俺、Ｘと付き合うことになった。

「それで、実際の所どうして？」
　尚も青年は食い下がった。自身の恋愛を赤の他人に止められて気にならない訳はない。
「意外と諦めが悪いのな」
「お前にだけは言われたくない」

Ａはかつて失恋を経験した時になかなか諦めがつかず、青年が色々と世話を焼いたという前科があって、それを踏まえての言葉だった。
返答に窮したのか――言い難い理由か、先程の青年の言葉か判然としないが――Ａは腕を組んでしばらく黙考していたが、しばらくした後、
「実を言うとな.....」
そう前置きしてぽつりと言った。
「お前だよ」
「.....は？」
予想もしなかった言葉に青年は困惑する。
「どういう意味？」
「まあ、その.....あれだ」
Ａはしどろもどろになって言葉を濁した。今日のＡは本当に回りくどいなと、青年は酔いの回っていない頭で思った。
やがて、借りてきたような言い回しでＡは言う。
「お前は釣った魚を持て余すだろう」
「.....」
再度困惑。とりあえず青年は混ぜ返してみることにした。
「そりゃあ、マグロくらい重かったら」
「.....心当たりは？」
そう言ったＡの目は何かの期待に縋るような、あるいは絶望を見据えたような、アンビバレントな色を帯びていると青年は思った。そして抑揚もなく、感情の窺えない声。青年はそんなＡの様子が気がかりではあったが、先刻の調子のままに言った。
「何の事？」
「.....そうか」
ぽつりと呟いたＡの黒瞳の熱が失せていくのを青年は見た気がした。
「いや、やっぱり何でもない」
そう言って、Ａは黒い短髪の頭を掻いて不器用に笑った。その後テーブルの下に、青年の目から隠す様に下ろされた手は、決然と強く握り込まれた。

「すみません、スクリュードライバーを一つ」
気まずい沈黙を破ったのはＡだった。
「珍しいね、あまり飲まないんじゃなかった？」
この機を逃すまいと青年が口を出す。
「気まぐれだ」
Ａもようやく笑った。青年が調子づく。
「何かあった？　変なものでも食べた？」
「そういえば、昨日唐揚げを食ったな。大根を丸々一本擂り下ろしてな」
「おい、分量」
「でもあの作業って途中から楽しくならないか？　無心になって擂って、それで気付い

た時には無くなって――」
「普通は途中で疲れる」
「貧弱」
「スタミナオバケ」
　いつもの軽口が戻ってきて、青年は内心安堵する。
「まあ、大根なら当たることはないな」
　そう言って、Ａは珍しく意地悪そうに笑う。
「そうだね」
　青年もつられて笑った。

　それからしばらくして、
「悪い、ちょっとトイレに」
　そう言ってＡは席を外した。が、何を思ったかＡはトイレのある店の奥側ではなく入り口、つまり逆方向に向かって行って、すぐに覚束ない足取りで戻って来た。
「何処行ってんの？」
　Ａが面白がって言うと、
「酔っ払ってきたかもな」
　そう残して、座敷の方に消えていった。
　手持ち無沙汰となった青年は目の届く範囲を眺める。壁もテーブルも個室の仕切りも、目に優しい木材の色合い。壁には海産物を中心に雑多な品書きが貼り付けられている。カウンター席の客はいつの間にかいなくなっていて、店内の喧騒もその内に落ち着くかな、と思ったが.....

　――で思い出したんだが、

　その言葉が青年の意識を引いた。隣りの、入口側の仕切りの向こうから聴こえる男の酔客の話し声だった。

　――酷い話があって、これは俺の後輩の話なんだが、そいつはまあ女の子で、最近彼氏と別れたそうだ。

　へえ、と間の抜けた相槌を心中で入れた。よくある話だと青年は思った。

　――で、酷いのがここからでな、どうやら彼女は彼氏の浮気に気付いていたそうだ。

冷静じみた無感情に思考が染まっていく。性根は小心者の青年だ。微かな不安感が胸中をさっと去来した。

――だけど、彼女はその方が彼氏が幸せならって、身を引いたんだ。

不快な汗が背筋を伝った気がした。まさか、それはあるまい、他人事だと、青年は自分に言い聞かせた。
だが、もしそこに気付きもしなかった可能性があったとしたら.....
「悪い、待たせた」
青年の意識の間隙に割り込むように、青年の体感ではかなり長い時間が経って、Ａが戻って来て腰を下ろした。
人間は追い詰められた時にその人物の本質を現すという。とすれば、この青年のほとんど無意識の言動が彼の本質だった。
「あのさ」
縋るように青年が言う。
「そろそろ店を変えない？」
「もうしばらくはここでいいだろ」
Ａの即答で青年の逃避行はあえなく失敗に終わった。
すみません、青りんごサワー一つ、と注文したＡはまだまだ居座るつもりのようだった。
そしてまた仕切りの向こうから話の続きが聴こえてくる。

――それでな、彼女の方は気付いてるってことに気付いてほしかったのか、単に気を引きたかったのか、意趣返しだったのか、わからないと言っていてはいたが、何にせよ色々やったらしい。

審判を受ける咎人のするように、青年はぐっと唾を飲んだ。

――積極的に彼氏に触りに行ったり、部屋に来た彼氏を予定があると言っても返さなかったり、意味もなく部屋に香水を撒いたり、彼氏に香水をぶっかけたりと、少し、というか割と正気を疑うような言動があったらしいが、それでも気付かなかったそうだ。

息が詰まる思いだった。
ほぼ確信に近い。十中八九、いやそれ以上の確度で我が身の話だと。しかしそんなわけはない、あるはずがないと、残された可能性に懸命に取り縋った。だから青年は、
「なあ、帰ろう.....」
尚も逃げようとした。
「逃げるのか？」
青年の内心は知らないはずだが、正鵠を射たＡの言葉にぐっと返答に窮した。
「.....逃げるって何から？」
「さあな」
惚けるような風に、だが酷く冷たい声色でＡが言った。青年は気に掛かって上目遣いにＡを窺うと、目が合って――彼の睥睨の静かな威に口も脚も縫い付けられて、微動だにできなかった。
「そこで静かにしていろ」
こうして一蹴にして退路が断たれた。針の筵で簀巻きにされた青年の耳に、罪過の告発が聴こえてくる。

――当然彼女の方は彼氏が好きだった、そん時の関係には満足していたし、愛情を持って接しているつもりだった。彼氏の長所も短所も、移り気な性格も知っていたからな。それも含めて彼女は受け入れていた。

――だけど、彼氏は他の女に走った。移り気だけだったら罪じゃない、だけどそれをやったら重罪だ。自分だけの問題じゃなくなる。

――何か不満があれば言えばよかった。当たり前だ、そんなことは。だけど、それもせずに逃げたのは彼氏の罪だ。

――彼女がどんだけ無力感とか自己嫌悪とかに苛まれるかなんて、考えなかったんだろうな。

仕切りの向こう側、声の主が吐き捨てる。

――お前はただのクズだ、いつかきっと後悔する。

青年は頼りない脚を引き摺る様にして立ち上がった。身体は鉄の鎖が巻き付いたみたいに重かった。ほとんど呆然としてそのまま靴を履いて出て行こうとすると、Ａも立ち上がって青年を引き留めた。
「何処に行く？」
「帰る」
「どうして？」
「お前にわかるはずはないだろうな」
そう言い残し、青年は踵を返そうとした。
その時だった。
Ａは氷水の目一杯に入ったピッチャーを手に取って蓋を開けると、その刹那、思い切り振りかぶってその中身を青年の顔にぶっかけた。
居酒屋には場違いな、破裂音みたいな水音が響いた。
喧騒に満ちた店内の、二人のいる一画だけが静まり返る。Ａの注文していた青りんごサワーを届け来た女性店員も、あまりの出来事に唖然として凍っている。
下を向いた青年が目を開くと、足元の畳には氷が散乱して、粗相でもしたみたいに濡れていた。一滴、また一滴と頭から冷水が滴っている。
「.....テメェ」
青年は沸々と怒りに任せて顔を上げた、そこへＡの拳が目前に迫っていた。思わず身体が硬直し、瞼を閉じて視界が暗転する。が、予感した衝撃が訪れることはなく、恐る恐る瞼を開くと、拳を引っ込めたＡは一言。
「もうお前と話すことはない、これで最後だ」
とだけ宣言した。
これが二人の決別だった。
青年は自分の代金だけ置いて、ずぶ濡れのまま店を去った。
背後から、すみません、青りんごサワーいただきます、それとここは私が拭きますので布巾を貸していただけますか、と男の声がした。

一体何だったのだろうなと、青年は働かない頭で思った。
自分の罪状が壁越しに告発され、その場で一人の友人を失った。
そもそもほとんど何もかもがわからない。
どうして隣の酔客は自分達の内情を知っていたのか。
言動からして、Ａもまた事情を知っていたのか。だから、激したのか。義憤か、それとも.....

夜の空気は冷たく、身体から熱が奪われていく。
首筋を掠める風に思わず身が震えるような晩秋の深夜は、ずぶ濡れで歩くにはあまりにも寒すぎた。

＊＊＊

その香水は何の匂いかと、あの人――彼女に問うたことがある。その答えは柑橘系というものだった。特に決まったものはないらしい。ずっと柑橘類の何か香りだとは思っていて、具体的にどの果実か知りたかったのだが。
だけどある日――あの出来事が起こって以来、その香りがオレンジだと思うようになった。そしてオレンジが彼女を思い起こさせるようになった。そんな香りが堪らなく好きだった。

十一月二八日、午前九時くらいだった。
きっと川辺に発生したであろう朝靄が消えるような時間になっても、心は晴れやかではなかった。起きてからずっと昨夜のことを考えていた。
一体彼らは何だったのだろう。氷水で冷えた昨夜より今は冷静に考えられるから、思い浮かんだ疑問を一つずつ解消していく。
あの酔客は確かに「お前」と言った。それが自分を示しているとすると、どうして自分達の内情を知っていたのか。同様にＡも。彼の話し振りからして、おそらく彼女から話を聞いているのだろう。
どうしてあの酔客があの店に居合わせたのか。これについてはＡの手引きだと思うが。
そもそもどうして二人はあんなことをしたのか。あれこれと考えてはみるが、できるのは憶測だけだった。
あの酔客は誰と話していたのか。彼は個室を取っていた、一人ということはあるまい。帰りしなに彼のいた部屋を見るような勇気は当然持ち合わせていない。まだ疑問が残っていないわけではないが、他は取るに足らないようなものだ――と考えていて、ふと気付く。
あのような出来事があっても、自分はこうして冷静でいられる。また自分の人としての心を疑ってしまう。だがこれが紛うことなく自分だった。
きっとあの酔客の言葉は正しい。彼の言葉は自分の人間性、そして二人の間のことの本質をおよそ的確に示していた。

――彼女がどんだけ無力感とか自己嫌悪とかに苛まれるかなんて、考えなかったんだろうな。

その通りだった。自分の移り気が彼女を傷付けることなど考えてなかった。それも内気な彼女が自身の内面を、おそらく相当詳細に他人に話すくらい追い詰められていたなんて。

――それでな、彼女の方は気付いてるってことに気付いてほしかったのか、単に気を引きたかったのか、意趣返しだったのか、わからないと言っていてはいたが、何にせよ色々やったらしい。

思い返せば幾つも心当たりがあった。酔客の言っていたように、彼女が突然触ってきた日もあれば、なかなか近づかせてくれない日もあって、距離感が安定しなかったこと。好きだと言った香水を頻繁に使うようになったこと。
それぞれの言動が何を思って、どんな意図があったものか今となってはわからないが、確かなことはその言動の対象が自分で、彼女なりに自分に対して思うものがあったのだ。

――当然彼女の方は彼氏が好きだった、そん時の関係には満足していたし、愛情を持って接しているつもりだった。

やはりあの酔客は酔っていなかった。
彼の言葉で気付いた。いや、気付かされた。
ずっと彼女の愛情を疑っていた。だけど追憶の日々、二人で行為に及んだこと。その後の自分の身体が傷もなく綺麗なままだったこと。彼女がやさしく愛撫してくれたこと――あれが彼女なりの確かな愛情の形だった。

あとがき
作中において青年が歌っていたのは、須田景凪の『Cambell』でした。

憧れたあの人

憧れたあの人

炬燵猫

ぴぴぴぴ、と間抜けな音がする。

朝七時に設定した目覚ましが、私に起きろと呼びかける。
やつはプロだ。私が起きないとみると、すかさず音を大きくして私を布団から引きずり出そうとする。しかし私も負けてはいない。普段から特殊な訓練をしている私が、容易く布団から出るはずがないのだ。
エアコンは寝る前に設定した通りに電源が切れていて、冬の朝らしい冷たい空気が室内に満ちている。そのことが、私に勇気をくれる。まだ布団のなかにいてもいいんだ。
「.....ぅるさいー.....」
ごろりと寝返りを打つ。
逃げるように、掛布団を頭の上まで持ち上げた。完全防備である。
「起きてください」
唐突に、布団が掴まれた。容赦ない力で布団がはがされ、朝の冷気が私を襲う。
「は？」
「おはようございます」
にょきっと覗きこんできた細面。
「うわあああああああっ」
記憶にない顔面に、私は跳ね起きた。聞いたことのない自分の声にさらに驚き、天井と床が入れ替わる。
「あああいて、うーー痛い」
ベットから転がり落ち、盛大に頭を打つ。いまだに鳴りやまない目覚ましの耳を裂くような音が、強打した頭に響く。
「何やっているんですか」
「んあ？」
上半身だけベットから落ちた変な姿勢で、声というより音が喉から漏れた。
じんじんする頭を押さえつつ、姿勢を起こす。頭を強打し、ついでに着ていた古いスウェットに切れ込みが入ったおかげで、少し冷静さを取り戻した。
とりあえず、目覚ましがうるさい。

目覚ましを切り、エアコンの電源を入れ、充電していた携帯を手に取って、私は我が物顔で電気ストーブの電源を入れようとしている人物を眺めた。
紺色のスーツに、黒いネクタイ。髪は額を出すようにきれいに撫でつけてあって、どこぞの執事のような印象を受ける。左目についているモノクルも合わさって、本当に中世の人物のようだ。中世の人物知らないけど。
本来なら、すぐに警察に電話するべきなのだ。一人暮らしの女子大学生の部屋に、見知らぬ男がいつの間にかいたのだから。
でも、
「なんだかなあ.....」
妙に警戒心が湧かないのだ。まるで、家族や昔からの友人のような。昔からこの場にいるのが当たり前のような。

実はどこかで出会った、私が忘れているだけで仲が良かった人だったりするのか。いや、たとえそうだとしても問題だけど。
男は我が物顔で随分前に出した炬燵の電気を入れ、足を突っ込む。茶でも出せとばかりに視線を寄越す男に、どうしたもんかと。
とりあえず携帯を握りしめる。冷静に考えると、通報一択である。
「あ、待ってください。怪しいものではありません。わたくし、こういう者です」
「はあ」
光の速さで立ち上がり、懐から丁寧に名刺を差し出された。

『明智商事　船渡川達幸』

「船渡川さん.....ですか」
微妙に渋い名前。
「片淵佑美さんですね」
「はあ。そうっすね」
どういうわけか、名前まで知られている。
「契約に従って、伺わせていただきました」
「契約」
なんの契約なのか、さっぱり記憶にない。
私のオウム返しの返答に、作り物としか思えないくらい整った男の顔が諦めで染まった。
「やはりお忘れですか」
「お忘れですね」
「残念ですが、支障はありません」
「はあ」
自分の反応の鈍さが嫌になる。もっとうまく話したい。
「これをどうぞ」
どこからか取り出した箱を、男は机の上に置く。
白い箱だ。掌より少し大きい立方体で、蓋がついている。中に何が入っているのか、置いた時の音からはわからない。
「それを成人式のときにもっていってください。あ、これは契約書です」
「.....はあ」
宅配便の伝票のような内容の契約書を箱の上に一枚ペラリと置くと、男は丁寧に頭を下げた。
「これで私の仕事は終わりです。失礼しました」
いうなり男は玄関へ向かう。慌てて追いかけたら、ちょうど玄関が閉まった。勢いに任せて扉を開けようとして、鍵が閉まっていることに気が付く。
鍵を開けて外に出ると、男の姿はすでにそこになかった。

「なんなんっすか」
　ぼそりとつぶやく。
　結局、何もせずに終わってしまった。気の利いた一言すらいえなくて、朝から自己嫌悪に襲われる。
　成人式は、一週間後だ。

　中学の友人で、一番印象に残っているのは楠木里奈である。
　彼女は、一言でいえば才色兼備だった。
　成績優秀で、品行方正。気配りもよくできて、誰からも好かれている。少し大人びた外見も相まって、男女問わず人気が高かった。
　私のような、箸にも棒にも引っかからないような人とは縁のない人だった。
　そんな彼女と言葉を交わしたのは、そう多くない。
　その中でも印象に残っているのは、ある日の帰り道。夕日が照らす中、学校で禁止されている買い食いをするべくコンビニに入るべく店の前に立った時、彼女は声を掛けてきた。
「片淵さん。なにしているの」
「ひゃあ」
　背筋が凍るかと思った。
　なにせ、あの楠木里奈である。一瞬で、先生に報告されて、明日こっぴどく叱られるところまで見えた。
「どうしたの。変な声出して」
　美人は、笑いをかみ殺しても顔が崩れないらしい。あまり変な声を出した記憶はないが、そんなに面白かったのだろうか。
「いやあ、びっくりしたっすね」
　へへへ、と微妙な笑みを浮かべる。そのまま去ろうとする私のリュックが掴まれる。
「待って。コンビニに寄るんじゃないの？」
「……チクるんすか」
「言わないよ。その代わり、一緒に入ろう」
「はあ。え？」
　一緒にコンビニに入るだけで先生のお小言を回避できるなら安いものだ。安いものなのだが。
「え？ って、一回やってみたかったの。こういうこと」
　模範的な優等生の彼女も、ルールを破ってみたいときもあるらしい。
「……まあ、いいっすけど」
　聞き取りずらい声で、ぼそぼそと答えた。
　我ながら、コミュ障全開の受け答えである。しゃべってて死にたくなってしまう。
「うん！」
　そんな受け答えにも、彼女は笑顔で嬉しそうに頷いた。

その日からである。楠木里奈を、目で追いかけるようになったのは。
最初はなんとなくでしかなかったそれが、いつからか意識するようになったのはいつだろうか。
ぼんやりとした興味は、私よりも優秀な彼女へのあこがれに変わっていった。

息の詰まりそうな毎日だった。
「おはよう」
「おはよう、里奈ちゃん」
どこまでも真面目で、優秀。明るくて、人付き合いがよくて、友人が多い。
それが私、楠木里奈だった。
「今日のテスト、勉強した？」
「この前の英語なら、全部読んだよ。暇だから日本語訳もしちゃった」
「さっすが里奈！　あとで見せて！　お願い！」
あんたの為にやったんじゃない。そう言いたかった。
「スタバ一杯奢りね」
正直、スタバ一杯では割に合わない。どうせ、こいつは私が日本語訳まで用意することを見越して勉強をしなかったのだ。
あの子なら断れるのだろうか。中学の同級生だった、片淵佑美なら。

私の中学校には、朝清掃という文化があった。朝早くきて清掃をすることで、清々しくその日を始められるらしい。当然のことながら、生徒からは忌み嫌われる文化である。
毎日ではなく、おおよそ一週間に一回、当番が回ってくる。サボると放課後居残りだ。
「明日の掃除当番、変わってくれない？」
またやってる。
友人としゃべりながら、私は横目でその様子を見た。
頼んでいるのは、赤林というクラスでも中心的な女子だ。お願いという形をとっているが、実際には強制である。この場合、往々にして拒否権はない。
頼まれているのは、片淵という、どちらかというと地味な子だ。赤林とはあまり関わりがないはずだが、珍しい。
かわいそうだな、と思った。助けよう、とは思わなかった。
「んあ？　なんで？」
さっきまで寝ていた片淵は、微妙な反応を返した。赤林にはその反応が想定外だったのか、一瞬だけ顔をゆがめるが、またすぐに作り物の笑顔を貼り付ける。
「だから、明日の朝清掃」
「ええ.....。嫌っすよ」
へえ。断るんだ。

「本当に？　断るの？」
「いやー、だって……面倒くさいし……」
　歯切れ悪く、片淵は視線を逸らしながら言い訳を並べる。どうあっても変わる気はないようだ。
「あ、そう」
　赤林の表情が冷酷なそれに変わって、机についていた手が離れる。その時、本当に偶然だが、私と目があった。
　嫌な予感がした。
　これから、私は面倒な朝清掃を頼まれるのだろう。それを、私は断ることができない。
　片淵さんのように断れたら、どんなに生きやすいことか。

　英語のテストを解き終えて、余った時間でつい昨日の出来事を思い返していた。
　成人式に持って来いと、白い箱を置いていった男がいた。片眼鏡の、見覚えのない男だった。
　怪しすぎるから捨てようかと思ったが、昨日も今日も机の上に置き忘れた。振っても音はしないし、箱自体は何も入っていないかの如く軽い。不思議な箱である。
　特別かさばるような大きさではない。それに、成人式は行く予定だったから、忘れなければ持っていこうと思っていた。
　成人式に、片淵さんは来るのだろうか。
　六日後に、成人式は執り行われる。

　成人式当日。道の端には雪が残っている、寒い日だった。中学の頃から変わらずどんくさい私は、母にせかされながら自宅を出る。
　成人式は、地元で行う。県外へ出て久しい私には、古い友人と会える数少ない機会だ。
　着ているのは、振袖である。赤い牡丹柄の振袖と、黒い草履。私は会場の市民ホールへ一人で足を運んだ。慣れない草履で足は痛くなるし、振袖は邪魔だし、会場に着くころにはすでに帰りたくなっていた。
　ＩＣカードや財布が入っている鞄の中には、あの白い箱が入っている。出かけるときに持っていくか迷ったが、結局鞄に入れてしまった。どうせ出さずに終わるのだろう。
　生憎同級生と連絡を取り損ねた私は、会場でも散々迷った。なんとか受け付けは済ませたが、どう動けばいいのかわからずに途方にくれて、柱のそばに立ち尽くしてしまう。
「片淵さん？」
　人の流れから誰かが一人抜け出してきた。
　黒い日本髪には簪が差してあって、青い振袖にはシャクナゲが咲いている。切れ長の美しい眉は、かなり濃く描いてある。二重のせいで大きく見える瞳はラメの入ったピンク色のアイシャドウが塗ってある。唇は薄く、鼻は高い。頬に、少しだけあるチークが

可愛さを一層引き立てている。
　私より五センチくらい身長は高いし、振袖の上からでもわかるくらいスタイルもいい。
「えっと、」
　すごい美人に話しかけられて、ドギマギしてしまう。
　必死で記憶から掘り起こす。須藤でもなく、白石でもなく。
「――楠木さん？」
　いつか見た笑顔で、楠木里奈は嬉しそうに頷いた。
「里奈、どうしたのー？」
　彼女の連れらしき数人が、人の流れに流されながら叫ぶ。それに反応して、一旦後ろを向くと、
「ごめん、先に行ってて」
　そういって彼女は私に向き直った。
「覚えていてくれてうれしい！　　そろそろ成人式始まるよ」
　私の手を握りしめる彼女の笑顔が眩しい。
「いいの？　　あの人たちと一緒じゃなくて」
　今しがたどこかに消えていった友人たちを目で探す。顔もわからないのに、見つかるはずがないけど。
「いつでも会えるし、いいの。それより成人式どうする？」
　時計を見ると、そろそろ始まってしまいそうだ。新成人集合の放送もかかる頃合いだろう。彼女は座席の位置も知っているだろうし、一緒に行けばまず間違いない。
「そろそろ始まるし、行こうか」
「――そうだ、ね！　　早く座らないと」
　一瞬だけ、彼女の顔が曇った、気がした。瞬きをすれば、晴れあがるような彼女の笑顔。
　座席の位置がわからない私は、必死になって彼女の背中を見失わないよう、追いかけた。

「新成人の皆様、おめでとうございます。皆様の立派に成長した姿を見ることができて、感無量の思いで――」
　壇上で、偉そうな人がマイクに向かって何かを読み上げている。無事に座席へ座れた私は、ほっと一息ついていた。
　座席は、中学のころのクラス分けの通りに配置されていた。壇上から流れてくる音声を聞き流しながら、私の左斜め前に座っている微動だにしない楠木の簪を眺めていた。
　隣から、小さく袖を引っ張られる。
「ねえねえ、二次会来る？」
　耳打ちしてきたのは、仲が良かったクラスメイトの白石美玖である。白い振袖には、豪華な椿が咲き乱れている。
　二次会があるのは初耳だ。ただし、予想はできていたから準備はしてある。
「行くよ」

「やった。これでクラス全員だ」
「へえ。すごいね」
　クラス全員。誰一人として欠席しないらしい。何人か来ないだろうと思っていたから、意外な事実に驚く。
『守安様、ありがとうございました。続いて、教育委員会会長、船渡川達幸様』
　ざわ、と私の周囲だけざわめきが起きる。かくいう私も、動揺を隠せなかった。
　いつかの日、私の部屋に不法侵入した男ではないか。
　壇上に上がった男は、確かに船渡川達幸に見えた。紺色のコートに、キザったらしい片眼鏡。
　化粧が濃いせいでわからないが、顔色が変わっていそうな人が何人かいた。
「えー、新成人の皆様、おめでとうございます」
　それに気が付いているのかいないのか、壇上の男はしれっと話し出した。
「すでに何名かの方には、成人のお祝いを渡してあるはずです。お持ちいただけたでしょうか」
　成人のお祝い。
　この男からもらったものなど、一つしかない。
　左右と顔を見合わせる。どうやら全員、あの白い箱は受け取ったようだ。楠木が必死で「落ち着いて」とジェスチャーしているのを見た人は、戸惑いつつも黙って壇上に視線を送る。
　他にもざわめく団体がいる。どうやら、私たちだけではないようだ。
「今、お持ちでしょうか。持っていますよね。では、それを取り出してください」
　船渡川が全員に見えるように、どこからか白い箱を取り出して掲げる。
　戸惑いつつ、男に倣って全員が箱を取り出した。これだけ人数がいるのに全員が持ってきているという、異常な事態。
　白い箱は、まるで中身が空であるかのように軽い。振っても音はしないし、叩いてもひしゃげない。かといって金属のような硬さがあるようには思えないという不思議な代物だ。
　蓋はついているが、接着剤で塗り固められているかのように開かなかった。
「これ、燃やしても燃えなかったんだけど」
　誰かの会話声が聞こえる。
「皆さん持ちましたね。では、開けてください」
　すると、さっきまでびくともしなかった箱のふたが、するりと外れた。中からはあり得ない量の煙があふれ出てくる。

「それは、今日一日『なりたい自分』になれる箱です」

　当然、会場は大騒ぎになった。立ち上がるもの、叫びだすもの、床に伏せるもの。走り出そうとして転び、将棋倒しになっていくもの。

換気の全くない室内だが、視界を塞いでいた煙は数秒で消えた。悲鳴はざわめきになり、視界が確保できたことによって会場が落ち着きを取り戻す。遅れて、ホールの扉が開け放たれる。
拡声器を持った人影が叫ぶ。
『落ち着いて、慌てずに避難誘導に従って.....？』
会場にいる新成人の異様な姿に、言葉が途切れる。
私の隣の白石美玖は、研究者が着るような白衣を着ていた。結ってあった髪の毛はほどかれ、茶斑の眼鏡をかけている。あんなに気合の入っていた化粧も、まるで最初からなかったかのようだった。
他にも、バンドマンのような格好でギターを下げていたり、ヘアカット用のハサミを持って立ち尽くしていたり。
「美玖？　どうしたの、その恰好？」
「え？　なにこれ」
白石は自分の姿を確認するように、白衣をひらひらさせる。一通り確認が終わった後、私の姿を見て、白石は言った。
「楠木さんはなにも変わっていないよね」
「？」
いつの間にか、私は美しいシャクナゲが咲いた青い振袖を纏っていた。そういえば、いつもより視線が少しだけ高い。
私は荷物から手鏡を取りだす。
「それ、片淵の荷物。ちょっと、何しているの」
白石の言葉を無視して、手鏡を覗き込む。
濃く描かれた切れ長の眉。ラメの入ったピンク色のアイシャドウと二重の瞳。白い鼻に、薄めの唇。　そこに映っているのは、間違いなく楠木里奈だった。
顔を左右に振ると、鏡の中の彼女も頭を振る。瞬きも、まったく同じタイミングで瞼が動く。
最初に訪れたのは、困惑ではなく、喜びだった。私は、楠木里奈になったらしい。教室の隅で視線を送るしかなかった対象に、なることができた。
あの憧れだったあの人に。
思わず、変な笑みがこぼれた。姿が変わっても、中身が変わらなければ価値はないことはわかっていた。それでも、湧いてくる喜びは抑えられない。
そんな自嘲的な笑みも、彼女の顔は誰もが見惚れるような美しい笑顔に変える。
鏡の奥に、牡丹が映った。
見覚えのある、赤い振袖である。私の細い指から、手鏡が零れ落ちた。鏡が床に落ちてひびが入るのと、私が振り向いて『私』の肩を掴むのは、同時だった。
「片淵さん。何しているの」
「ひゃっ」
ゆっくりと振り向いた顔は、今朝まで私が鏡の中で見ていた顔だった。
「変な声出さないでよ」
あの時の私は、こんな声を出していたのだろうか。だとしたら、あの時の楠木の表情

の意味がよくわかる。
　だって、こんな声出されたら笑いをかみ殺すしかない。
「あ、待って。抜け出すんじゃないの」
　コミュ障の如く黙って戻ろうとする『私』を、慌てて引き留める。
「.....止めるんっすか」
「そんなわけない。一緒に抜け出そうよ」
　強く手を引くと、『私』は顔を上げてくすっと笑う。
「そうだよね」
　片淵佑美と楠木里奈は草履を脱ぎ捨て、スタッフの制止も聞かずに開け放たれた扉から走り出した。

　あとがき
　新成人の皆様、おめでとうございます。作者は成人式に行きませんでした。

終わりのないエンドロール

終わりのないエンドロール

フラれました

　叶った恋愛、叶わなかった恋愛、二つを足しても両手の指に収まるくらいの経験しかないが、ふと思い出されるのは叶わなかった恋愛かもしれない。始まりもしなかった恋に思いを馳せるのは無駄だと思いつつも心残りを少しずつ一人で味わっているのだ。叶った恋は皿まで食べてしまった。叶わなかった恋は未だに僕の前に置いてある。後、何年かけてこの恋を食べればよいのだろう。僕にとってこの恋達は味が濃く、量が多い。何か飲み物が欲しくなる。水がいいな。そう、この話は僕にとって、水みたいな話だ。胃が持たれるような恋を注文した際に一緒についてきた水の話。先輩の彼女を好きになって逃げ出した話。
　どこで会ったのか、いつ連絡先を交換したのかはもう覚えてないが、あった時の印象はまだはっきりと覚えている。色素が薄く、気だるそうに笑う女性だった。

深夜１時、店内は薄暗いのに、カウンターの内側はとても明るかった。グラスに反射した光で手元ばかり見ていると目が痛くなる。キラキラと輝くグラスに辟易し、ふと顔を上げた。

客はカウンター席にはいなくテーブル席に２組となっている。店内のＢＧＭの他にかすかに客の声が聞こえてきた。この感じだと２時には店を閉め、掃除などをしたら２時３０分には店を出られるかもと考えながらまた視線を戻し使ったグラスを洗うことにする。カクテルグラスについていた口紅を落とすのに躍起になっていると、ポケットに入っていた携帯が振動していることに気が付いた。こんな時間に LINE を送ってくる人なんて一人しか心当たりがない。隣の同僚にバレないように携帯を取り出し、内容を確認する。

「いまから会えない？　それと明日、午後から仕事だから泊まっていってもいい？」

熊のぬいぐるみのアイコンからはそんな言葉が送られていた。彼女と会えばどんな話になりどんな気持ちになるかなんて嫌というほど想像がつく。それでも迷ってしまう自分がいる。会えば一人じゃない。少なくともあの人の事を考えないで済む。彼女は少なくとも僕を必要としてくれているという事実が弱い自分を誘惑してくる。

「いいよ。３時頃に駅で待ち合わせね」

そう送り、携帯をしまうと心なしか気持ちが軽くなっていた。彼女には確かに会いたくなかった。でも、先輩の飲みの誘いを断る口実も欲しい。家に行ってあの人と先輩の姿を見ていると苦しくなる。

２時になると客は途絶え、店を閉めた。店内の掃除はホールスタッフと同僚に押し付けて早めに店を後にする。駅に着いた頃には約束通り３時ごろになっていた。駅に入り、横にそれると大きな電光掲示板がある。その横に茶色のトレンチコートを着た彼女が立っていた。ヒールを履いて自分と同じくらいの身長の女性。シャッターで閉じられた店が並ぶ通路を無表情で見つめる彼女の横顔は疲れきっている。近づくと、彼女が振り向き笑いながら言った。

「ごめんなさい。待ってる人がいるから、一緒に行けないの」

彼女の隣に立ち、電光掲示板のかすかな温かみを背中で感じながら口を開く。

「それは残念です。ですが、僕もここで待ち合わせしてて」

茶番と知りつつ、この劇に乗ることにした。

「３０分前についてここで待ってたら、二人にも声かけられちゃった」

彼女は普通のトーンに戻って話始めた。どうやら、ここで劇は終わったらしい。

「そりゃ、こんな時間に駅前に女一人でいたら声かけられるだろ。そいつらがイケメンじゃなくてよかったよ。イケメンなら付いていったろ」

横眼で彼女を見ると、こちらを睨んでいた。

「ひどい。そんなに軽い女だと思ってるの。そう簡単についてくような女じゃないわ」

子供のように怒る彼女を見ていると更に嫌味を言いたくなる。

「お前が好きなオジサマ風のイケメンなら付いていくんじゃないの？」

彼女の目つきがさらに悪くなっていく。

「私が好きなのは彼だけだから。てか、オジサマはこんな時間に私みたいな人に話しかけてこないわよ」

「さいで」

彼ね.....。

彼女と彼が働いている時に店に来たのを思い出す。カウンター席の左端に座った彼らは会社の部下と上司のようだった。彼の方が年上で３０代後半、彼女は２０代前半。注文するときは彼が二人分の注文をする。グラスを取るときに見えた彼の左手の薬指にはシンプルなデザインの指輪がはめてあった。なるべく彼らを見ないようにしていたが、彼らが注文したカクテルは自分が作り運ばなければいけなかったので、どうしても彼らの方を見てしまう。目が合うと彼女は困ったように微笑んだ。

「行こっか」

そう言い、通路を歩き始めた。彼女は無言で僕の隣を歩く。夜中なのに不自然なくらい明るい。カップルなら手をつなぐ距離でお互いポケットに手を入れて歩いている。たまにポケット越しにあたる彼女の手に苛立ちを覚えながら僕のアパートへと急いだのだった。

アパートに着いたのは３時３０分頃だった。部屋に入るとすぐに彼女は電気を付け、こたつに入る。

「こたつの電源入れて」

僕は彼女からトレンチコートをはぎ取り、ハンガーに掛けて部屋着に着替え始める。

「てめぇでやれ」

彼女はムッとしながらも這いつくばったゾンビのようにこたつから抜け出している。汚れたＹシャツを机の上に置き、台所に行き飲みかけの酒と二つのグラスを持って這いつくばっているゾンビに近寄る。ゾンビはこたつから完全に出てテレビ横のコンセントまで移動していた。僕はおもむろにゾンビの背中を足で軽く踏みつける。

「で、あの人となんかあったの？」

「ちょっと！　痛いよ！　てか、汚い！」

のたうち回るゾンビを見ていると優越感が湧いてきた。

「靴下は洗濯したやつだし大丈夫でしょ」

踏んでる場所を腰の方に移動し今度は強く踏む。

「そこは、少しきもちいいかも」

このゾンビは普段、椅子に座って事務作業しているので腰が痛いとよく愚痴をこぼしていた。汚さよりも気持ちよさが勝ってきたところで僕も踏むのをやめる。

「これ以降は有料となります」

そう言い、こたつに入ったときはすっかり温かくなっていた。彼女は不満げながらも起き上がりこたつに入ってくる。酒をグラスに注ぎ、飲みながら彼女が話すのを待った。彼女もまた飲みながら話すタイミングを伺っているようだ。半分ほど飲み終えてから彼女はパッと顔を上げた。

「先週の週末にお泊りデートがあったんだけど、息子さんが熱を出したとかで行けなくなったんだ。しかもそれ以来、LINE に既読がつかないの」

彼女は明るく言ったつもりだろうが不安は隠しきれていない。

息子という単語で一つ思い出したことがあった。彼と彼女が一緒に店に来ていた時、彼は自分の息子の話を彼女にしていたのだ。不倫相手に自分の家族の話をするなんて、彼女からすれば望んでも手に入らない物を見せびらかされている気分だったろう。

同情はしたが、それを言葉にはしなかった。

「そりゃお前、既婚者相手に恋愛してんだからある程度はこっちが折れなきゃ続かないだろ。それに色々と忙しいんじゃない。年末なんだし。店に来るサラリーマンの人はこの月は忙しいってみんな言ってるよ」
　当たり障りのない言葉を並べる。多分、こんな事言わなくても彼女だってわかっているはずだ。頭では理解できているのにどうしたって不安になる。
「そうだよね。分かってはいるんだけどな.....」
　彼女の瞳が潤み始める。
「だいたい、お前はいつも愛されてれば一番じゃなくてもいいって言ってんじゃん。隣にいられればそれでいいんだろ。悩む必要なんてないない」
　嫌われ役としてはなかなかの発言だと思う。
「うるさい！！　だいたい、２０過ぎたのに一番がいいとか特別がいいとか言ってるやつよりはましでしょ！！　だからあんたは彼女も作れないんだよ！！」
　そこまで言わなくてもいいのではとも思ったけどお互い様なので一緒に傷つくことにした。
「どうせ、ガキですよ。でも、せっかく叶った恋なのに不安になったり自己嫌悪して定期的に自暴自棄になる女よりはマシだと思うけどな」
　今までの威勢がなくなり、彼女は俯いた。
「たまたま、好きになった人が既婚者だっただけだもん」
　本当にその通りなのだろう。たまたまだったのだ。たまたまもうすでに結ばれている相手を好きになってしまった。それでも自分の感情を曲げずに彼女は頑張っているのだ。自分とは違う。先輩の彼女を好きになったが何もしない自分とは違う。世間体や自分の容姿を言い訳にして逃げている自分は彼女のようになれない。こんなに傷つきながらも誰かを想うことなんて僕にはできっこない。
「まぁ、罪悪感と一緒に恋愛してるなら逃げてないだけましだろ。お前はよくやってるよ。少なくとも僕よりは」
　怖くて進むことができない僕は彼女の悩みに付き添える資格はない。そんな後ろめたさから彼女を見ることさえできなくなっていた。
「そんなことない。少なくともあんたが肯定してくれて、私の感情に理由を付けてくれてるから動けているだけ。ありがとう」
　彼女の言葉は、だからどうか、私の事を否定しないでくださいと懇願しているようだった。
　互いを傷つけあい、それが終われば慰めあう。その繰り返しで夜が更けていく。ベットに入ったのは５時くらいだったと思う。シングルベットに背中合わせになり眠る。冬の朝方はまだ暗い。壁際の彼女はどうやら携帯を見ているようだ。液晶の光が淡く闇に漏れ出す。きっと彼女はここ数日、彼からの連絡をずっと待っているのだろう。このままだと彼女が寝不足になってしまう。すがる相手も分からずに祈る。彼から LINE が来ますようにと。強く不安定な彼女と弱く安定している僕、相容れぬ二人が同じ場所で同じ祈りと共に眠る。

彼女がさってから数週間、たまに仕事の愚痴や彼との出来事などの話をやり取りしながら過ごした。あれからすぐに彼から連絡はきたようで文面からでも彼女の喜びようがうかがえた。どうやら僕の役目はひとまず終わったようだ。僕の方はというと断り切れず先輩の家で週に１，２回飲むようになっていた。尊敬している人と好きになってしまった人が同じ空間にいる。自分の気持ちを悟られないように気を使いながら逃げ続ける日々。彼女ならどうするのだろうとふと思ってしまう。酒に酔って色んな感情が混ざり合う。後はただただ、先輩と彼女が主演の映画に相槌をうつ客を演じていた。

クリスマスの時期になり、世間は浮足立つ。でも僕は日に日に増える客に嫌気がさしていた。イブの日だって仕事もあり、彼女もいないので予定がない。幸い、忙しさで心が麻痺し寂しさを感じることもできていなかった。そんな忙しいある日、仕事が終わった後に彼女から連絡が来ていることに気が付いた。

「寂しい」

たった一言だが何となくわかるような気がした。彼には家族がいるのだ。だったらクリスマスは家族で過ごすもの。彼女が無理を言って割って入る余地が最初からなかったのだろう。

彼女の寂しさに僕まで蝕まれていく。それと同時に一緒にいてくれる人の存在にどこか安心してしまう。

「クリスマス、よかったら一緒に過ごす？　仕事あるから夜遅いけど、よかったら」

飲み会とかあって断られたらどうしようなどと不安が生じ始める。一度自覚してしまった寂しさはしつこく思考に纏わりついてきた。帰り道の最中もついつい携帯を見て返信が来ているか確認してしまう。あの時の彼女もこんな気持ちだったのだろうか。不意に携帯が振動する。

「約束ね。何か欲しいものある？」

返信しようとしたが、打つ手が止まる。欲しいものがスッと思いつかなかった。でも、たしかに欲しいものという単語を見て思ったことがあった。仕方名がないのでそのまま送ることにする。

「誰かに愛されたい」

文字にしてみると我ながらキモイ文を送ることになった。

絶対バカにされるだろうと思ったので次に送るスタンプを選んでいると、意外な返信がきた。

「誰でもいいの？」

その誰かにお前は含まれているの？ とは打つ勇気はない。

「誰でもいい」

嘘ではない。

「そっか。あなたの問題ってその辺だと思う」

具体的にどの辺なのか教えてくれないまま、クリスマス当日を迎えることとなった。

この日は客がとても多かった。店に入り切れず入店を断ったりもしたそうだ。そして何よりほぼ全員がカップル。２０代から５０代まで男と女のペアで自分たちの時間を過ごしている。店内の照明もこの日だけは少し明るく、皆の幸せを照らしていた。仕事が終わり、駅に着くとコートにマフラーを巻いた彼女がいた。話題を探すために彼女を見

ると足元が気になった。新しめのブーツを履いている。
「そのブーツ買ったの？」
　言われると彼女は足元を見て、少し恥ずかしそうに笑った。
「彼に買ってもらったの。DR. MARTENS。３万くらいだったかな」
　僕には向けたことのない笑顔だった。彼にはこんな表情もするのだろう。
「なら、僕も３万くらいの物までなら買って貰えたわけね」
　彼女が僕の方を見る。
「３万じゃ誰の愛も買えないよ」
　思ってもいない返答に少し身構えてしまう。
「愛はコンビニでも売ってんだよ。２００円くらいで」
　こんな時にでも役に立つ西尾維新作品の有能さに感謝した。
「それ、前にも聞いたことある。どういう意味なの？」
「僕の好きなアニメのセリフ」
「キモ」
　彼女の表情から察するに本当に理解できていないようだ。やはり、西尾維新作品は万人受けしないようだった。
「早く行こ」
　二人並んで僕のアパートまで歩く。僕らは周りの人たちにはどう映るのだろうか。クリスマスに男女のペアなら恋人同士に見えるのだろうか。彼女が本当に一緒にいたい人は今頃、家族でクリスマスパーティーをした後、彼の妻と共に寝ているだろう。僕が本当に一緒にいたい人は今頃、恋人の帰りを今か今かと待っているのだろう。幸せの席は数は限られている。座れない人達は立ち続けるか、ほかの空いている席を探すしかない。立ち尽くしていると足がしびれ始めてくる。僕らはお互い違う席を見つめたまま支えあっっているのだ。
　わざとらしい街の明かりが今日はやけに目立っている。彼女もまたイルミネーションで着飾った木々を見上げながら歩いていた。
「私、約束って嫌いかも」
　思い出したかのように呟く彼女の表情は今日という特別な日をどこか恨んでいるようだった。彼とクリスマスの事で何かあったのだろうと予測はできる。
「.....約束ってのは果たせれなかった時の免罪符代わりにもなるからね。約束さえしちゃえば出来なかったとしても、する意思はあったから許されるてきな」
　誰でも経験はあるはずだ。果たせなかった約束。あるいは最初から果たす気のない約束。
「そう。それ。守れない約束なら最初からしなきゃいいのに」
　たぶん、彼女は無謀な約束だったとしても期待せずにはいられなかったのだろう。人を好きになるとはこういうことかもしれない。
「約束には２種類あるんじゃない。一個は最初から果たすつもりで決断した約束と、もう一つは判断の保留。今、考えても答えが出ないから約束して先延ばしにするみたいな」
　言っている途中から自分の考えを上手く言語化できてないことに対し苛立ちを感じ始めた。

「何となくわかる気がする。約束が２種類のうちどっちなのかあなたはすぐに分かるの？」
　言いたいことが何となく伝わっていることに安堵する。
「そりゃ、分かるよ」
　彼女の方に顔を向けて言う。彼女もまた僕を不思議そうな目で見つめてきた。
「何で分かるの？」
「大人だから」
　彼女は眼を丸くしたかと思うと、くすくすと笑い始めた。その笑顔はブーツを自慢したときに見せた笑顔とは違い屈託のない笑顔だった。僕が慣れ親しんだ、僕の好きな笑顔。笑いあう二人は出来の悪い幸せと共に家路を急ぐ。
　アパートにつきこたつに入り、少し高いシャンパンとどうでもいい会話をしながら夜が更けていく。ベットに入ったのはまたしても５時頃だった。背中越しに彼女が話しかけてくる。
「性夜。性なる夜だっけ。終わっちゃったね」
　急にそんな話を振られ内心ドキドキしたが、頑張って冷静を装う。
「その時間帯は働いてたからな。そっちはどうだったの。僕以外にも男いるでしょ」
　彼女が寝返りを打ち、こちらを向くのが分かった。
「本当は裏垢で男でもひっかけようと思ってたの。ヤッたらさようならでいいかなって」
　彼女の言葉がとても冷たく感じる。どうしようもなく嫌だった。彼女には俺以外を頼ってほしくない。彼女にとって特別な存在であるという事実だけがこの不遇な現実を生きる糧なのだ。それを失ったら本当に一人になってしまう。
「まだ、そんなことやってんの。終わった後、ヒステリー起こすじゃん。お前の部屋に行くときは大体その片づけの時なんだからもう少しこっちにも気を使ってよ」
　本当はそんなことを言いたいわけじゃない。
「ちょっと前も裏垢の大学生とヤッた後に家に帰ったらイライラして、大切なマグカップ壊しちゃった。私、なんでこんな事言ってんだろ。誰にも言わないでおこうと思ったのに」
　彼女に何をすればいいのか分からない。そして、振り向いて彼女を見たら何をするか分からなかった。緊張で背中を強張らせながら彼女に話しかける。
「いいか、相手もお前を利用してるだけなんだから、お前もあくまで利用しているだけって考えりゃいいだろ。そうすりゃ、自己嫌悪だって少しは軽くなる。それにお前の彼氏だってお前に似たようなことしてんだろ。お相子だよ」
　どうして俺は彼女をここまで庇うのだろう。
「悪いことだって怒ったりしないんだね。何でも許してくれる。時々あなたのそういうところがとっても怖いと思っちゃう」
　怖いと言われたことが不思議だった。男と一緒に寝ているのに他の男性とヤッた話を平然とする女の方が怖いと思う。
「ヒドいな。友達の幸せを願って何が悪い。それに僕が肯定しなかったら誰もお前を肯定する奴なんていないだろ」
　何でも肯定するから君は僕を必要としてくれるんだろ。

「そうかもしれない。あなた優しいから」
　そう言い彼女は僕に抱きついてきた。彼女の額が僕の背中にあたる。
「どうしてあなたは私に手を出さないの？」
　背中から回された彼女の腕が僕の腕を探している。僕は彼女の手を握り締めた。
「抱いたら他の男と一緒になるだろ。だから嫌なの。お前の彼氏とも違う、お前にとっての特別な存在でありたいだけ」
　とても細い指だった。手を握っていると不思議と嘘が付けなかった。嘘を言ったら彼女の手が離れていきそうで。
「私なんかの特別な存在になったって価値なんかないよ」
　彼女の震える声で僕も理解した。彼女もまた嘘を言っていないのだと。
「価値があるかどうかは僕が決めることでしょ。少なくとも今は君に捨てられたくないかな」
　僕の心の安定には彼女が必要なのは間違いない。
　僕の背中に顔を埋めて泣く彼女。彼女の手は僕の存在を確かめるように強く握られたままだった。　ベルの音とは似ても似つかない彼女の泣く声が木霊する。その声につられてサンタがプレゼントを持ってきてくれた。そのプレゼントは彼女の特別な存在になる方法。それは彼女を肯定することと彼女を抱かないことの二つ。

　クリスマスが過ぎ、年越しが近づく。少しだけ降った雪は行きかう人々に踏まれ黒く汚れながら溶けだし地面を濡らす。この町は水捌けがよい街ではない。そして僕もまた自分の感情をため込んだまま捌くことができていないのだった。自分には好きな人がいる。でも、その人は既に別の人と付き合っている。僕にはまた別の感情もある。誰かの特別な存在でありたい。居場所というか存在理由というか。僕は好きな人と一緒にいるよりも、僕を必要としてくれる人と一緒にいた方が幸せを感じられる気がする。愛などそこになくたっていい。だが、彼女はどうだろう。彼女は愛し愛されたいのだ。本当は誰よりも相手を独占し、また独占されることを望んでいる。どうしてこうも僕と彼女では求めるものが違うのだろう。互いが互いを必要としているのに求めているものが違いすぎる。後はどっちが先にこの矛盾に耐えきれなくなるかだけ。
　そしてここ数週間は彼女からの連絡もない。この場合は彼と上手くいってるパターンと上手くいってないパターンの二つがある。久々に来るＬＩＮＥが自慢だったら上手くいっている証拠だし、直接会って話したがったら上手くいっていない証拠になる。まぁ、どっちに転んでも僕のやることは彼女を肯定することなのだが。そんな風に、心構えしていたある日、彼女から連絡がきた。
「あんたのせいでフラれそうなんだけど」
　僕の予想の斜め上のＬＩＮＥだった。さすがにこれを肯定してしまうと僕が悪者になってしまう。
「身に覚えがないんだが。僕、彼に何もしてないよ」
　僕は悪くない。
「彼にじゃなくて、私にしたのよ。今日、家に来ない？」

僕は悪くない？
他人の家で寝るのってあんまり好きじゃないんだよな。そんな的外れなことを考えながら彼女に返信する。
「分かった。仕事終わったら向かいます」
仕事が終わると二駅離れた彼女のアパートに向かった。チャイムを鳴らすと、白いセーターを着た彼女が出迎えてくれた。
部屋に入ると暖房が効いてて暖かかった。さっきまで冷気を吸っていた肺に急に暖かい風が入り込むと体の緊張が解けていく。
ふと、棚の上のポケットＷｉ－Ｆｉに目が留まる。
「これ、お前の？」
「あぁ、それ、彼が忘れていった物なの」
そう言い、彼女も棚の上の物に目をやる。
「また来るための口実だろ。こういうのってなんか嫌だよな。僕らも誰かに会うためには理由を探さないとだろ。子供の時は “会いたい” を理由にできたのに.....」
さらに何かを言いかけて彼女を見ると、彼女は腹を抱えて爆笑していた。
「なに、子供みたいなこと言ってんの！ 面白すぎでしょ！ だいたいバーに来る客なんて理由を探すか口実を作りにきてるんじゃないの？」
あまりにも笑う彼女に少しムッとする。
「それはそうだけど.....　もう、いい」
それ以降は普通に話すだけで、彼女から何かを言い出す気配はなかった。ただ、自然と終電過ぎたから泊まる流れにはなった。お互いシャワーを浴び、彼女が居間でドライヤーを髪にあてている時、何気なく僕は部屋を見わたす。寝室のドアを開けると、暗闇の中、差し込まれた微かな光の先にシングルベットが一つ。ここでふと湧いた疑問を彼女にぶつけてみる。
「なぁ」
ドライヤーの音は大きかったが彼女は聞こえているようで顔をこちらに向けてきた。
「なに」
彼女と目が合う。
「このベットで彼とヤッたの？」
すると彼女は少し驚いた顔をし、また笑い始めた。
「なにそれ！ 今日はほんとに子供っぽい事ばっか言うね！　そっかー男の子だから仕方ないよね！　嫉妬しちゃうもんね！　今日は一緒に床で寝よっか？」
めちゃくちゃ恥ずかしい。
「茶化すな。別にベットでいい」
意識すると余計に恥ずかしくなってくる。
「別に床でもいいのに。さ、寝よっか」
彼女はドライヤーをもとの位置に戻し、居間の電気を消して寝室の電気を付けた。僕も彼女に続き寝室に入りドアを閉める。ベットの奥に彼女は倒れるようにダイブし、僕はベットに腰掛け本題を切り出した。
「なぁ、僕のせいでフラれそうってどういうことなの」

しばらく黙ったままの彼女だったが、枕に顔を埋めながら話始めた。
「彼に抱かれそうになった時、あなたの顔が浮かんだの。そしたら急に彼が怖く見えちゃってその日は結局しなかったの」
どうやら先に矛盾に耐えきれなくなったのは彼女のようだ。
「ヤッてる最中に僕の顔が浮かんできたら、そりゃ萎えるでしょ」
「茶化さないで」
明るくしたつもりが少しだけ彼女を怒らせたようだ。
「抱けないって分かると、彼、不機嫌そうだった。私って本当に愛されているのかな」
愛されていなかった。それは、今までの彼に尽してきた時間が無駄だったということ。
「それに、あなたの言う特別ってなに？ どうして彼との関係を応援してくれているはずのあなたが邪魔をするの？ なんで私は彼よりもあなたの事を考えるようになってきているわけ？」
彼女から零れだした疑問は僕の弱さに責任があることを僕は知っている。彼なんて捨てて僕といようとか、僕は君が好きだとか言って抱きしめれば彼女は泣き止んでくれるはずだ。でも、僕にはそれが出来ない。そんなことをすれば今ある安定が崩れる。新たに手にするものが不安定なものでしかないと確信している。結局、僕は自分の事しか考えていない。自分の事で精一杯の人間が誰かの特別になろうとなんてするから他人を傷つけることになる。目の前の彼女は傷だらけじゃないか。
ごめんなさい。心からそう思う。
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
「ごめんなさい」
答えにならない謝罪の言葉。
彼女が枕から顔を上げ、横たわったまま僕を見上げる。僕はベットに腕を付き、彼女の顔の方へ乗り出す。見下ろした彼女の目からは涙が溢れていた。僕の目からも涙が落ちる。彼女の瞼の横に落ちた僕の涙が彼女の涙と混じり合い落ちていく。
何の解決にもならない。先伸ばされた問題は積もるばかり。だからこそ今、この瞬間だけを永遠に感じていたい。
薄い痛みで目が覚めた。ぼんやりとした頭で辺りを見渡す。１０時くらいだろうか。彼女が仕事だったら、９時前にはたたき起こされていただろう。さっきから腕をつねられている気がする。彼女の不可解な行動に頭がついていかない。
「痛いんだけど。やめてくんない。もう少し優しい起こし方にして」
つねられてる右手をかざすと所々が少し赤くなっていた。
「その赤いのって消えずに残るかな？」
寝ぐせで外はねした髪のせいか彼女はいつもより幼く見える。
「こんなの、１０分もあれば消えるでしょ。どうしたの？」
彼女は僕の方に近寄り、僕の右手を抱え込みながらまたつねり始めた。
「なら、せめて痛みだけでも残しとかなきゃ」
カーテンの隙間から入る光は僕らを淡く照らす。僕はあお向けで彼女を見上げている

せいか少しだけ眩しい。薄目で見ていると、彼女の存在がひどく不明瞭に感じた。
「ねぇ、抱きしめたら怒る？」
　つねっていた彼女の手が止まる。
「痛いのが好きだったの？」
　そう言うと彼女は僕の胸に頭を乗せ寝転んだ。
「無言で抱きしめてくれたら１００点だったのに」
　胸から伝わる彼女の重さで彼女の存在を確かめることができた。
「痛いのが嫌いだから、抱きしめていいか聞いたの。君が本当にここにいるか確かめたかったから」
　右手で彼女を軽く抱きしめる。
「さっきから私もここにいたことを残しとくためにつねって後を付けようと頑張ってたの。こんな方法があったとはね。てか、これって抱きしめたうちにはいるの？　　ちゃんとやって」
　彼女は上半身を起こし腕を広げてきた。僕も起き上がり彼女を抱きしめる。どれだけ力を入れればいいか迷ってしまう。ちょっとした力でも握りつぶしてしまうかもしれない。それくらい彼女は幼く繊細に見えた。
「どう？　　ちゃんと、私はいる？」
「.....いるね。ちゃんと。てか、今日は君の方が子供っぽいよ」
　精一杯の照れ隠し。
　すると、彼女は耳元でいたずらっ子のように囁いた。
「知っててやってるの」
　僕の心臓が跳ねるのが分かる。完全に白旗を上げるしかない。
「君には敵わないな」
　ただ、僕も男なので威厳を保ちたくなった。彼女の脇腹を思いっ切りくすぐり始める。彼女は笑いながらベットに倒れこんだ。昼間の寝室から男女の二人の笑い声が木霊する。そんな日があっても別に不思議じゃない。

　少しずつ寒さも和らぎ雪も溶け始めてきた２月。いまだに僕は彼女との関係に甘え、実らない恋心に向き合うことをしていない。この日も夜から仕事だったので昼前に起きて家で時間を潰していると、彼女からＬＩＮＥが届いた。
「入院しちゃった」
　短い文だったがかなり驚いた。彼女に電話していいか尋ね、すぐに電話した。彼女の話では仕事中に眩暈がして倒れたとのこと。貧血によるものだったらしいが安静のため数日間は入院することになったようだ。仕事まで暇だったこともあり見舞いに行くことを彼女に伝えると、色々とお使いを頼まれてしまった。彼女に言われた物を買い、病室についたころには日が落ち始めていた。病室に入り目に入ってきたのは顔面蒼白の彼女。よく分からない不安が僕の心を覆い始める。
「顔、めっちゃ白いよ。大丈夫なの？」
　一週間前に会ったときは普通だったはずだ。

「そんな心配そうな顔しないで。最近忙しかったから無理しすぎたみたい」
　そう言い、笑う彼女にも元気がなかった。何か違う。仕事だけじゃないのは直感的に分かった。
「本当にそれだけ？　　彼と何かあったんじゃないの？」
　ベットの横にある椅子に座りながら問いかける。彼女は困ったように笑っていた。
「やっぱりそれ聞くよね。いつもこの恋はもうダメかもって話してるけど、今回は本当にもうダメかも」
　すでに１００回くらい聞いたセリフだったが、彼女がここまで弱るのは初めてだった。上手くいかない彼との現状と仕事の忙しさが重なってしまい体調が悪くなったのであろう。体が弱っている時は心も弱っていることが多い。彼女の落ち込みはいつもの一過性の物だろうと思い、励ますことにした。
「体が弱ってる時は心も弱ってるからそんな風に思うだけでしょ。退院する日いつの予定？　　何か奢るから美味しいものでも食べに行こうよ」
　食べながら、愚痴を聞くまでが僕の役目だ。
「.....その日はいい。彼が迎えに来てくれるから。平日なのにわざわざ時間休を使ってくれるんだって」
　普段なら自分に時間を割いてくれるだけで喜ぶはずの彼女は今日に限ってうつむいたまま笑っていなかった。本当に俺の誘いを断るのが嫌そうに見えてしまう。
「そっちが優先でしょ。俺のはまた今度でいいや。何か食べたいもの考えておいてね」
彼と会えるのに楽しみしていない彼女を見るのも初めてな気がする。
「ゼリーが食べたい」
　彼女が頼んできた一つにゼリーがあったのを思い出す。
「買ってきたよ。杏仁豆腐とよく分かんないヤツ」
　袋から出し、二つともベットの上に置いた。
「杏仁豆腐がいい。」
　スプーンを彼女に渡すが彼女は食べようとしない。
「どうしたの？ 具合悪い？」
「食べさせて」
　見慣れた彼女の笑顔にすこしだけホッとした。
「甘えんな。自分で食べて」
　人を試すような事を言うとき、彼女はいつも面白がってやっている。
「私、病人なんだけどな」
　ひどく演技掛かった落ち込みようだ。
「.....わかったよ。貸して」
　杏仁豆腐の袋を開け、スプーンですくい、彼女の口元に近づける。
「はい、どうぞ」
　彼女は食べるんじゃなく笑い始めた。
「そこは、アーンでしょ。まぁありがと」
　そう言うと彼女はスプーンの上にあった杏仁豆腐を食べ始める。他人から貰うのは一口で十分だったのか、後は「面倒だから、自分で食べるね」と言い、さっさと一人で食

べ始めた。それから、２，３会話をし、帰ることにした。帰り際にベットの上で手を振る彼女と目が合う。彼女は明らかに無理をしている。晴れかけていた不安がまた、僕の心を覆い始めた。

退院した日には彼女から「無事に退院できました」とＬＩＮＥが来ていた。数日中には一緒にご飯に行く約束をしていたが、退院した翌日、彼女から急に、ご飯はいいから家にきてくれないかという連絡がきた。彼とのことも気になっていたので僕は彼女の家に行くとにする。

僕が彼女のアパートに着いた時には日が沈みかけ肌寒くなっていた。恐る恐るチャイムを鳴らす。ドアを開けてきた彼女の目は赤く腫れていた。

「どうしたのその目？」

理由はだいたい想像がつく。

「いいから、まず入って」

靴を脱ぎ、リビングに行くと彼女はこたつに入り、クッションを自分の顔に押し当てながら仰向けになった。僕はこたつの上に置いてある二つのコーヒーカップに目が行く。どうやら僕が来る前に誰か来ていたようだ。

「何があったの？」

こたつに入りにながら尋ねると、彼女は足をバタつかせ僕が入ってくるのを拒んだ。こたつに入るのをあきらめ、そばに座りながら彼女が話すのを待った。５分くらいたった後、彼女はポツリと呟いた。

「寝てないの」

掠れた声で聞き取りづらい。

「昨日から？」

「うん」

「会社は？」

「休んだ」

「ご飯は？」

「食べてない」

退院してから何も食べてないことになる。また貧血にでもなったら大変だ。

「なら、ここで寝てなよ。台所借りるね。何か作るから」

彼女からの返事はない。

「ここにある飲みかけのカップも洗ってもいい？」

彼女が顔を上げちらりと僕を見てそれから言った。

「ありがとう。自分じゃできそうになかったの」

小さめのコップにはもうコーヒーは入っていなかった。でも、大きめのコップには冷え切ったコーヒーがまだなみなみと入っている。流しに捨てたコーヒーにはリビングに充満している澱んだ空気が溶けている気がした。鍋の素があったので、冷蔵庫の中から鍋の具に使えそうなものを選んだ。３０分ほどで鍋を作り終えた。鍋や食器をこたつの上に置き、おそらく寝ていないであろう彼女に話しかける。

「出来たよ。起きて」
　むくりと起き上がり、こたつの上の鍋を見る。
「昨日、本当は私が鍋を作ろうと思ってたんだ」
　冷蔵庫を開けた時にうすうす感じていた。鍋に合う食材が多かったのだ。
「さっさと食べよ」
　僕は自分の取り皿に具材を入れて食べ始める。彼女もまた具材を取り皿に入れたが食べようとはしなかった。その代わり、目から涙が流れ始める。
「私、フラれちゃった」
　いつかは言われそうな気がしていた。だけど、なんて言っていいか分からない。彼女はまた震えた声で話し始める。
「最近、彼と上手くいってなかったの。些細なことで二人とも喧嘩して。それで私が貧血で倒れたことで決心がついたんだって。一緒にいても君を傷つけてしまうだけだから別れようって。そんなの私を理由にしてそっちが勝手に別れたいだけでしょ。私は別れたくないって言ったよ。そしたら俺は君を選ぶことが出来ないって言われちゃったの。それを言われちゃったらどうしようもないじゃん。ねぇ、私はどうすればいいの？」
　つまるところ、彼女の愛に耐えられなくなった彼は彼女の元から去っていったのだ。一番じゃなくても愛されていればそれでいいと言っていた彼女。ただ、その愛でさえ今じゃもうあるかどうか疑わしかった。それでもなお彼女は彼を好きだということに僕は苛立ちを覚え始めた。
「そもそも終わりが見えてた恋愛だったろ。男なんてたくさんいるんだしそんなに落ち込まないでよ」
　彼女と家族を天秤にかけ、家族を選び彼女を捨てていった男のことを考える。端から彼女を幸せにする気がないのにどうして彼女の傍にいられたのか。彼女が傷つくだけだと知りながらどうして好きだなんて無責任な事が言えたのか。どうして。どうして。様々な疑問が怒りと共に湧いてくる。僕は怒っている。誰に？ もちろんここにはいない彼にだ。でもそれだけではない。目の前で泣いている彼女にもなぜだか怒りが湧いてきている。
「何でそんなこと言うの？　　どうしていつもみたいに慰めて私の背中を押してくれないの！」
　彼女は真っ赤になった目で僕を睨んでいた。初めて彼女に睨まれた。そして、初めて彼女の事が分からないと感じた。
「今ならまだ間に合うかもしれないから、ごめんなさいってＬＩＮＥしろって僕に言えってこと？」
僕は絶対にそんなことは言わない。だってそんなことを言ったら彼女はこれから先も苦しみながら恋愛することになる。そんなことを望むわけない。
「いつもならそう言ってくれるでしょ！　　なんで今日に限って言ってくれないの！
よりにもよって一番言ってもらいたい日に！」
　彼女は取り皿をこたつの上に叩きつけた。ゴンッと鈍い音が鳴り、辺りには鍋の汁が飛び散っている。怒りを露にする彼女を見つめていると、彼女に抱いた怒りはますます強くなる。ただ、それと一緒にどんどん悲しくなってきてもいた。僕は彼女が不幸にな

るくらいなら別れた方がいいと思っている。いつだって彼女の幸せを願っている。その思いが彼女にも届いていると思っていた。思いあっていると。分かりあっていると。
「僕は君が傷つくくらいなら別れた方がいいとずっと思ってたよ。てか、君だってこんな恋愛がいつまでも続くと思っていたわけじゃないだろ。　幸せな終わり方なんてしないって分かってて目を背けてただけでしょ」
　もうダメかもが口癖だった。本当は君が一番、終わりを感じながら恋愛してたはずなんだ。
「そんなこと言わないでよ！　いつもみたいに励ましてよ！　あなたはどんな時でも私の味方でいてくれるんじゃないの！」
　分からない。僕を敵視する彼女の目が、彼女の態度が。
「僕はいつだって君の味方だよ。今だってそのつもり。でも君の言う味方とは違う。君は彼との関係を肯定し続ける人を味方だと思ってるんじゃない」
　目の前の彼女がこれまで僕と一緒にいた彼女と同じ人とは思えなかった。何かが違う。どこか掛け違えてる。でもどこが？ 何が？ 分からない。
「そうよ。だってあなたはそういう人だったでしょ？」
　彼女の声は震えていた。すがるように見つめてくる彼女の瞳は怯えきっている。彼女もまた目の前の僕が赤の他人のように見えているのだろう。
「違うよ。僕はそんな人じゃない」
　言ってしまった。これまでの僕らを否定する言葉。僕たちは思い上がりで成り立っていただけで大事なところは何一つ分かりあっていない関係だったのだ。
「出てって。今すぐここから出てって！」
　彼女の心の扉が閉まる音が聞こえる。僕は何も言えなかった。無言のままこたつから立ち上がり玄関へと続く廊下に向かう。彼女をちらりと見ると、うなだれて嗚咽し泣いていた。
　僕の何が彼女を傷つけてしまったのだろう。靴を履き、ドアを閉める。辺りはすっかり暗くなっていた。ここまで来ると、彼女の泣いている声は聞こえてこない。でもこのドアの向こうで彼女は今も泣いているはずだ。彼女の好きなお店は知っている。彼女のちょっとしたクセは知っている。彼女の付けている香水は知っている。彼女が苦手な事は知っている。彼女の好きな人は知っている。でも、彼女が僕に求めていた事が何なのかは知らなかった。彼女とは分かりあっていると思っていた。いつからこんなにすれ違っていたのかも分からない。
　何も考えることが出来ない。とにかく、来た道を引き返す。ただただ痛かった。どこが痛いのか分からないがとにかく何かが、どこかが痛む。
　ふと、彼女の言っていた言葉を思い出す。
「なら、せめて痛みだけでも残しとかなきゃ」
　本当に彼女は僕に痛みを残していったようだ。他人と分かりあうなんて絵空事で、そんなものを求めているお前は惨めだと。お前はどこまで行っても結局独りなのだと。彼女の残した痛みは死ぬまで癒えないだろう。でもよかったこともある。これで彼女の事を死ぬまで忘れない。ぼくが死ぬまでこのエンドロールは流れ続ける。

あとがき
君が僕の事を好きになる。そんな奇跡を望んだりしない。だからせめて、僕の知らない誰かに僕の知らない君を見せたりしないで。

火門と菊

火門と菊

大島治輔

幕府のお偉いさんの何とかという改革のせいで吉原はどこもかしこも不景気だった。花魁道中は制限がかかり、やっていいのは一日一人だけ。近頃は湯女 (ゆな) だの飯盛女だの何処ぞの馬の骨とも知れない商売敵が相次いで大門の内に放り込まれている。水商売は水商売で一緒くたに堅気と隔離する気だ。質素倹約。成程大いに結構。幕府も金がないらしい。しかしそんなことをされていちゃあ、こちらは商売あがったりだ。昔は大見世として栄華を誇っていたこの河合屋も、今やどうにか中の上から上の下にぶら下がっている状態で、立派な大籬 (おおまがき) だけが分不相応に残っていた。

そんな世知辛いご時世でもここでは毎晩堅気の人間が目を引ん剝くような金が動く。今日もまた、いや今日は特に大金が動いたようだった。廓 (くるわ) は上から下のてんてこ舞い。女郎の半数がその宴会のために駆り出され、看板女郎の野分は道中までした。経営も火の車な河合屋では道中は原則初見世のみ、それも売れ筋の姉女郎の下についた売れそうな子じゃないといけなかった。だから、身内の道中を見たのは本当に久しぶりだった。

高瀬も頭数合わせに座敷に呼ばれた。河合屋の中で高瀬は不器量な上に年増近い。しかし年の功と言うべきか、三味線の腕はどの芸妓にも劣らなかった。馴染みの客が来ない日は名代として呼ばれることも少なくなかったし、高瀬もその方が気楽だとすら思っている。仮にも大籬の女郎のくせに、高瀬は気位の低い女だった。

「なあ、そこの」

都々逸 (どどいつ) を詠い終えた高瀬を客の一人が呼び止める。上座の方では酔っぱらった客の男たちがそれぞれに侍る女郎の肩を抱いて、別の催しが始まっているようだった。高瀬を呼び止めた男は、まるでそこからこっそりと抜け出してきたかのように声をひそめて手招をきしている。まだ青年と呼べるほど若い男だが、足を崩して酒を呷

る姿に妙な貫禄があった。体格も良く、ともすれば無骨にも見えそうなところを、しかしにっこりと笑った顔が存外穏やかで温かみを感じさせる。
「あい何でしょう」
「先程は見事な腕前だった。唄も、三味線も」
「まあ、それはよござんした」
「野暮な男で恥ずかしい限りなのだが、ありんす、って言わないのだな」
「ふふ、そりゃあ時代遅れでありんす。もう使う人もおらんでござんしょうね」
　そうなのか、と男は感心したように頷いた。最高級の大見世ならともかく、高瀬の知る限りで花魁言葉を使う女郎はあまりいない。特に江戸では砕けた口調の女が多いと聞く。精々気取ったときやこういった戯れに口ずさむ程度だ。以前も高瀬は同じことを聞かれた。
　その風体から、今日大金を落としていったのは武家の身分だろうと予想をつけていた。それも貧乏な奉公侍ではなく、それなりの実入りの。歳の割に堂々とした雰囲気も、野暮を自称しながらもその振る舞いが如才ないのも、育ちの良さと考えれば納得する。いかにも女郎にもてそうな男だと思った。
「なあ、あちらで酒を配っている者は何という」
「あれは新造の真木といいます。まだ初見世前なので手ェ出しちゃ駄目ですよ」
「違う。その近くの男だ」
「あれは幇間 (ほうかん) の猿吉。本当は左之吉っていうのだけど、ほら、小猿みたいな顔してるでしょう。猿吉、猿吉って揶揄ってたら自分で猿吉って名乗りだしたんです」
「それでもない。ほら、今退室してしまった、あの」
　そこまで聞いて、ああ、と話のかみ合わなさに合点が行く。高瀬はその存在に気付きもしなかった。アレは滅多に表に出て来ないし、出てきたとしても必要なことだけ済ませてさっさと引っ込むような男だから。
「あれは李九郎といいます。六つの陸じゃあなくて、すももの李に九つで李九郎。ウチの若い衆の一人ですわ」
　答えながら高瀬は思い出した。ありんすと言わないのかと、以前この男と同じ質問をしてきたのは、出会って間もない頃の李九郎だった。

　李九郎は数年前、少年の域を脱し始めたくらいの年頃で河合屋の奉公人となった。そろばん勘定から不寝番、果ては中郎がするような雑用や用心棒の真似事まで、大抵の仕事は黙ってこなす。しなやかな雪肌やこじんまりした顔は歌舞伎の二枚目役者のようにも見えるが、それ以上に険の強い切れ長の目や固く結んだ口元が人を寄せ付けない冷たさを感じさせる。実際その印象に違わず、恐ろしく無口で不愛想な男であった。客引きや太鼓持ちはやれないため、滅多に客前には出て来ない。あの顔に惹かれて粉かけようとする女郎も少なくなかったが、李九郎はその悉くを袖にしてきた。太夫には客を自ら選ぶ者もいるが、これではどちらが傾城か分からない。そんな李九郎を女郎たちは密かに「お人形さん」と呼んでいた。

そんな李九郎と初めて交わした会話らしい会話がありんす言葉についてだった。やはり目の前の男と同じように――それより大分表情の変化は少ないが――感心したように頷いていた。素直な様子は可愛らしくはあったが、高瀬はこんな男に愛されたいと思うより、勤め先が女廓の奉公人ではなく陰間茶屋であったなら今よりもずっと稼げただろうにと、惜しく感じたのを覚えている。

なんてことはない世間話だ。深い意味は無かった。故に高瀬はこの話を男にしてやった。あれは旦那さまと同じことを聞いて、同じように頷いてたのですよと、したら。

カン、と不意に鋭い音が響く。

男が空の杯を叩きつけるように膳に置いたのだ。落下の衝撃に膳がぐらりと振動する。が、飲めや歌えやの喧騒の中で男の様子に気付いたものはいない。同行者たちは嬌声を上げる女郎たちとお座敷遊びに熱中している。高瀬と男の間でだけ、水を打ったような静寂が漂っていた。

「……その、李九郎は……」

男の口がもごもごと言葉を探すように動いている。促してやろうかと一瞬考えて、止めた。この男は間違いなくお大尽だ。高瀬のような中途半端な女郎より、河合屋のような中途半端な妓楼より、もっと上に登楼 (あが) れる人。二度と会うこともない上客。ならば馴染みのような気遣いも無用だろう。

「あちきが目の前にいるのに、目移りでありんすか」

大げさに拗ねた声を作って、冗談みたいな花魁言葉で、高瀬は猫が鳴くように男にすり寄った。素人が見ても戯れと分かるような紋切り型を意識して。

男は眉を下げて微笑んだ。凛々しい顔に似合わぬ気だるそうな笑顔だった。

大金叩いた宴会はやっぱり凄いなあ年季前に良い経験をしたなあと他人事のように回想していたのも束の間。あの一団の中から二人が河合屋の馴染み客となった。一人はあの中で最も年嵩だった四十路の男。あの宴会の言い出しっぺで、馴染みとなったと言うより元々野分の馴染みであったらしい。もう一人は高瀬に李九郎の名を尋ねたあの若者だ。何を血迷ったのか、あれからそう悪くない頻度で高瀬を買っていくのだ。

「いいなあ高瀬さんは」

隣に座る野分が唐突に呟いた。甘酒の入った椀を両手で包み、ちびちびと舐めるように口を付けてはほう、と白い息を吐く。何気ない仕草すらどこまでも絵になる女だった。

「野分さんに羨まれるなんて、今日が命日かねえ」

「何言ってるんだい。男前で金持ってて人の良さげな馴染みを羨まねえわけないよ。今日だって来るんだろう」

「野分さんこそ、今日も呼ばれてるんでしょ」

「馬鹿。抱かれるなら四十路のジジイより若い男前の方が良いに決まってるだろ。知ってるかい。真木がね、件の旦那に岡惚れしちまったらしいよ」

そう言って野分は朗らかに笑った。羨ましいと言いながら、薄暗い妬み恨みは感じられない。姿が天女のように美しかろうと中高年の侍が骨抜きになる程気立てが良かろう

と、素の野分は竹を割ったような江戸っ子気質だった。
　事実間違ってはいない。今日もあの男は来ると言った。だから高瀬は張見世に出ることなく、真っ昼間から茶屋で野分と温かい甘酒を啜っていられる。大見世の面目もクソもない今の河合屋で張見世に出ずに客を待つことを許されるには、それこそ野分くらい売れていないといけない。初回で笑顔を見せないとか床入りしないとか、そういうのも同様だ。高瀬ぐらいの女郎は一見だろうが笑うし、媚びるし、寝る。
「このままいけば身請けはともかく、年季はいい具合に縮んでるんじゃあないのかい」
「うーん。でもさあ、何か匂うんだよねえ。あの旦那」
「体臭が？」
「違う違う。そんな旨い話あってたまるかって意味で」
「根拠は」
「女の勘さ」
　ふうん、と野分が胡乱な相槌を打つ。彼女には高瀬が捻くれた女に見えたのだろう。目の前の幸運を疑い、斜に構える卑屈な女に。しかし高瀬は己の勘を信じていた。それに野分も吉原の女。男がいかに信用ならないかよく知っているため、それ以上は何も言わなかった。
　表の通りからバタバタと走り寄ってくる音に顔を上げると、見慣れた猿顔が慌てて手を振るのが目に入った。
「ああ、いたいた！ おーい、野分姐さん、高瀬姐さん！」
「ありゃ、猿吉じゃないか。どうしたんだいそんなに慌てて」
高瀬と野分は二人そろって目を丸くした。猿吉は額の汗を拭うと、お客さんでい、と息も切れ切れに言った。
「高瀬姐さん、銀之助さまが来てますよ」
「何だって。場所も時間も差し紙と全然違うじゃない」
「何もうっかりしちまったらしいですぜ。間違えたのはこっちの落ち度だから座敷でゆっくり待っている、と」
「名代は。真木あたりかい？」
「それがあの旦那、代わりの女はいらねえとくら！ 李九郎を捕まえて酒だけ頼んで座敷に引っ込んじまいやがった」
「へえ、立てば芍薬の女衆より雪柳のお人形さんにかい」
　おどけたように言う野分もいつも通り大げさな猿吉も、言外に「大した惚れられようじゃあないの」と微笑ましくも下種な冷やかしの目を向けてくる。が、高瀬からしてみれば刻一刻と直感が確信に変わっていくようなものだ。
「わざわざ済まないね、猿吉。すぐに行くから」
「待たせちゃ悪いですからなるべく急いでくださいね。あと野分姐さんもそろそろ準備しましょうぜ」
「あたしゃまだ時間あるでしょ」
「いやいやそこは高瀬姐さんみたいなこともあるかもしれねぇですし、余裕を持って。ね？」
「分かった。じゃあこれ飲み終わったら行こうか。ほら、エテ公。あんたの分も奢って

やるから」
「おお、そりゃありがてぇ……って、野分姐さん。猿吉の次はエテ公ですかい」
「そうだよ。よくよく考えてみりゃ『去る』なんて縁起が悪いじゃないか。今度からエテ公って名乗りな」
「もはや左之吉のさの字も無ぇや！」
　派手に嘆いてみせる猿吉に高瀬は笑いを堪え切れなかった。外に出れば客を引き座敷に上がれば太鼓持ち。口から生まれたような猿吉は寡黙な李九郎とは正反対の人種だった。
　カッカと高らかな笑いを不意に収めると、野分の目が高瀬と線を交わす。淡く撫ぜた流し目に思わず高瀬は魅入った。事実上今の河合屋を支える花魁の凄艶なまでの媚態。が、そこに垣間見えたのはむしろ戦友に対する情と激励であった。
「お気張りなんし」
　野分に背を押されるように、高瀬は覚悟を決めて歩き出す。その覚悟は、野分が思うようなものではないのだけれど。

　見世に戻ると女将からねちねちと説教を食らった。一体何処で茶ァしばいていたんだ、お前客を待たせるほど偉くなったつもりか、と。別に高瀬に非は無いので、ハイハイと適当に流しながら座敷に上がる準備をした。
「李九郎が酒を頼まれたんだって？」
「そう。それにまだ戻ってきてないの。あのお人形さん」
　答えたのは真木だった。うずうずと落ち着かない手足とは対照的に、瞳は刺すような質量を持って高瀬に向けられている。嫉妬、侮蔑、敵意、切望、懇願。いずれも干からびた高瀬には些か重すぎる感情だった。
「……高瀬姐さん」
「うん。いざって時にはあんたに頼むから」
　そう言うと、真木は先程までのどす黒い視線をぽっと和らげた。頬紅要らずの桃のような柔肌は思わず齧り付きたくなるほど瑞々しい。どうせならこういう娘にすればいいのに――と、少し前の高瀬なら思っていたのだろう。
　思えば違和感は随所にあったのだ。名を聞いたとき。銀之助、と名乗った際、高瀬は直感で偽名だと思った。床入りのとき。熱心と言っていい程通ってくれるくせに、彼は肌を合わせる瞬間だけ億劫そうに眉を顰める。来店と見送りのとき。いつもきょろきょろと周りを見渡して誰かを探している。

　座敷の中からは二人の男の話し声が聞こえてきた。丸聞こえと言う程大きくないが、談笑と称するほど和やかではなさそう。高瀬は少しだけその会話に耳をそばだてた後、そっと襖に手を掛けた。が、高瀬が詫びの口上を述べるより先に李九郎は立ち上がり空

の徳利を盆にまとめ、脱兎の如く身を翻した。
「おれはこれで。あとはごゆっくり」
　普段が端正で静かな所作であるだけに、慌ただしく出ていった李九郎のらしくなさに高瀬は思わず聞いてしまった。
「銀之助さん、うちの若い衆に何しましたの」
「いや、何も。普通に喋っていただけなのだがなあ」
　逃げられてしまった、と。ははと笑って見せる銀之助の顔を高瀬はじっと観察する。眉を下げるのは銀之助が愛想笑いするときの癖だ。しかし今は目尻も一緒に下がっている。寂しそうに、自嘲するように、嬉しそうに。
「どうした。もしかして妬いたのか？」
　高瀬の目線に合わせるように銀之助が問う。下がった目尻が元に戻った。頬骨のあたりが微かに強張りながら、口元と声色だけは器用におどけさせて。
「まあ、悪い男でござりんす。思ってもいないことを」
　煙管に刻み煙草を詰めながら何気ない風に言ってみる。今までの態度と先の様子。高瀬はもうほとんど確信していた。後はどこまで銀之助が高瀬という他人を許す器量があるかだ。
「安心してくださいな。悋気なんてとうの昔にどぶに捨てちまいましたよ」
　努めて優しく穏やかに。しかし哀れにも銀之助はすっかり固まってしまった。火をつけた煙管を差し出しても、受け取るどころか見ようともしない。仕方なく高瀬は自ら吸い口を咥えた。
「ねえ、銀之助さん。あちきとおまえさまの仲じゃあないの。どうか正直に言っておくんなんし」
　高瀬は煙を肺一杯に吸い込むと、ふう、と長く吐き出した。確信はしていてもこの先は高瀬にとっても博打だ。勝って得るものは何も無し。負ければ今一番の金づるを失うことになる。
　大きく首を反らせ、天井を目掛けて息を吐く。間違っても銀之助に紫煙が掛からぬように、気をやる時のように喉を晒して。
「ぬしさん、あんた女が嫌いでしょう」
　カン、と煙管を打ち付ける音が響き渡る。
　銀之助は呆けたように打ち付けた煙管の雁首を見つめている。襖隔てた向こう側から聞こえる歓声。嬌声。呻き声。外の雑踏。まだそんなに遅い時間ではないのに、今この瞬間この座敷の中はどこからも隔絶された、薄暗い静謐に包まれていた。

　どれくらいそうしていただろうか。コトン、と煙管を置いた音を合図に時は動き出した。
「……怒ったか？」
　弱弱しく呟かれた言葉に高瀬は拍子抜けした。小癪なと罵られることも、二度と顔を合わせるかと殴られることも覚悟していたのに、この男ときたら叱られた子供のような

顔で高瀬を見つめていた。全く優しいのか意気地がないのか、高瀬は思わず呆れ返ってしまった。
「別に怒っちゃいませんよ。これっぽっちも。でも気になるじゃあないですか」
　高瀬は本心からそう言った。本当に、心の底から、自分が納得するためだけの問いであったのだから。それでも半信半疑なのだろう。目の前の若き偉丈夫は常の貫禄も形無しに、途方に暮れた迷子のような顔をしていた。
「本当に」
「ええ、本当に」
「怒っていいことだと思うぞ」
「生憎この顔に生まれてから気位もどぶに捨てた性質でしてね」
「でも、誓って高瀬のことは嫌いじゃない。そもそも嫌いなら通ったりしない。.....信じられるか？」
「あちきが怒ってないと信じてくれるなら、信じましょう」
　安くない金を払って登楼 (あが) る吉原遊郭の座敷であるというのに、まるで駄々っ子を宥めるが如き会話だ。何度か問答を繰り返し、それで漸く腹を括ったのか。猪口に残った酒を一気に呷ると、三味線を、と呟いた。
「都々逸を聞かせてくれ。そうしながら話そうか」
　三味線を手に取ると、調子を整えるようにべべん、と二、三度弦を弾く。ずっと不安そうだった銀之助の頬が微かに綻んだ。
「ああ、やはりお前の三味線は良い。今度新しいやつを送ろう。今日の詫びと、礼に」

　察しておくれよ花ならつぼみ　咲かぬところに味がある

「嫌になったんだ。世継ぎを急かされるのも、そのための女をあてがわれるのも、そんな家を取り巻く全てが。浮世から逃げたくて放蕩してみたけど、これがまた性に合わないときた」

　君は吉野の千本桜　色香よけれどきが多い

「女が嫌で女に逃げるってのもまあ、あべこべな話ですねえ。それも不器量な年増女なんて。で、下手物 (げてもの) 食いはどうでした？」

　上を思えば限りが無いと　下を見て咲く百合の花

「下手物だなんて、そんな。ああでも、若くて美しい女の相手は酷く疲れるのだ。苦労を知る女の寛容さに俺は甘えたかったのかもしれない」

　咲いた花なら散らねばならぬ　恨むまいぞえ小夜嵐

「女が嫌なら陰間に行けばいいでしょうに。同じ商売してるなら苦労も同じじゃないですかい」

　惚れて通えば千里も一里　逢わで帰ればまた千里

「いいや、野郎買いはもっと駄目だ。男は一番良いのを知っている」

　恋に焦がれて鳴く蝉よりも　鳴かぬ蛍が身を焦がす

「なあ高瀬。共に死んでくれと言ったら、お前は来てくれるか」

　惚れた証拠にゃお前の癖が　みんな私の癖になる

「絶対に行くもんですか。旦那の心の中に誰がいるのか、あててご覧にいれましょうか」

　星の数ほど男はあれど　月と見るのはぬしばかり

　あるかないかの微かな足音が、高瀬の座敷の前で止まった。そろそろ来るだろうと思っていたのだ。いや、むしろ高瀬自身が来てほしいと願っていた、というのが正しい。
「入っておいで。銀之助さんはいないよ」
　逡巡したような僅かな間を置いた後、しゅるりと襖が開く。今宵は見事な満月だ。李

九郎の夕顔のようなかんばせの決まり悪げに俯く様が、窓辺の高瀬には良く見えた。
「もう帰ったのですか」
「大門が閉まる前にね。無理に床入りもしなかったし」
「.....意気地なし」
　ぽそっと呟かれた言葉に高瀬は驚いた。酔っ払いの粗相の後始末さえ、この男は顔色一つ変えずにやる。先の戸惑ったような空白も彼の口から客の文句を聞くのも、初めてのことだった。
「ねえ李九郎。あんた、銀之助さんの何なのさ」
　ふと何気なく口に出した。が、言ってから、サッと李九郎の顔が青ざめた。その豹変ぶりに高瀬は再び驚いた。何も言えず、ただぷるぷると首を振る様子に、これがあの「お人形さん」かと自分の目を疑いかけた。
「悪かったよ。あんたを責めたい訳じゃあないんだ。ただあの御仁、明らかにあんた目当てだろ？ だから場合によっちゃあ、あたしが一肌脱いでもいいと言いたかったんだ」
「.....どういう意味ですか」
「あたしが手引茶屋になってやろうかって話だ」
「冗談じゃない」
　李九郎は言った。言い切ると、薄墨色の闇の中で李九郎の顔がくしゃりと歪んだ。自分で言い放った言葉に自分で傷ついたように。その矛盾に李九郎は笑いもせずに自嘲した。壁に背を預けずるずると座り込み、膝を抱えて縮こまる様が、銀之助の情けない表情といやに重なって見えた。
　やがてぽつりと蚊の鳴くような声がした。
「念者でした。あの方はおれの。昔の話ですが」
「となると、あんたも武家の出かい」
「借金にまみれて蒸発した貧乏旗本の家ですよ。今はもう武士のつもりもありません。でも若衆にとっての念者は、主であり、師であり、兄であり.....単なる痴情の関係ではないのです。今でさえ、烏滸がましくもそう思っています」
『ずっと心配していた。まさかこんな所にいたとは』
『.....そうですか』
『随分痩せているが、ちゃんと食っているのか』
『.....はい』
『なあ、こっちに戻る気はないか。俺が便宜を図ってやる』
『.....酒が無くなりそうですね。誰か呼びましょうか』
『誤魔化すな。李九郎、こちらを向け。目を逸らすな』

　高瀬は数刻前に盗み聞いた二人の会話に思いを馳せた。どんな口説かと思えば、やけに馴れ馴れしい口調を不思議に思ったのだ。それは恋人へ囁く甘言というよりむしろ、長らく離れていた家族に対する言葉のように聞こえた。
　しかし、そうであるなら尚更解せない。互いに想い合っているのなら遂げてしまえばいいものを、李九郎はかくも拒絶する。高瀬は別に客を取られたとかいう恪気は無い。真

面目で有能な李九郎は楼主にも遣り手婆からも気に入られているから、この程度のおイタなら目をつぶるだろうと踏んでいた。
　それを聞いても、李九郎は首を横に振るばかり。姿勢を正して高瀬に向き合いながら、その目は決して高瀬を見ようとしない。気付いているかもしれませんが、と前置きをすると、殊更小さな声でこんなことをのたまった。
「あの方はやんごとなき血筋の方です。こんな所に通うこと自体おかしな程に。種を残し、子を育み、血を繋ぐ。それはあの家に生まれた者の義務なのですから」
　高瀬は大きくため息をついた。念若の関係が如何なるものか、吉原育ちの高瀬にはよく分からない。ただ、この二人はよく似ていた。凛とした外面も端正な雰囲気も、一皮剥いた中にある愚図っ子のような女々しさも。
「分かったよ。これ以上突っ込むのも無粋だろうしね。あんたがいいならそれでいいさ」
　李九郎は何も言わず、三つ指ついて礼をした。そうしてそのまま立ち去ろうとした。相も変わらずきちっとした背中がこちらに向く――その直前、つい高瀬は口を滑らせた。
「一つくらい、本音をこぼしてもいいじゃないか」
　銀之助さんみたいに。
　立ち上がろうと膝を立てた姿勢のまま、李九郎はピタリと止まった。彼が動き出すまで、あるいは何か言葉を発するまで、高瀬は身じろぎ一つ挟まずに待った。
「おれは」
　殆ど吐息のような声だった。意地か見栄か、この不器用な男たちにとって本音を言うという行為はそこまで難しいことなのだろうか。
「お傍を辞した身といえども、おれはあの方に殉ずるつもりで生きてきました」
　自ら進んで雁字搦めになっている。高瀬にはそう見えたし、それが理解できない。ただ聞いてやることしか、否、吐かせることしかできなかった。
「弟分の忠義を金で買おうだなんて無様にも程がある。おれは兄者にあこがれていたい」
　最後に一礼すると、今度こそ李九郎は襖を開けて出ていった。

　火事だ、と叫び声が聞こえた。いつかの日と同じように野分と茶屋で時間を潰しているときのことだった。のどかな昼前を叩き壊すかのように、火の見櫓の鐘が吉原中に響き渡った。
　昔から吉原には火事が多い。想い人に会いたいがために火を放った八百屋お七に倣ってか、足抜け、駆け落ちの手段として火事が利用されたからだ。高瀬も野分も火事は初めてじゃあない。焼け出されて見世が駄目になったことも、応急処置として大門の外の仮宅で生活したこともある。
　しかし、さしもの高瀬も頭が真っ白になった。
「河合屋だ！ 一丁目の河合屋から火が上がった！」
　少し前の火事では大門近くから火の手が上がり、そこから逃げ出そうとした女たちは皆、無慈悲にも閉められた大門の前で真っ黒焦げになって死んだらしい。そのとき高瀬たちは大門とは反対側の非常門の方へ避難したため全員事なきを得た。高瀬も野分も無意

識に当時を思い出したのかもしれない。碌に頭が回らぬままただ二人で同じ方向に走って、漸く周りが認識できるようになった時には既に非常門の手前まで来ていた。
「姐さん。野分姐さん、高瀬姐さん、こっち」
　呼ばれた声にハッとすると、河合屋の者たちが固まっていた。聞けば、そこにいる連中は皆、偶然河合屋から外出していたか、火の手が上がって優先的に逃がされた者たちらしい。それでも最悪を覚悟していた高瀬からすれば随分と多くの人が無事だった。野分の妹分の禿が怖かったと腰に抱き着いて泣き出した。高瀬は安心して腰が抜けそうになった。座り込まずに済んだのは、誰かが肩を掴んでくれたからだ。顔を上げると、怖い顔をした李九郎がいた。
「銀之助さまは」
　高瀬は始め何を言っているか理解できなかった。今日は差し紙をもらっていない。来るとは聞いていない。昼が過ぎたら大人しく張見世に上がるつもりでいた。
「どうして一緒じゃないんですか。さっきあの方がいらっしゃって、座敷に、あの方は」
「ちょっと落ち着きな、李九郎。高瀬さんは何も知らないよ。さっきまで一緒に茶ァしばいてたあたしが保証する。名代に誰か……は取らないんだっけ、あの旦那」
「名代。そうだ、真木さん」
　真木。その名を聞いた瞬間、嫌な予感に背筋が凍った。同時に一際甲高い叫び声がこちらに近づいて来た。
「嫌、嫌！ 離して！ あたしはあの人と死ぬんだ！」
「勘弁、して、くださいよぉ……はあ、死ぬかと思った」
　ふらふらとこちらに近寄ってくるのは、顔を煤で真っ黒にした猿吉だった。右肩に担ぐ喚く少女を李九郎に、左手に抱える上等な風呂敷包みを一番近くにいた高瀬に押し付けると、そのまま大の字に倒れ込んだ。この小男が、火の手近くからこの二つを守って走ったことは火を見るより明らか。
　女は李九郎の支えも拒み、地べたに座り込み狂ったように泣き喚いていた。髪も崩れ、着物も汚れ、瑞々しかった肌の所々に紫の痣をつけて。そこまで認識してようやくその少女が真木であることに気が付いた。
「おい、しっかり！ エテ公、真木に何があったんだ」
　野分が汚れも厭わず猿吉を抱き上げ強く揺すぶった。いつもなら天女さまのお迎えだくらい言うところを、猿吉は荒い息を繰り返し、上手く言葉を紡げていない。
「真木さん、銀之助さまは」
「待って、行かないで、どうして。一緒に連れてってくれるって約束したのに」
　恐慌状態の真木に今にも糸の切れそうな李九郎。平行線になりそうなところに割って入ったのは、少しだけ落ち着き口を動かせるようになった猿吉のガラガラ声だった。
「何があったか、あっしもわかんねえ……でも、火がついて逃げようって時に、これと真木さんが飛んで来やした……二階の座敷から。真木さん、あんた……」
「だって、だって！ 一緒に死んでくれるって……銀之助さん、そう言ってくれたのに！」

『なあ高瀬。共に死んでくれと言ったら、お前は来てくれるか』

都々逸の合間の言葉が甦る。冗談だと思った。何故なら心中は男と女が結ばれるためにやることなのだから。銀之助は高瀬を愛していなかったから。

誰でもよかったのか？

違う。直前になって真木は放り出された。

ならば。

「李九郎。行きな」

高瀬の言葉に、野分も猿吉も、狂い叫ぶ真木でさえ驚いたように目を見開いた。だが一番驚いていたのは、青空に立ち上る黒煙を食い入るように見つめていた、白い顔の若造だった。

「……いいんですか」

「ここにゃ金もクソも無えよ。手遅れ、はあるかもだけど」

李九郎はもう一度、門の向こうで上がる火の手に目を向け、そして高瀬に、野分に真木に猿吉に、生き延びた河合屋の人々に頭を下げると、煤の風の吹く方へ駆け出して行った。

「え、ちょっと、李九郎！ 一体全体どういうことだい」

引き留めようとした野分を、高瀬は黙って制する。あっという間に李九郎の背中は小さく、そして見えなくなってしまった。用心棒の真似事ができる程度に武芸の心得があることは知っていたが、あそこまで足が速いとは知らなかった。もしくは知音のもとに走るとき人は韋駄天と化すのだろうか。どちらにせよ、高瀬には知りようのないことだ。

暫く呆けたように李九郎を見送った後、そういえばと高瀬は受け取った風呂敷包みを掲げて聞いた。

「そうだ、真木。これは何だい」

「あ……それは、銀之助さんが、高瀬姐さんにって……」

しどろもどろながら、真木は答えた。先程の李九郎が余程衝撃的だったのか、すっかり涙が引っ込んでしまったようだった。

高瀬はその場で風呂敷包みを解き始めた。見るからに上質な布を地べたに置くのは気が引けたが、今この瞬間に見るべきだと感じたのだ。出てきたのは桐の箱だった。高瀬の片腕よりは長いが両腕よりは短い。蓋を開け、またもや上等な布の包みを剥ぐと、姿を現したのは一棹の三味線だった。

ああ、そういえば言っていた。詫びと礼に新しい三味線を送ると。高瀬は日に掲げるようにその形見を眺めた。深い紅木の棹。胴の外側の煌びやかな胴掛けの刺繍も内側の綾杉の繊細な模様も溜息が漏れるほど見事だった。象牙と鼈甲でできた撥の僅かな窪みが指に引っかかった。その凹凸を指の腹でなぞると、大きな丸に三つの網のようなひれの紋。

三つ葉葵。

高瀬は浅く息を吸った。

花は散りぎわ男は度胸　いのち一つはすてどころ

べべんと鳴らした弦の音は、腹の底に染み渡る良い音だった。高瀬は着物が汚れるのも辞さずにその場に膝をついた。もう一度べんと弾いて息を整える。そうして誰に聞かせるでもなく、都々逸を詠い始めた。

およそ世間にせつないものは　惚れた三字に義理の二字

周りの人々が驚いたように高瀬を見ている気がするし、火災の喧騒になにも気付いていない気もする。高瀬自身、声も弦音もまるで聞こえなかった。好きでもない女と死を選ぼうとした男が見事と褒めた音が、何も。

諦めましたよどう諦めた　諦め切れぬと諦めた

視界の端で野分が手を合わせているのが見えた。思えば野分は随分と高瀬と銀之助を気にかけていた。それが友情なのか野次馬根性なのかは分からないが、野分には本当のことを話すべきだろう。聡い彼女のことだから、既に何となく察しているだろうけど。

真木は泣いていた。さっきまでが嘘のように、静かに涙を零していた。本来は聞き分けの良い娘なのだ。その真木が岡惚れ一つでここまで狂った。女郎にとって恋は破滅を呼ぶ。それを知るには真木は若すぎて、遅すぎた。しかし、後でどんなお咎めがあるにせよ、この子も真実を知らなくてはならない。猿吉も禿も、みんなみんな袖で顔を覆っていた。「お人形さん」なんて、憧憬半分遠巻き半分で呼んでいたのに。こんなに愛されていたなんて、きっと李九郎は知らずに行った。知らなくていいさ。あんたはつがいへの忠義だけを持って逝けばいい。

しかし、こうも慕われては関係者の高瀬は詰問を逃れられないだろう。少し思案したが、まあいいかと開き直った。死人に口無し。泣かせた分の手間賃だ。これだけ沢山聴き手もいれば、六文と言わず十二文くらいは簡単に稼げるだろうさ。

花に嵐のたとえもあるさ　さよならだけが人生だ

火の手は益々勢いを増し、ごうと鳴る紅炎と黒煙はこちらにまで迫ってくるように見える。避難した人々は炎が吠える度に恐れ戦く。前回のようになるなら、もう大門は駄

目だろう。どうせならこの非常門も燃えてしまえ。この火門 (かもん) から鉄砲玉の如く飛び出した菊一文字を、それを待つ鞘を、悼み弔う門 (かど) 火 (び) となれと、声を張り上げて祈った。

あとがき

もうすぐ文芸部に入って四年目になるけど、初めてあとがきを書きます。まずは編集さんへ謝罪を。〆切破ってすみません！ でも伸ばしてくれてありがとう！

さて、どうして急にあとがきなんざ書こうと思い立ったかというと、小説を書く人ならば多くが体験しているであろう問題を今回如実に実感したからです。その名も「キャラ勝手に動く問題」。この話ですが、大筋は初期構想からそこまで変わっていないにもかかわらず、キャラ付けは高瀬以外ほとんど変わりました。何故だ。

まず野郎ども。あまりにも女々しい。どうしてこうなった。大らかさの中に影のある男前 Œ 人形のような美少年というコンセプトだったはずなのに、二人のじれってえことウジウジしていること。銀之助は気づいたら叱られた子供みたいにしゅんとしてたし、李九郎は途中からどんどん「お人形さんとは？」となったし.....。とあるゲームの「女々しいとは男のためにある言葉だ」という台詞をこんな形で納得するとは。

そして相対するように男前になっていく女衆。当初は野分も真木も名前だけしか出さない予定だったのに、それじゃあ何かなあ、と思った結果がこれだよ。天女のような江戸っ子の姉御肌に恋に狂った瑞々しい乙女。どうしてこうなった (二回目)。名前のあるモブなんて許せなかったのか？ 特に野分さんなんて、困ったときの野分さんみたいな便利キャラになりそうな予感までします。

そして猿吉。左之吉→猿吉→エテ公のくだりがやりたかっただけなんですけどねえ実際。気付いたら野分姐さんと仲良しに。ここはマジでキャラが勝手に動きました。

あとは都々逸。不器量な高瀬にお仕事中何やらせようかと調べたが最後。〆切に追われながら都々逸のエモみに撃ち抜かれていた不届き者はここです。こんなに引用する予定はなかった。みんな、都々逸はいいぞ。

私はプロットを書かないタイプなのでこんなにもあっちこっち行くのだとは思いますけど、別にこれがどうということはありません。完全に蛇足です。ただ今回どうしても誰かに言いたかったがために、残り一ページ余りを書かせていただきました。キャラは、勝手に、動くもの。

P.S.

私はキャラの名前や地の文の表現に小ネタ挟むの大好きマンなので、もし「これこういう意図じゃね」と思った方がいたら教えて下さるとうれしいです。当たるも八卦当たらぬも八卦。例え作者の意図とは違っても、そこから予期せぬ解釈が生まれたりして面白いです。まあ、今回はそんなに仕込んでないのですが。

眼鏡めがねメガネ

眼鏡めがねメガネ

中村

「メガネの方が賢そーだろーが！」

二階から飛び降りた彼の主張である。中身小学生か。

麗らかな陽気と古典の授業。平安貴族さながらの優雅さではあるが、残念ながら僕たち高校生にとっては退屈な授業の一つに過ぎない。もっと違う場面で出会っていれば楽しめるだろうか、いや、ない。

おじいちゃん先生の音読は子守唄の様で、また一つ欠伸をかみ殺す。最低限ノートは取りたいが、それもすでに面倒だ。シャーペンをしまって外を見る。青い空に、白い雲。中庭には名前も知らない綺麗な花が咲いている。用務員さん、手入れお疲れさまです。ありふれた日常である。

「だから、なんでベンキョーすんだよ！　俺はヒーローになんの。ベンキョーなんて、ひつよーねーの。てか、数学なのに英語使うなよ！」

肩が揺れた。眠ってないからな。断じて。ちょっと由香ちゃんと花見に行ってただけだからな。うん。そそくさと眼鏡を直す。

平穏な日常は素晴らしい。小鳥が囀り、風が爽やかに吹き抜ける。隣の三組は数学だろうか。

「なんだよ、ｘだ、ｙだ、って。もっと分かりやすくしろよ。いちいちプラスだのマイナスだの英語使うなよ。カッコよくねぇし！　むしろダセェからな！」

数学も良いが古典も素晴らしいものだ。言うなれば、先人の知識を紐解くものであり、日常を綴ったものであり、尊いものだ。それを解説する先生の、なんと凄いことか。頭が下がる。古典バンザイ。

「もう、分っかんねーし！」

「うっさいわ！　反省してんのか、井田！　廊下に立ってんのに騒ぐとか、何なの？

先生への嫌がらせなの？　もう、ホント頼むから静かにしてて。まじで。」

「お！　せんせー、授業終わった？　腹減ったんだけど、今日のお昼ご飯何？　俺にもちょーだい」
「ホント、喋るな馬鹿野郎。あと二十分だ。もし、静かにしていたなら、卵焼きをくれてやろう」
　マジで！　せんせー、大好き、という声を聴きつつお昼ご飯に想いを馳せる。僕のお弁当にも卵焼きが入っているだろうか。
　もはや日常と言っていいだろう。クラスの誰も動じず、またやってる、と笑う程度である。隣のクラスの井田君が騒ぎ出すことは、教頭のカツラがずれている頻度に等しく、もはやカツラが井田君バロメーターである、と言っても過言ではない。
　さようなら睡眠、こんにちは空腹。主張してくる胃袋を宥めて欠伸をかみ殺す。あとちょっと頑張ろう。きっと井田君は二十分も我慢ができず騒ぐだろう。僕はそっちにイチゴ牛乳でもかけようかな。

「はっら、へったぁー」
　授業終わりのチャイムが鳴る。長い闘いだった。せんせーは容赦なくバシバシ叩くし、メガネがずれるし最悪だった。高いんだぞ。バイト代はたいて買った俺の気持ちになってみろ。
　コンビニで買ったパンを持って二組に入る。窓際の一番後ろ、黒ぶち眼鏡とピンクギャル。
「おっそいわよ。来なくても良かったのに」
「ああ？」
「まあまあ、桐原さんもそのへんで。井田君、遅かったね。購買にでも行ってたの？」
「ま、そんなとこ」
　曖昧に笑って席に着く。窓を背にした誕生日席。いつもの配置。
　袋を開けてクリームパンをかじる。実際は違う。四限の騒ぎがバレて禿ジジイに叱られたのだ。カツラずれてんのに、なぁにが身だしなみを整えろ、だ。お前が整えろっての。が、そんなカッコ悪いことコイツ等に言えるかよ。
　眼鏡もギャルも深く突っ込まず雑談に戻った。
「桐原さん、それだけで足りるの？　トマトあげようか？」
「あら？　レディの食事に口出しなんて偉くなったわね。そんなに言うなら、貰ってあげようかしら？　アンタの唐揚げ。トマトは食べなさい。まさか嫌いなわけでもないでしょう？　まさか、嫌いなものをレディに押し付けるなんて、ねぇ？」
「え、いや、あはは.....」
　二人の話を聞きつつ焼きそばパンに手を伸ばす。焼きそばパンを作ったヤツは天才だと思う。カツカレー作るぐらいに。マジで。しょっぱいソースが癖になるしパンも焼きそばもケンカしねぇ。もう、焼きそばパンになるために作られたんじゃないかと思う。そして、甘いモンの後にしょっぱいモンは最強だ。俺天才。

　そんな風に感動していたら目線を感じる。心配と変なものを見る、二種類の。
「あ？　なんだよ」
「アンタが静かなんて、今日は槍でも降るのかしら。拾い食いでもしたの？　馬鹿犬」
「ははは、さっきできたらよかったのにね。佐藤先生カンカンだったでしょ。井田君と先生のやり取り、こっちまで聞こえてたよ」
「あら？　北見君も？　私もせっかくの日本史の授業が台無しになりましたわ」
「うっせ。だって分かんねぇしつまんねぇもん。あと焼きそばパンがうめえんだから、しょーがねーだろ」
　生温い目でこっちを見るな。いたたまれなくなって眼鏡のトマトを食べる。うめぇ。メガネをカチャカチャして横を向く。その目を止めろ。ギャルまでしやがって。
　俺の心情を察してか、眼鏡が話題を変える。
「あ、桐原さん、メガネ新品だね。ピンク色も似合ってると思うよ」
「ありがとう。ずっと欲しかったの。気づくなんて、流石ね。どこぞの犬と違って」
「あんだと？　てか、テメェのメガネなんざ興味ねーわ」
「野蛮なんだから。レディには気を遣いなさい？」
「あはは、相変わらず仲良しだね」
「「はあ？」」
　ギャルと一緒の反応しちまった。それ見て眼鏡は笑ってるし。あーあ、はずいな。こんな、ギャルとか、な、仲良しってわけじゃなくもねぇし。
　照れる俺とギャルをひとしきり笑って眼鏡に足蹴りをお見舞いする。痛い痛い、と言いつつ、何か思いついたのか俺に向き直る。
「そういえば、今更かもしれないけど、井田君ってなんで眼鏡かけてるの？　体育の時外してるし、伊達メガネだよね？」
「あー、それは.....」
「チーカチャン、あっそびまショー」
「おうおう、オレサマがやってきてやったぞー」
「出でこいや、ちーかーちゃーん」
　汚ぇクソ野郎共の声が中庭からする。中庭を荒らしているのは、今時古臭いのぼせ上った田舎ヤンキーたちだ。短ランにボンタン、頭は左から坊主、モヒカン、ドレッドヘアときた。釘バットまでもってやがる。無視だ、無視。
　怯えているだろう眼鏡とギャルの様子を見る。そんなことは無かった。不快そうな目をやめろ。ビビるだろ、俺が。ギャルはともかく、眼鏡は何だその目。そこら辺のヤクザより怖ぇぞ。
「名前が女なら、根性も女ってか？」
「ギャハハハ、名前みてぇにビビッてんのか、おーおー、可愛いねぇ、ちーかちゃん？」
「女の子みてぇに小っちゃかったし、縮んでんじゃねぇのか？」
　下卑た笑い声とやっすい挑発。が、名前と身長とプライドを傷つけられちゃあ、黙ってられない。
「これ持っとけ」
「え、本当に伊達メガネだよね？　外して大丈夫？」

「やるなら、徹底的にしなさいよね。分かっているでしょうけど。面倒臭がって怠けるからこうなるのよ、馬鹿犬。」
「当たり前だろうがぁ」
　後ろの窓を開け、枠に足をかける。息を吸って身を躍らせる。
「メガネしてる方が賢そーだろーが！」

　訳の分からない主張をした井田を見下ろす。白いワイシャツに褐色の肌。黒髪が特徴的な髪形の猿共を翻弄している。運動部かと突っ込みを入れたくなる体つきは日々の喧嘩と逃走で鍛えられたものだ。右ストレートでモヒカンをダウンさせる。後ろからの釘バットを左に避けて、勢いのままドレッドヘアに回し蹴りを決める。ツーヒット。残った坊主を睨みゆっくりと歩み寄る。逃げようと後ろ見た瞬間、飛び蹴りが後頭部を直撃する。倒れた坊主頭には足跡が綺麗に残っている。スリーヒット。完全に伸びた猿共を丁寧に殴っていく。顔を二倍ほど膨れさせて満足したのか、こちらを見上げる。興奮した大きな青い瞳と長めの黒髪。もう少しで結べるだろう。確かに女の子っぽいかもしれない。低身長だし。可愛げのなさと騒がしさで打ち消しているのかもしれない。その面でいうと、隣の北見の方が女の子らしい。
　成り行きを見ていた多くの野次馬が散っていく。右隣にいた北見もその一人だったようで早々に席についている。お茶を覚ましている姿は大人しい少女のようでもある。
　こげ茶の瞳とマッシュヘアに黒ぶち眼鏡。細身の色白。運動は得意ではないらしい。頼りなさげに見えるが、若干の毒舌と何を考えているか分からない不気味さが漂っている、と思う。
　こちらの視線に気づいたのか、ニコリ、という効果音がつきそうな笑顔とともに顔を上げる。
「井田君、絶好調だったね」
「そうね。いつもあれくらいしないから後々面倒なのよ」
「はは、桐原さんは辛口だね」
　人畜無害そうな見た目に反して、なかなか物を言う北見が嫌いではないが、ときに癇に障る。
　中庭を見下ろすと井田はもういなくなっていた。正門から戻ってくるか、午後からさぼるのか。後者だろう。持て余した熱をどこかで発散するのだろう。
　溜息を吐き、席に戻る。セミロングの髪が邪魔くさい。三限にゴムが切れてしまい、替えのゴムを借り忘れていた。いっそショートにしてみようかしら、と悶々していると、北見が何か言ったようでこちらを伺っている。
「なにかしら？」
「えっと、桐原さんはなんで眼鏡かけてるのかな、って」
　先ほどの井田に対する質問は、私にも繋がるらしい。興味津々ではなく、純粋さでもなく、得体のしれない暗い何かを瞳に宿している。逆光の為だろうか。怖く感じる。
「化粧が盛らないときの必須アイテム、もしくは、眼鏡込みのコーデをするためのもの、

かしら.....。服や靴と同じように、自分を綺麗にするものよ」

今日だってそうだ。新調したピンク色の丸眼鏡に合う髪形と化粧などを考えた。甘くなりすぎないようにピンクリップは艶を出しすぎず、こげ茶色のカラコンとアイライン＆アイシャドウを使っている。目を付けられない程度に髪を巻いてポニーテールにしていたのだ。ネイルもピンクで統一感を出した。春色コーデである。が、井田も北見も褒めてはくれない。全く男子共は.....。

自分で聞いておきながら興味なさそうにお茶を飲んでいる。気の抜けた、ふーん、という相槌で考え込んでしまった。なんとなくいたたまれなくなり、下を向き、枝毛を探す。静寂が落ちる。そのまま予鈴がなった。

眼鏡とは、視力を矯正してくれるものであり僕たち弱視者にとってマホウノアイテムである。要は、障害者が健常者と同じ生活を送るための手助けをしてくれる。確かに、装飾要素は否めないが、それにしたって、あんまりでなはないだろうか。眼鏡キャラが賢い、という設定を編み出したのは誰だろうか。ハードルが高くなるだろう。というか、眼鏡を使っても賢くはならないぞ。勉強しろや。お洒落用に伊達眼鏡なるものを開発した人よ。そんなに流行が作りたかったのだろうか。ありがとう。おかげで眼鏡が浮きません。けど、限度と節度が欲しかったです。

全く授業に集中できない。教科書は開いているが、ポーズだけだ。ノートなんて取っていられない。顕微鏡だの細胞だの説明されても、今それどころではないのです、先生。

何という一大事。親友二人に裏切られたのです。眼鏡三人、余り者で固まっていたら、なんと二人は健常者ではありませんか。かまをかけて質問したら、なんとあっさり真実が明るみに出ました。青天の霹靂です。コンタクトがはびこり、健常者と弱者の区別がつかなくなった現代では、眼鏡は仲間意識を生むアイテムにも成り得たのです。そのなかで、裏切りを許す伊達眼鏡よ。お前は認めないんだからな。別に、眼鏡のせいでガリ勉、陰キャ、といじられやすかったことを根に持っているわけじゃないからな。本当だからな。

要は、伊達眼鏡が生理的に受け付けないのである。しかし、高校になって初めてできた友人を失いたくはない。そしてこんなことを言えるものか。ああ、神様。僕に友人をつくるなとおっしゃるのでしょうか。

いいえ、これは試練なのでしょう。僕の生活を豊かにするための。同じ形状でありながら、用途の違うものを排除する害悪とはなってはいけない、そう教えているのですね。

そうであるならば、僕は努力を惜しみません。今後とも二人と仲良くいたしましょう。

固く決意した僕は空を見上げる。

雲一つない青空がどこまでも広がっていた。

了

あとがき

出オチと勢いを目指しました。あまり推敲していないので、読みにくい部分がありましたら申し訳ございません。段々とキャラ崩壊していく人を書きたかったのです。楽しかったです。

眼鏡キャラが眼鏡を外すときは「本気を出すため」ではなく「死を覚悟したから（恐怖和らぐ）」又は「自分も見方も巻き込んだ無差別攻撃をするため」的な情報を仕入れて、ちょっと書いてみました。

奥付

案山子　2020 年冬号 https://puboo.jp/book/130655
著者：新潟大学文芸部著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile
感想はこちらのコメントへ　https://puboo.jp/book/130655
電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子　二〇二〇冬

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社